

# 巨樹・巨木調査と「源流資源マップ」作成

2009年

中村 文明  
多摩川源流研究所 所長

共同研究者：石川重人・石坂慎吾・中村真里・北山郁人



# 巨樹・巨木など源流資源調査報告書

2009年3月30日  
多摩川源流研究所 中村文明



# 巨樹・巨木など源流資源調査報告書

2009年3月30日

多摩川源流研究所 中村文明

## (1) 調査・試験研究の目的とその成果

源流の計り知れない価値と可能性の探求

多摩川源流に位置する小菅村において、巨樹・巨木及び文化的歴史的資源を調査し、その成果を多摩川源流資源マップ（小菅版）にまとめあげるのが、今回の調査・試験研究の目的である。厳しい環境に耐えてたくましく成長する巨樹・巨木に触れることを通して、地元を始め流域の子供たちや市民に自然環境の大切さや源流の魅力を理解する機会を提供したいと考えている。この間、とうきゅう環境浄化財団の支援を頂いて、多摩川源流絵図三部作を完成させることができた。源流域の滝や淵、沢や尾根の地名とその由来を聞き取り、実踏調査を積み重ねて作り上げた源流絵図は、源流の魅力と価値を広く流域の市民に普及する大きな武器となり、源流資源の調査研究及び多摩川源流研究所設立の大きな礎となった。

今、源流域は急速な過疎化が進展するなど厳しい社会経済環境のなかにあるが、小菅村では内閣府の支援による源流元気再生プロジェクトが実施され、さらに東京農業大学による多摩川源流大学が設置されるなど、源流ネットワークが広がり、源流へ新しい光が注がれている。この新しい流れを持続させ、定着させる上で大切なことは、源流域の自然や歴史、文化などの資源を科学的に調査研究し、そのデータを蓄積すると共に、その成果を上下流交流や自然体験のテキストや資料として、誰にでも分かるような形としてまとめあげ、源流資源の魅力やその素晴らしさを普及していくことである。源流資源調査は、対象が広く、急峻な山々が大きな壁となって立ちほだかるなど地道な骨の折れる仕事であるが、源流大学と連携し源流大学の学生達とスクラム組んで、新しい挑戦としてこの事業に取り組んだ。

小菅村の巨樹・巨木247本を確認

具体的な成果として、源流資源調査の成果をまとめ上げた「源流資源マップ」を作成することができた。また、小菅村の巨樹・巨木を247本見出し、巨樹は、9本確認することができた。

1) 山沢入りの大トチ

728cm

|              |          |
|--------------|----------|
| 2) 余沢のケヤキ    | 6 6 5 cm |
| 3) 交番前のトチ    | 6 1 5 cm |
| 4) 鳥小屋沢のシオジ  | 5 5 4 cm |
| 5) 御鷹神社のケヤキ  | 5 3 0 cm |
| 6) 小森神社のスギ   | 5 3 0 cm |
| 7) 大マトイのミズナラ | 5 2 8 cm |
| 8) 川入のカツラ    | 5 1 5 cm |
| 9) 山沢入りのトチ   | 5 0 4 cm |

樹種別では、ミズナラ（96本）が圧倒的に多かった。小菅村の北と南の尾根の双方について、ミズナラとクリの混雑した大群生地が広がっていた。明治34年以来東京都の水源林として、また県有林として大切に維持管理されてきた結果といえよう。さらにツガ（25本）、シオジ（22本）、ブナ（20本）、モミ（16本）、トチ、ケヤキ、クリ（各12本）と続いた。特にオオマトイと狩場山・牛ノ寝、ノメダワには、巨木が林立し、極めて自然度の高い森林を形作っていた。また、溪谷沿いには、シオジが群生していた。ケヤキは鎮守の森に多く見られ、トチは窪地の風当たりの弱いところに生き残っていた。巨樹・巨木は、豊かな源流域の森のシンボルであると痛感した。

## （2）小菅村の源流資源の調査・研究の背景と動機

御鷹神社の巨樹・巨木が出発点となって

今回の小菅村における源流資源（巨樹・巨木）調査のきっかけになったのは、今から8年前に長作地区にある御鷹神社の鎮守の森に出会ったことがきっかけである。御鷹神社に足を踏み入れると、ケヤキやモミ、トチの巨樹・巨木に圧倒される。日本各地の神社の境内には、その地を守護する鎮守の森があり、長い歳月にわたって守り継がれてきた大きなご神木が社殿に寄り添うように立っているが、この御鷹神社には、村人の誰も指一本たりとも手を入れていないという意志を示すかのように、数本の巨樹・巨木ではなく同じぐらいの大きさの二十二本もまとまった巨樹・巨木の森が存在する。神の鎮座する聖域として長きに渡って守り継がれてきた森であることは、容易に想像できるが、もしかしたらこの森は源流地域のありのままの天然の森の姿を数百年に渡って守り続けているシンボルではないのかという思いに駆られるようになった。以来、小菅村の山々を歩き回るようになって、三頭山や牛ノ寝、カモシカ立ち、ノメダワなどのゾーンに巨木が多いことに改めて思い知らされた。それなら可能な範囲で小菅村に生える巨樹・巨木を調査し、記録にとどめ、次の世代に受け継ぐ活動に取り組もうと決意した。

## 源流古道とヒノキ尾物語

同時に、源流資源調査のもう一つの動機は、村の長老から聞き取り調査の中で小菅村のヒノキの歴史と特質に関する秘話を聞かされたことである。その長老の話によると、小菅村では江戸の昔から狩猟が盛んで、猟師達は、大菩薩連嶺に連なる土室谷や小金沢の源頭にある石小屋あたりまで片道10時間もかけて源流古道を歩いて出かけたという。原生林の生い茂る森には、熊や鹿などの獣たちも賑わいを保ち、この地に行けば多くの収穫を得る機会に恵まれたという。

しかし、たまには獲物に恵まれないときもあって、そうした時、猟師達は決まってヒノキの苗を持って帰り自分の畑で育て、その苗を売りさばいて小銭を稼いだという。その苗場をヒノキ尾（根）と呼んでいたという。その時の苗を植えた山のヒノキが大きく育ち、そのヒノキを伐ってみるとピンクの色の鮮やかさといい、香りの良さといい他と比べようがないくらい良質なヒノキが産出できたという。この事実を調査して確定し、類い希な良質なヒノキの苗を現代に蘇られることは出来ないであろうか。標高の高い厳しい自然環境の中で育った源流の恵み、大自然の営みから生まれた天の恵み、大地の恵みを復興してみよう、実際に聞き取り調査を行い実地調査をしてみようと思いついたのである。

## 大菩薩連嶺調査の先駆者達の姿に触れ

こうした折、意外な資料に再会することになった。その文書は、中里介山の研究者で知られる羽村市の桜沢一昭氏（当時羽村市文化財保護審議会副委員長）が山梨県立文学館の招待で2002年11月21日に小菅村中央公民館で開催された「甲斐の文学講座」で講演された内容のコピーであった。おそらく、村の長老である小泉守先生から頂いたものであろうが、長らくお蔵入りし、日の目を見なかった。部屋の整理をしているうちに、書齋の片隅から黄色のファイルが出てきて、そこにこのコピーはあった。

そのファイルには、どんな経緯で中里介山が長編小説「大菩薩峠」（大正二年新聞掲載）を執筆するに至ったか、小説「大菩薩峠」起稿に先駆け、介山は精密な「創作ノート」を作成していたが、そこにどんなことが書かれていたか、さらには、「大菩薩峠」に関する歴史や文化に関して詳しい記述がなされていた。また、「大菩薩」に関する研究者として岩科小一郎氏の名前を挙げ、彼の書いた「大菩薩連嶺」（1959年5月）という書物を紹介していた。

今回の調査のなかで、この岩科小一郎氏の「大菩薩連嶺」（昭和34年）という書物が塩山の図書館に所蔵されていたので、その本の調査に出かけた。そこには、大菩薩連嶺研究の足跡が詳しく記載されていた。日本の登山の歴史を切り開いた武田久吉、木暮理太郎、田部重治、中村清太郎、松井幹雄の各氏の名前が並び、彼らが大菩薩連嶺の調査研究にどんな情熱を傾けて取り組んだか、さらにどんなルートを開拓したかなど一人一人の功績が

記載されていた。また、昭和4年に刊行された松井幹雄氏の書物も山梨県立図書館について調査した。この書籍は山梨県内に一冊しかないという貴重な本だった。

#### 幻の土室谷の詳細図を発見

岩科小一郎氏の「大菩薩連嶺」を読んでいて新しい情報を幾つも得ることが出来た。特に土室谷に関してその本の238ページに詳しい土室谷の手書きの地図があり驚いた。思わず、その場で自分も手書きで写してしまうほど興奮した。大菩薩峠から石丸峠に下り、牛ノ寝に向かう道と、コメデーあたりで長峰に続く道が分岐しているが、土室谷の左岸にカゴカケオネ、ホンゴウオネ、松の木オ、トヤモン、カナゴヤノオ、マガリオ、カリバノオ、スベリッパ、ヒロヨシオ、ヤマグチオネ、ダイギリオネ、カリマタ、テシロ、ドーギヤスンバ、オオトケオネ、キップシオネ、シンナシ、ヒラヒアブラオ、クリノキオネ、ダンゴアブリ、カマイリ、サギチョウノオと大小13のオネがぎっしりと書き込まれていた。

私自身の源流絵図を作成した経験からすると、こうした地名は現地の人々から聞き取りした内容を元にしていないと直感した。これほどまでの密度の濃い地名は、ここでの暮らしが密度の濃いものであったことの証である。人間と自然との繋がりが強ければ強いほど、大地に刻まれる地名も多くなる。もともと土室谷は、相模川の支流・葛野川の源頭に位置し大月市に所属してはいるが、小菅村の牛ノ寝と背中合わせの谷であり、生活圏はむしろ小菅村に属し江戸の昔から小菅の村人がこの谷で山葵を作っていたと聞いたことがあった。すると、これらの地名の名付け親は小菅村の村人ということになる。大菩薩研究の先覚者達が辿った道は、小菅村の先人達も含まれていたのであり、我々のすぐ近くにあることが分かり、意外な展開に胸の躍る日々が続いた。

#### 村民が土室谷の山葵畑仕訳書を保持

平成20年の晩秋の頃、小菅村の猟師でしかも土室谷でいまなお山葵づくりを続けている青柳一男さんが源流研究所を訪れ、家捜ししていたら面白いものが見つかったとあって、古い文書を持参された。表紙に「明治33年11月29日 字小金沢土室拝借地内私懇地土室山葵畑仕訳書」と書かれていた。調べてみると、山梨県は江戸時代徳川为天領地だったことから、明治になり土室谷一帯は御料林として管理されることになり、そのため江戸時代から山葵づくりをしていた小菅の村人達が、引き続き土室で耕作を続けるために土地を借りるための契約を結んだ記録簿であった。土室山葵畑仕訳書には、シンケイ、ナカクボ、ヒルクボ、シラガブチサワ、スゲドチザワ、キチベイザワ、カツラザワ、マガリザワ、カマノオザワの9つの沢と山葵畑が克明に記録してあった。偶然にも、塩山図書館で調べた土室谷の地名調査の大元が目の前に現れたのだった。誰も住まない谷なのに、地名の明



記された詳細な地図があるのは不思議であったが、山は御料林として管理され、沢は山葵畑として利用されていたことから、人々の出入りは頻繁であったのである。こうして、小菅村の村民と土室谷の繋がりが明らかになり、「ヒノキ尾物語」と同様、小菅の村人の活躍振りを証明する新しい物語が誕生した。

### (3) 巨樹・巨木調査に取り組んで

#### 牛ノ寝の不思議な源流空間

特に小菅村には大菩薩峠から南東に延びる稜線に、牛ノ寝通りと呼ばれる尾根が伸びており、そこには巨樹・巨木の姿があちこちに見られた。そこは、尾根といたながらも不思議なことに幅が百メートルを超える平が存在するなど特異な地形をしていた。多くの木々が生い茂り多くの生き物たちが集う場所でもあった。多くの生き物たちがそこで生きるためには命の水を必要とした。尾根には水は生まれないと誰しも思うが、しかしそこに多くの生き物たちが生きていたのだ。何故ここに生き物達の楽園があるのかを考えさせる不思議な空間が至る所にあった。この不思議な源流空間は、気の遠くなる時間を経て巨樹・巨木の空間に生まれ変わっていった。

長い歳月にわたって守り継がれてきた巨樹・巨木は、自然環境や歴史や文化を知る上で貴重な指標となり貴重なみどりの遺産といえる。この巨木は、いつ生まれたのだろうか。今なお樹勢は旺盛で、自然条件の厳しい尾根筋にありっただけの力を振り絞って、枝張りし樹幹を太らせ、天を突く勢いで樹冠を広げている貫禄ある木々に出会うとその神々しさに思わず手を合わせたくなる時が幾度もあった。

#### 深い谷間の巨木を一本ずつ調査して

しかし、今回の源流資源調査は簡単に答えを見いだすことが出来る代物ではなかった。何故なら、調査のためには小菅村の隅々まで歩き通すことが前提となった。しかも小菅の山々は急峻で鬱蒼とした森に覆われていた。鬱蒼とした森は、緑の枝枝が天然のカーテンとなって見通しが利かず巨樹・巨木の姿を確認することが出来ないこともあった。折角調査に出かけても途中で諦めて引き返したこともあった。この緑のカーテンがなくなるのは真冬の時期であった。晩秋になると落葉広葉樹達は、一斉にその葉を大地に向けて散らしてしまう。尾根筋からの見通しは頗る良好となる。こうした時期に調査に何度も出かけた。調査には、源流大学の学生達が喜んで協力してくれた。蔵本君、黒沢君、小林君達は飽きることなく何度も調査に同行した。自らは、監督者の立場から現場に立ち会うことも多くなった。余りにも調査は苦しかった。現場まで急坂を息を切らして登ると、尾根ばかりか

深い谷間に巨木の姿を確認することも多かったが、遠くの谷間の調査に体力が追いつかず諦めかけたとき、学生達は苦しみをいとわずどんどんと深い空間へ降りていき、一本一本巨木の幹周りを測定し続けてくれた。どんなに雪が深くても彼らは諦めることをしなかった。まるで野生の猿のごとくピョンピョンと跳ねるように下る様を見て感謝の気持ちでいっぱいになった。自分は体力が続かない、尾根の周辺しか調査出来ないとつくづく感じた。そこでは、自分は監督的な槍割りを演じるのが精一杯であった。彼らと一緒に深い谷に下ることは数えるほどしか出来なくなっていた。彼らがいなかったらこの調査は不可能であった。

源流大学の学生の協力のおかげで、鎮守の森ゾーンに38本、三頭山ゾーンに13本、松姫・山沢入り・オオマトイ・狩場山ゾーンに62本、牛ノ寝通り・榎ノ尾・アカドチゾーンに66本、雄滝カモシカ立ちゾーンに31本、赤沢フルコンバ・ノーマダワゾーンに37本の巨樹・巨木を確認することが出来た。その数は247本を数えるまでになっていた。以下各ゾーンの調査結果をしるすことにする。

#### 鎮守の森ゾーン

38本

|           |                    |
|-----------|--------------------|
| 1) ケヤキ    | 420 (単位はいずれもcmである) |
| 2) ケヤキ    | 350                |
| 3) トチ     | 321                |
| 4) モミ     | 334                |
| 5) モミ     | 453                |
| 6) ケヤキ    | 363                |
| 7) ケヤキ    | 301                |
| 8) モミ (枯) | 440                |
| 9) モミ     | 485                |
| 10) ケヤキ   | 530                |
| 11) モミ    | 310                |
| 12) モミ    | 390                |
| 13) モミ    | 375                |
| 14) モミ    | 420                |
| 15) モミ    | 378                |
| 16) モミ    | 314                |
| 17) モミ    | 308                |
| 18) モミ    | 370                |
| 19) モミ    | 398                |
| 20) ケヤキ   | 464                |

|            |       |
|------------|-------|
| 2 1) ケヤキ   | 3 8 2 |
| 2 2) ケヤキ   | 3 6 7 |
| 2 3) スギ    | 5 3 0 |
| 2 4) スギ    | 3 1 3 |
| 2 5) スギ    | 3 3 2 |
| 2 6) ケヤキ   | 6 6 5 |
| 2 7) サワラ   | 4 3 7 |
| 2 8) スギ    | 3 0 3 |
| 2 9) スギ    | 3 5 6 |
| 3 0) スギ    | 3 6 0 |
| 3 1) スギ    | 3 2 6 |
| 3 2) トチ    | 6 1 5 |
| 3 3) イチョウ  | 3 4 3 |
| 3 4) コナラ   | 3 2 7 |
| 3 5) スギ    | 3 0 7 |
| 3 6) モミヒノキ | 3 7 1 |
| 3 7) ツガ    | 3 8 7 |
| 3 8) コナラ   | 3 2 3 |

三頭山ゾーン

13本

|           |       |
|-----------|-------|
| 3 9) ミズナラ | 3 0 6 |
| 4 0) ケヤキ  | 3 0 4 |
| 4 1) トチ   | 4 1 5 |
| 4 2) ハリギリ | 3 3 4 |
| 4 3) ミズナラ | 4 7 2 |
| 4 4) ミズナラ | 3 1 6 |
| 4 5) ミズナラ | 4 6 4 |
| 4 6) ミズナラ | 3 5 5 |
| 4 7) ブナ   | 3 0 0 |
| 4 8) ブナ   | 3 4 8 |
| 4 9) ミズナラ | 3 2 8 |
| 5 0) ミズナラ | 3 3 0 |
| 5 1) ミズナラ | 3 3 4 |

松姫・山沢入り・オオマトイ・狩場山ゾーン

62本

甲州裏街道が石丸峠から松姫峠に向かう古道は、コメデーから玉蝶の頭を抜けて櫃の尾に至ると、数<sup>キロ</sup>に渡って平坦な尾根道が連続する。その尾根筋に幅百<sup>メートル</sup>を越える平坦地が姿を現すのである。牛ノ寝と狩場山とオオマトイがそれである。尾根は山容がずっしりと大きいほど生き物たちの宝庫として珍重されたのだろう。森が賑わえば獣たちも賑わうのである。

新緑の牛ノ寝には、爽やかな風が吹き荒れ、源流空間を楽しむかのように新しい生命が次々と姿を現す。狩場山は、武田信玄がここを訪れたという伝説の山でもある。山の神が鎮座し、昔から祈りと集いの場でもあった。オオマトイは、広すぎて方向を見失うオオマトイの場所だった。このオオマトイは鶴根山に繋がり、松姫峠、奈良倉山、十文字峠へ源流古道は延びた。

大菩薩峠から南東に伸びる尾根があるが、その名を牛ノ寝と言い、何とも不思議な姿をしている。大菩薩峠から熊沢山、石丸峠を通り、玉蝶の頭付近の急坂を下り櫃の尾に着くと、そこから6キロ先の奈良倉山まで、平坦な尾根道が伸びている。しかも、その尾根は、途中に何か所も太くて広い領域を備えているから不思議だ。オオマトイと言う名称も、尾根が広すぎて地元の人さえ迷ってしまうことからその名が生まれたという。

狩場山に山の神が祀られている。「甲斐国志」によると、「狩場山神社。大菩薩峠ノ北東ノ山腹ニアリ。神体十一面観音唐物ノ銅像長サ四寸」と記されている。小菅の藤木善兵衛という方が小金沢谷と土室谷の間の長峰の下屋敷と呼ばれたところから掘り出し、村に持って帰ったところ、余りにももったいないので村民と相談の上狩場の尾根に祀ったとの言い伝えが残っている。狩場山の広々とした尾根には、四方八方から生き物たちが集まり賑わいを見せたのであろう。近くには、「コメデー（米代）」といって狩りに行けば一日の米代を稼げる場所もある。

|      |      |       |                |
|------|------|-------|----------------|
| 5 2) | ミズナラ | 3 1 4 | (ヒノキ林の近く)      |
| 5 3) | モミ   | 3 0 8 | ミズナラの上         |
| 5 4) | ブナ   | 4 0 4 | 道下             |
| 5 5) | ブナ   | 3 3 6 | 合流点            |
| 5 6) | ミズナラ | 3 2 2 | 合流点より150m奥道の左  |
| 5 7) | ブナ   | 3 3 0 | うろあり 多摩川流域 県有林 |
| 5 8) | ミズナラ | 3 9 1 | 道右 丘状 二俣       |
| 5 9) | ミズナラ | 3 1 8 | 道左奥(40m)       |
| 6 0) | ミズナラ | 3 9 2 | 山沢入のヌタ         |
| 6 1) | ミズナラ | 3 2 0 | 日向道T字近く うろあり   |
| 6 2) | ミズナラ | 3 3 2 | 県有林 日向道までの左    |
| 6 3) | ミズナラ | 3 2 5 | 県有林 南側 ニリンソウ   |
| 6 4) | ミズナラ | 3 9 2 | 尾根筋 ニリンソウ下     |

|      |       |     |         |
|------|-------|-----|---------|
| 65)  | ブナ    | 355 | 松鶴のブナ   |
| 66)  | トチ    | 430 | 道横      |
| 67)  | トチ    | 483 | 道の上     |
| 68)  | トチ    | 728 | 980根回り  |
| 69)  | トチ    | 504 | 大トチの下   |
| 70)  | トチ    | 310 | 大トチの左上  |
| 71)  | サワグルミ | 352 | 大トチ50m上 |
| 72)  | サワグルミ | 341 | 大トチ谷側下  |
| 73)  | ミズナラ  | 303 | 日向道ベンチ  |
| 74)  | ミズナラ  | 343 | 108m    |
| 75)  | ブナ    | 330 | 100     |
| 76)  | ブナ    | 377 | 50      |
| 77)  | ブナ    | 338 |         |
| 78)  | ミズナラ  | 304 | 150     |
| 79)  | ブナ    | 303 |         |
| 80)  | イヌブナ  | 368 | 50m     |
| 81)  | イヌブナ  | 325 | 50      |
| 82)  | イヌブナ  | 322 | 100     |
| 83)  | トチ    | 400 | 20      |
| 84)  | ミズナラ  | 307 |         |
| 85)  | ミズナラ  | 395 |         |
| 86)  | ミズナラ  | 390 |         |
| 87)  | ミズナラ  | 363 |         |
| 88)  | ミズナラ  | 321 |         |
| 89)  | ブナ    | 350 |         |
| 90)  | ミズナラ  | 528 |         |
| 91)  | ミズナラ  | 360 |         |
| 92)  | ミズナラ  | 418 |         |
| 93)  | ミズナラ  | 318 |         |
| 94)  | ミズナラ  | 348 |         |
| 95)  | クリ    | 307 |         |
| 96)  | ミズナラ  | 315 |         |
| 97)  | ミズナラ  | 332 |         |
| 98)  | ミズナラ  | 361 |         |
| 99)  | ミズナラ  | 332 |         |
| 100) | ミズナラ  | 458 |         |

|      |      |     |
|------|------|-----|
| 101) | ミズナラ | 318 |
| 102) | モミ   | 331 |
| 103) | カンバ  | 301 |
| 104) | ミズナラ | 339 |
| 105) | ミズナラ | 349 |
| 106) | クリ   | 328 |
| 107) | ツガ   | 315 |
| 108) | ツガ   | 309 |
| 109) | ミズナラ | 319 |
| 110) | クリ   | 311 |
| 111) | クリ   | 309 |
| 112) | ミズナラ | 311 |
| 113) | ミズナラ | 352 |

牛ノ寝通り・樫ノ尾・アカドチ ゾーン

66本

松姫峠は、小菅村と大月市の境界に位置し、標高は1250mである。松姫峠・山沢入りゾーンには、巨樹・巨木が22本あるが、特に山沢入りの大トチと松鶴のブナは、その名が知られている。山沢入りの大トチは小菅村の巨樹・巨木の中で最も大きい上に、その姿形に風格と品位を感じさせる何かを持ち合わせている。鶴寝山にある松鶴のブナは、多摩川と相模川の分水に根を張り、流域と流域を結ぶ存在として、さらに源流域の豊かな森林のシンボルとしてその価値は益々大きくなっている。両者とも必見の巨樹・巨木である。

地元では、大菩薩峠から松姫峠に至るこの尾根全体を「牛ノ寝通り」と呼ぶ。昔この道は、甲州と武蔵の国を繋ぐ甲州裏街道として賑わっていた。甲州側には萩原口に番屋が置かれ、武蔵側には小菅の余沢に番屋が置かれ、「入り鉄砲と出女」に目を光らせていたという。それにしても何故牛ノ寝という名前がこの尾根に付けられたのであろうか。尾根道といえば、馬の背と称される細い道が多いが、この尾根は、牛の背中のように平らで広くて太くて安定した姿をしている。その姿からめずらしい名前はうまれたのであろうか。

|      |     |     |
|------|-----|-----|
| 114) | シオジ | 303 |
| 115) | シオジ | 360 |
| 116) | シオジ | 327 |
| 117) | シオジ | 315 |
| 118) | シオジ | 395 |
| 119) | カツラ | 305 |
| 120) | シオジ | 350 |

|             |       |
|-------------|-------|
| 1 2 1) ツガ   | 3 0 6 |
| 1 2 2) ツガ   | 3 2 5 |
| 1 2 3) ツガ   | 3 3 5 |
| 1 2 4) ツガ   | 3 4 8 |
| 1 2 5) ツガ   | 3 4 8 |
| 1 2 6) ツガ   | 3 8 6 |
| 1 2 7) ミズナラ | 3 3 2 |
| 1 2 8) ミズナラ | 3 0 5 |
| 1 2 9) ツガ   | 3 4 8 |
| 1 3 0) クリ   | 3 2 8 |
| 1 3 1) クリ   | 3 1 8 |
| 1 3 2) ミズナラ | 3 2 8 |
| 1 3 3) ツガ   | 3 0 6 |
| 1 3 4) ツガ   | 3 2 0 |
| 1 3 5) ブナ   | 3 7 3 |
| 1 3 6) ミズナラ | 3 3 5 |
| 1 3 7) ツガ   | 3 2 9 |
| 1 3 8) ブナ   | 3 3 4 |
| 1 3 9) ミズナラ | 3 0 3 |
| 1 4 0) ブナ   | 3 0 8 |
| 1 4 1) ミズナラ | 3 3 8 |
| 1 4 2) ブナ   | 3 8 7 |
| 1 4 3) クリ   | 3 1 1 |
| 1 4 4) ツガ   | 4 0 5 |
| 1 4 5) ミズナラ | 3 2 2 |
| 1 4 6) ツガ   | 3 2 4 |
| 1 4 7) ミズナラ | 3 7 7 |
| 1 4 8) ミズナラ | 3 8 1 |
| 1 4 9) ミズナラ | 3 8 8 |
| 1 5 0) ミズナラ | 3 0 2 |
| 1 5 1) ミズナラ | 3 6 4 |
| 1 5 2) ミズナラ | 3 4 9 |
| 1 5 3) ミズナラ | 3 1 5 |
| 1 5 4) ミズナラ | 3 8 1 |
| 1 5 5) ミズナラ | 3 2 3 |
| 1 5 6) ブナ   | 3 0 6 |

|      |         |     |
|------|---------|-----|
| 157) | ミズナラ    | 325 |
| 158) | ミズナラ    | 356 |
| 159) | ブナミズナラ  | 409 |
| 160) | ミズナラ    | 335 |
| 161) | ミズナラ    | 302 |
| 162) | ミズナラ    | 305 |
| 163) | カンバミズナラ | 328 |
| 164) | ミズナラ    | 330 |
| 165) | ミズナラ    | 307 |
| 166) | ミズナラ    | 347 |
| 167) | ツガ      | 371 |
| 168) | ミズナラ    | 354 |
| 169) | ミズナラ    | 362 |
| 170) | ブナ      | 303 |
| 171) | ミズナラ    | 319 |
| 172) | ミズナラ    | 426 |
| 173) | ミズナラ    | 401 |
| 174) | ミズナラ    | 308 |
| 175) | ブナ      | 306 |
| 176) | ミズナラ    | 318 |
| 177) | ブナ      | 335 |
| 178) | ミズナラ    | 300 |
| 179) | ミズナラ    | 319 |

雄滝・カモシカ立ちゾーン

31本

|      |     |     |
|------|-----|-----|
| 180) | トチ  | 391 |
| 181) | トチ  | 392 |
| 182) | トチ  | 343 |
| 183) | シオジ | 337 |
| 184) | シオジ | 368 |
| 185) | シオジ | 387 |
| 186) | カツラ | 420 |
| 187) | ツガ  | 418 |
| 188) | シオジ | 554 |
| 189) | シオジ | 370 |



|      |      |     |
|------|------|-----|
| 190) | シオジ  | 368 |
| 191) | シオジ  | 304 |
| 192) | シオジ  | 309 |
| 193) | シオジ  | 310 |
| 194) | シオジ  | 325 |
| 195) | シオジ  | 485 |
| 196) | カツラ  | 378 |
| 197) | シオジ  | 304 |
| 198) | シオジ  | 352 |
| 199) | シオジ  | 329 |
| 200) | ツガ   | 315 |
| 201) | ツガ   | 366 |
| 202) | ハリギリ | 439 |
| 203) | カツラ  | 395 |
| 204) | シオジ  | 382 |
| 205) | カツラ  | 515 |
| 206) | ツカ   | 314 |
| 207) | ツガ   | 366 |
| 208) | ツガ   | 315 |
| 209) | ツガ   | 348 |
| 210) | ツガ   | 327 |

赤沢フルコンバ・ノーマダワゾーン

37本

|      |      |     |
|------|------|-----|
| 211) | ミズナラ | 388 |
| 212) | ハリギリ | 331 |
| 213) | ケヤキ  | 333 |
| 214) | ケヤキ  | 335 |
| 215) | モミ   | 323 |
| 216) | カヤ   | 394 |
| 217) | カンバ  | 309 |
| 218) | ツガ   | 418 |
| 219) | ブナ   | 309 |
| 220) | ミズナラ | 310 |
| 221) | ミズナラ | 360 |
| 222) | ミズナラ | 398 |

|        |      |       |
|--------|------|-------|
| 2 2 3) | ミズナラ | 3 4 3 |
| 2 2 4) | ミズナラ | 3 1 0 |
| 2 2 5) | ミズナラ | 3 0 1 |
| 2 2 6) | ミズナラ | 3 1 0 |
| 2 2 7) | ミズナラ | 3 1 9 |
| 2 2 8) | クリ   | 3 5 1 |
| 2 2 9) | ミズナラ | 3 2 8 |
| 2 3 0) | ミズナラ | 3 2 8 |
| 2 3 1) | クリ   | 3 3 7 |
| 2 3 2) | ミズナラ | 3 9 1 |
| 2 3 3) | ミズナラ | 3 1 8 |
| 2 3 4) | ミズナラ | 3 0 1 |
| 2 3 5) | ミズナラ | 3 0 1 |
| 2 3 6) | ミズナラ | 4 2 4 |
| 2 3 7) | ミズナラ | 4 7 0 |
| 2 3 8) | ミズナラ | 3 9 0 |
| 2 3 9) | クリ   | 3 4 9 |
| 2 4 0) | クリ   | 3 0 6 |
| 2 4 1) | ミズナラ | 4 7 9 |
| 2 4 2) | シオジ  | 3 0 5 |
| 2 4 3) | ハリギリ | 3 1 1 |
| 2 4 4) | ミズナラ | 3 4 9 |
| 2 4 5) | ミズナラ | 3 0 1 |
| 2 4 6) | クリ   | 3 1 0 |
| 2 4 7) | ミズナラ | 3 2 2 |

合計 2 4 7本

#### 小菅村の巨樹について

大木は、昔から地元の住民から大切に守られ、山の象徴として崇められてきた。人の踏み  
 いることのない深山幽谷の地に佇む巨木もあれば、人里の鎮守の森に立つ巨木もあった。  
 また、種類によって高いところを好む木もあれば、低いところを好む木もあったし、乾燥  
 したところに根付く木もあれば、湿気の多いところを好む木もあった。巨樹・巨木たちの  
 居場所は、適地適木の生きた証明でもあった。今回の源流資源調査では、小菅村に2 4 7  
 本の巨樹・巨木が存在することが確認された。急峻で調査不能な箇所も多いので、実際は  
 この数字より遙かに多いと思われるが、今日なおこれほど多くの巨樹・巨木が確認できた

ことは、地元住民によって、さらに東京都水源林として、また山梨県有林として大切に守られてきたことの証である。この巨樹・巨木の森は、小菅村の宝であり、永く後世に伝えていきたい。

### ミズナラ

小菅村の巨樹・巨木の中でダントツに多いのがミズナラである。大菩薩峠から南東に伸びる小菅大菩薩道と北東に伸びる丹波山大菩薩道の双方の尾根で、標高1400mから1500m前後に群生している。ミズナラは、ケヤキと並んで家具の材料として重宝されている。特に、欧米ではオーク材と呼ばれ高級家具に利用されるなど森の王様と呼ばれるほど大切にされている。椅子やテーブルの脚として、また食器棚や箆笥の材として利用されている。

### トチ

小菅村には木地師がいて、様々な木を使って器を拵えていたが、小菅の木地師が愛用した木の一つがトチである。そばのこね鉢の材料は、殆どがトチだと聞いた。材が均質で非常に割れづらいという特長がくり物や挽き物という木工の分野に合っていたからだ。ただ、トチは良いところばかりではない。トチは水分を多く含み、腐りやすかったり、材として狂いやすいという欠陥がある。その欠陥をなくすには木から水分を蒸発させる仕事が必要になる。トチの丸太を板にしてから風通しをよくして数年天然乾燥させる。手間暇をかけてトチの木の器は作られるのである。また、トチの実は、あく抜きが面倒であるが、縄文の昔から食用として重宝されている。

### ケヤキ

府中市のケヤキ並木に圧倒された方も多と思うが、ケヤキは里の木としてまた街路樹や鎮守の森のご神木として広く住民に親しまれている。小菅村でも、長作の御鷹神社や余沢の御嶽神社のご神木がケヤキである。ケヤキは、天に向かって力強く枝を伸ばしている姿が印象的である。大地の栄養分を存分に吸収してグイグイと豪快に天に伸びる枝の迫力は目を瞠るものがある。材としての用途も広く、家具、柱、和太鼓、そして食器のお椀として広く利用されている。小菅では、堂々たる大黒柱としてケヤキが登場する。

強い家のシンボルがケヤキなのである。

### スギ

日本の木造建築の柱の主役は、なんといってもスギである。スギは、比較的軽いが曲げや圧縮にも、水や湿気にもそこそ強く平均的に優れていることが、広く建築材に活用された理由である。最近では花粉症の大元として評判は芳しくないが、日本で最も植林されている木もスギである。神社やお寺の鎮守の森に杉の巨樹・巨木が多いし、高野山や戸隠のように参道の並木に存在感のある杉の姿を多く見かける。さらに、水に強いことから、舟を造る材として昔から使われてきた。また、香りも良いことから、酒、味噌、醤油、漬け物の樽として重宝されていた。人々の住まいや暮らしに寄り添ってきたスギ。その杉の良さをもう一度見直したいものだ。

## クリ

小菅村では、山持ちは、自らの家の普請に充てるため山を育てているところが多いが、山持ちは家を建てる場合、土台はクリと決まっている。理由は、はっきりしていて、クリは腐食に対して非常に強いからである。建築材として水にも虫にもめっぽう強いいため、建物の土台に最も適した材といわれている。小菅の周辺の山にはよくクリの木が群生している。身近で育つ木であったために、よく利用され、今でも土台はクリが一番いいと言い伝えられている。また、クリはその実が栄養分に富んでいて美味しいために、縄文の昔から食料として利用されてきた。いまでは、リスや熊などの食料として重宝されているようだが、クリは材としても食料としても人々の暮らしに必要な身近な木であったことだけは確かだ。

## ブナ

落葉広葉樹の中で最も人気のある樹木は、たぶんブナの木であろう。牛ノ寝にある「松鶴のブナ」を見たいという人が多い。今は、地球環境への関心が高まり、ブナの木が水をたくさん蓄え環境に優しい木であることが、その理由のようである。時代が変わり、樹木への関心度も有用性から環境貢献度に変化したためかも知れないが、ブナという木を漢字で書くと「？」という字を当てる。木で無い木とは、一体何を意味するのか。源流の森を歩いていると、立ち枯れしたブナの木をよく見かけるが、とにかく腐れやすい木であることだけは確かだ。天然乾燥させて活用するのに手間暇を要したため、木工品としてあまり利用されなかったのであろう。利根川の支流・鬼怒川の源流では、ブナでオタマやシャモジを作ったと聞いたことがある。ともあれ、ブナの木に会うと、何か気持ちがホッとして、思わず頬ずりしたくなるから不思議だ。

## カツラ

森を歩いていて、樹木の存在を知らせてくれるものの一つに香りがある。神社の祭りの出店のカルメ焼きのようにほのかな甘い香りが風に乗せられ運ばれてくる時、きまって近くにカツラがある。特に黄葉の時の香りは強く、ハート形をした可愛い葉っぱの一枚一枚から香りを発散させている。もともと「香出」（カズ）と呼ばれていてそれが訛って「カツラ」に転じたと聞いたことがあるが、木そのものから香りが出ている感じがする。カツラの木は、素直で扱いやすいため、家具としてタンスや棚、仏壇仏具、碁盤、木琴やオルガンなどの楽器と用途は広い。また、カツラの木は温かいことからフローリング材としても評判が良い。さらに、新緑というより新芽の時、その赤紫の色は抜きん出ている、一目でカツラと分かる。春には色で、秋には香りで、出かける度にカツラのあることを知らせてくれる不思議な木である。

## ハリギリ

ハリギリというより栓の木といった方が通りやすいかも知れない。幼木の時、タラの木のように枝や幹に針がついていることと桐に似ていることからハリギリという名が生まれたといわれているが、この木の特長は樹皮が茶褐色のうねコルク状で、ゴツゴツしていて識別つきやすいことと、葉っぱが天狗のうちわといわれるように大きなことであろう。材としては、白くておとなしく使い勝手がよく家具や建具、あらゆる木工品に利用されている。森の散策では、爽やかな風に触れながらのんびりと歩くのが一番いいが、木の名前や性質を知っていると、森とグッと親しくなる。グループで歩くとき木の説明をするが、この木は木肌で見分けられる数少ない木であるだけに、オールシーズンを通して間違いなく教えられる木として重宝している。

## ヒノキ

水や虫に強いことから日本の神社仏閣に昔から使われてきたヒノキ。強くて粘りがあり、艶もよくおまけに香りもいい。ヒノキで造られた世界最古の法隆寺は、千三百年もの長きに渡ってこの建物を守り続けている。「檜造りの家」は、庶民の手の届かない高級建築の代名詞であるが、孫子の代まで長持ちして使える丈夫な建物であることを考えれば、決して高くないのかもしれない。小菅村に生えるヒノキには、面白い物語がある。長老の話によると、村の鉄砲打ちが大菩薩峠の近くまで猟に出かけ獲物が取れなかったときに、近くの尾根からヒノキの苗を持ち帰ったという。その尾根のヒノキは、木目が詰まっておりあまりにも色艶や香りがよかったので特別扱いされ、その場所も「ヒノキ尾」と呼ばれてきたという。村の中にその尾根の苗から育てられたヒノキがあることが確認され、そのルーツが明らかになったことから、「大菩薩ヒノキ」と命名して村の特産物に育てる計画が進められている。

## サワラ

サワラ(榎)という木は、樹皮も葉もヒノキに似ているが故にヒノキの影に隠れていて目立たない存在の木である。建築用材として活用されたり、水に強いため、風呂の桶に使われたり、飯びつに利用されたりしてきた。小菅村の諏訪神社のご神木はこのサワラであるが、その木を見て「りっぱなヒノキがありますね」と殆どの人がヒノキと間違えている。森の中では、谷筋のやや湿っぽいところにサワラが植わっており、尾根筋に近くなるとヒノキが目立つようになる。小菅村に国の重要文化財の「永作の観音堂」がある。鎌倉時代に立てられた建物で木造建築では、古いほうで山梨県でも貴重な文化財として大切にされているが、この建物の材がサワラと教えられて驚いたことを覚えている。神社仏閣の材はヒノキが多いが、当時小菅村ではサワラが多かったのであろうか。近年サワラにアトピーの原因のダニを殺す能力があることが判明、新しい光がサワラに注がれている。

## 多摩川源流・牛ノ寝の樹木

標高1250mの松姫峠から鶴寝山、松鶴のブナ、山沢入りのヌタ、山沢入りの大トチ、水無沢を経て多摩源流小菅の湯まで伸びるハイキングコースは、中高年に人気のコースになっているが、このコースには、巨樹・巨木を含む様々な種類の樹木を確認できる。ここは、源流景観的にも森林景観的にも非常に優れたゾーンになっており、将来環境学習のための自然観察コースとしてもその威力を発揮するゾーンである。源流大学の学生の協力で牛ノ寝の樹木調査を行った。その結果を紹介する。

- 1) マンサク
- 2) ミズキ
- 3) クロモジ
- 4) ツノハシバミ
- 5) クリ
- 6) イタヤカエデ
- 7) エンコウカエデ
- 8) コゴメウツギ
- 9) ツリバナ
- 10) サワフタギ
- 11) ツガ
- 12) アズキナシ
- 13) イヌシデ
- 14) ホウノキ

- 15) ノリウツギ
- 16) アブラチャン (ズサ)
- 17) クマシデ
- 18) ナツツバキ
- 19) サワシバ
- 20) コシアブラ
- 21) アオハダ
- 22) ヤマボウシ
- 23) ハウチワカエデ
- 24) ヤマモミジ
- 25) ミズナラ
- 26) ブナ
- 27) イヌブナ
- 28) アオダモ
- 29) アサダ
- 30) リョーブ
- 31) カジカエデ
- 32) ミツバツツジ
- 33) ヤマツツジ
- 34) ミヤマハハソ (ミヤマホウソ)
- 35) メグスリノキ
- 36) フサザクラ
- 37) ミツバウツギ
- 38) ウリハダカエデ
- 39) オオバアサガラ
- 40) ウルシ
- 41) ミズメ
- 42) チドリノキ
- 43) オガラバナ
- 44) ミヤマガマズミ
- 45) ヒナウチワカエデ
- 46) キハダ
- 47) コミネカエデ
- 48) ガマズミ
- 49) ハリギリ (センノキ)
- 50) ヒトツバカエデ

- 5 1) オオモミジ
- 5 2) オオイタヤメイゲツ
- 5 3) ウリノキ
- 5 4) アセビ
- 5 5) トウゴクミツバツツジ
- 5 6) ムラサキシキブ
- 5 7) シオジ
- 5 8) トチ
- 5 9) ウワズミザクラ
- 6 0) シナノキ
- 6 1) イワガラミ
- 6 2) ドウダンツツジ
- 6 3) モミ
- 6 4) シラカンバ
- 6 5) ハクウンボク
- 6 6) コメツガ
- 6 7) ヤマハンノキ
- 6 8) シラビソ
- 6 9) アカシデ
- 7 0) ダンコウバイ
- 7 1) アカマツ
- 7 2) ダケカンバ
- 7 3) ミヤマザクラ
- 7 4) バイカツツジ
- 7 5) オトコヨウゾメ
- 7 6) ウラジロノキ
- 7 7) ヤマハギ
- 7 8) ネジキ
- 7 9) サワグルミ
- 8 0) マタタビ
- 8 1) ユズリハ
- 8 2) アワブキ
- 8 3) ニワトコ
- 8 4) カツラ
- 8 5) ホソエカエデ
- 8 6) カラマツ



- 87) スギ
- 88) ヒノキ
- 89) ケヤキ

## 牛ノ寝の木の特徴について

### 1) マンサク

マンサクは葉に先立ち早春に、糸のように細い黄色の花弁を持つ花が一面に咲く。日本名は「豊年満作」の意味だともいい、「まず咲く」の意だともいう。見分けるポイントは①葉は丸みのあるひし形 ②波状のきょ歯でふちどられる ③葉柄から葉の下の面脈沿いに星状毛。温帯・暖帯の小高木。

### 2) クロモジ

枝の黒い斑点を文字と見て黒文字の名が生まれた。香気があるのでつまようじとして賞用され、このようじそのものもクロモジと呼ばれている。見分け方のポイントは①葉はやや小さく、側脈4～6対 ②上面無毛、下面もほとんど無毛となる。若枝はほとんど皮目がなく、黄緑色であるが黒いまだらができる。折ると良い香りがする。オオバクロモジ、ウスゲクロモジ、ケクロモジがある。

### 3) ツノハシバミ

果実はとっくり型の総包の中にあり外からは見えない。日本のヘーゼルナッツと言われ味はとてもいい。①葉は楕円形で幅は長さの二分の一から三分の一 ②葉身基部は丸いか、少し狭くなる。温帯の大低木で広く分布する。カバノキ科。

### 4) サワシバ

①葉の基部は、はっきりハート形にくぼむ。側脈は15から20対。下面脈状にはやや長い毛がある。

### 5) アカシデ

①葉はやや小さく、新葉は茶褐色 ②葉柄、小枝は赤い色を帯びている。側脈は9～15対、へりにはややふぞろい細かい重きょしがある。樹皮は暗灰白色でなめらか。

### 6) クマシデ

①葉の基部は浅くハート形にくぼむことが多く、左右やや不同 ②側脈は20～24対。上面くぼみ、下面に隆起する。

#### 7) サワフタギ

サワフタギ類の花はどれも白色5弁でおしべが多くよく似ている。樹皮は灰白色で縦に割れる。果実はいい色に熟す。谷間に多く、株立ちする温帯・暖帯の低木で広く分布する。

#### 8) イヌシデ

側脈の間にねた毛がある。①葉の上面側脈間に絹毛がやや密に残る ②葉柄・小枝ともに密に毛がはえる。へりには細かい重きよしがある。側脈は12～15対。

#### 9) ホウノキ

①葉は大きく枝先に輪生状に開く ②頂芽は大きく表面は無毛。樹皮は白っぽく割れ目はない。枝は太く数が少なく紫色を帯びる。

#### 10) アブラチャン

①葉をもみ、枝を折ると香りがある ②葉柄は1～2センチで紅色を帯びる ③秋の末にきれいな紅葉となって落ちる。早春、葉の開く前に黄色い小花が一面に咲く。果実は球形で径1センチから2センチぐらい。黄褐色に熟す。枝は折れにくくしなやかでカンジキに利用される。

#### 11) アオハダ

①きょ歯は低く、内側に曲がる ②ナイフの刃を立てて小枝を削ると緑色の内皮が出てくる。ほとんど常に短枝の先に葉が集まってつく。葉は4～7×2.5×4cm。側脈6～10対。下面脈状に直角に短い毛が出てくる。葉柄は1～2cmで無毛。

#### 12) ナツツバキ

①葉裏の全面に絹毛が散らばってはえる ②樹皮は暗赤褐～褐色で、はげて雲紋状となる。③小枝は灰褐色。葉は枝先に集まってつく。質やや厚く側脈は4～7対、上面は無毛。夏緑樹林にはえる温帯の高木。

#### 13) リョウブ

①下面の側脈のわきに白い毛の束がある ②上面にはしばしば星状毛が散生する ③樹皮はなめらかで縦にはげ、赤褐色と白色の雲紋状の模様ができ目立つ。葉は枝先に集まってつき8～15×3～9cm、倒卵状皮針形から拾い倒卵状だ円形まで変化が多い。きょ歯は三角形状で鋭い。葉柄は1～2.3cmで有毛。山地に生える暖帯・温帯の高木。

#### 14) コシアブラ

①とげはない ②小葉柄は1～2cmではっきりしている。小葉は倒卵状だ円形で先は

しっぽ状にとがり、へりに単きょ歯がならびその先はのぎ状に出る。下面の側脈のわきにちぢれた毛が残るほかは無毛となる。葉柄は7～30cmで、その先端の小葉柄が分かれ出る部分にもちぢれた毛がかたまっている。温帯から暖帯の落葉高木。

#### 15) ヤマボウシ

①葉はだ円形、両面に短毛が圧着する ②側脈は4～5対、ゆるやかに曲がって葉先に集まる。葉はしばしば短枝の先につき、基部は円みが強くへりは波打つ。短毛は両端がとがり中央で付着する。側脈のわきに褐色の毛が多い。冬芽は枝先に1個つき、2枚の鱗片で囲まれる、温帯の高木。

#### 16) ハウチワカエデ

①葉は大型で9～11。裂片は幅広い ②葉柄は葉身の長さの1/2～1/4で有毛。はじめ全体に白毛があるが、のち下面主脈沿い、ことに主脈のわきに残る。若枝は緑色から赤色、樹皮は灰白色～灰褐色でなめらか、または浅い割れ目ができる。温帯の高木。

#### 17) ヤマモミジ

①葉は(5～)7～9に中(～深)裂 ②葉柄は細かいが基部は目立って太い。葉先はとがり、へりにふぞろいなきょ歯がある。基部は水平～深くハート状にくぼむ。下面は脈のわきに淡褐色の毛のかたまりが見られることもある。葉柄は無毛。樹皮は灰色でなめらか。

#### 18) カジカエデ

①葉は5中裂、裂片に不規則な少数のあらい鈍きょ歯がある ②葉の下面に細毛があり、葉のへり、脈沿い、脈のわきなどに残る。葉は7～15×8～16cm、基部は浅くハート状にくぼむ。葉柄は4～13cm、基部は太くなる。枝は太く灰褐色で細かく縦に割れる。

#### 19) ウリハダカエデ

①葉は3(～5)浅型中央破裂が幅広い ②葉柄は緑色 ③下面脈沿いに褐色の軟毛がある。葉は幅は長さとはほぼ等しいかやや幅の方が広く6～15×6～16cm、裂片の先は細くとがりへりは重きょ歯がある。基部はごく浅くくぼむ。葉柄は2～6cm、若枝は緑色で黒い斑点がある。

#### 20) ヒナウチワカエデ

①葉は9～11に中裂し裂片は細い ②裂片のへりは切れ込みが深く鋭い重きょ歯。③葉柄は無毛。葉は4～8×4～8cm、基部はハート状にくぼむ。葉面には若い時には軟毛があるがのち次第にとれ主脈のわきにかたまりほかに少し残る。葉柄は2～5cm、若い

ときに毛があるが成葉では無毛となる。若枝は細く緑色または紅紫色を帯びる。樹皮は暗灰色でなめらか。

#### 21) コミネカエデ

①ミネカエデに似て、裂片の先はさらに細かく長くのびる ②葉柄は無毛。葉は5～8×5～8 cm。上面は無毛、下面は脈のわきに赤褐色の軟毛がかたまる。基部はハート形にくぼむ。樹皮は黒褐色でなめらかまたは浅く縦にさける。各文果ははねとともに長さ1.5～2 cm。互いに広い角度で水平に近く開く。温帯の高木でブナと同様にふつうに見られる。

#### 22) ウリハダカエデ

①葉は3(～5)浅裂、中央裂片が幅広い ②葉柄は緑色 ③下面脈沿いに褐色の軟毛がある。葉の幅は長さとはほぼ等しいか、やや幅の方が広く、裂片の先は細くとがりへりは重きよ歯がある。基部はごく浅くくぼむ。葉柄は2～6 cm。若枝は緑色で黒い斑点がある。

#### 23) ヒトツバカエデ

①葉は広卵形で大きく分裂しない ②葉のへりにはきよ歯がならぶ。葉先はしっぽ状につきだし、基部はハート形にくぼむ。葉柄は3～9 cm、基部はふくらんで対生するものどうし枝を抱く。

#### 24) オオモミジ

①葉はイロハモミジよりも大型で深く分裂する ②裂片のへりにはそろったきよ歯がある。下面主脈のわきに毛のかたまりが見られることがあるほかは無毛。葉柄は葉身よりやや短く無毛。秋に紅葉する。小枝は細長く緑褐色。樹皮は灰白色でなめらか。実の両翼は鈍角～水平に開く。葉がことに深く切れこむものをフカギレオオモミジという。

#### 25) オオイタヤメイゲツ

①葉は9～11に中裂、裂片にやや切れ込みの深い鋭いきよ歯 ②葉柄は葉身の長さの1/2より長く、無毛。基部は深くくぼむ。若枝ははじめから無毛かまたは軟毛があつて早く落ち、緑色か時に赤色をおび、のち灰褐色となる。樹皮は暗灰色または灰褐色でなめらか。

#### 26) ウリハダカエデ

①葉は3(～5)浅裂、中央裂片が幅広い ②葉柄は緑色 ③下面脈沿いに褐色の軟毛がある。葉の幅は長さとはほぼ等しいか、やや幅の方が広く、裂片の先は細くとがりへりは重きよ歯がある。基部はごく浅くくぼむ。葉柄は2～6 cm。若枝は緑色で黒い斑点がある。

#### 27) ミズナラ

①きょ歯はおおぶりでとがり、やや浅裂状 ②基部は細くなりごく短い葉柄の左右に耳たぶ状に突きだす。葉は枝先に集まってつき、上半部が最も幅広く側脈は10～17対で枝分かれしないできょ歯に入る。下面の脈状に長い絹毛が残る。果実はコナラなどと同様にどんぐりである。夏緑樹林の主な高木でブナと同じ高度に広く分布する。

#### 28) ブナ

①葉のへりには波状のきょ歯がある ②側脈は7～11対、平行に走り、へりの直前で上に向かう。歯は2列に互生し5～12×3～6.5cm、はじめ両面に絹毛があるがのち脈沿いに少し残る。葉柄は0.5～1cmで絹毛が残る。小枝は細く暗紫褐色で皮目が散らばる。樹皮は灰白色でなめらか、しばしば地衣類がびったりはりついて斑紋ができる。

#### 29) イヌブナ

①葉はブナより長めで側脈は10～14対。 ②葉の下面は絹毛が多い。葉は5×10×2.5～5cm。葉柄は0.4～1cm。小枝は紫褐色、樹皮は暗灰褐色でいぼ状の皮目が多くざらざらしているがのち縦にさける。

#### 30) アオダモ

①きょ葉は鋭くのぎ状にとがる ②若枝無毛かまたは荒い毛がある。葉は5～12cm、小葉は5～7枚長だ円形。先は細くのびてとがり基部はやや左右不同。中央脈下部に毛がある。

#### 31) ハリギリ

①葉は5～9片に中～深裂する ②下面脈沿いに淡褐色のちぢれた毛が多い。葉は枝先に集まって互生し、裂片は急に狭くなってとがり、へりには鋭い細いきょ歯がある。上面はほとんど無毛となる。主脈・側脈ははっきりと下面に突出する。葉柄は7～30cm、はじめちぢれた毛があるが、のちとれ、基部は著しくふくらむ。小枝は太くふつう多くのとげがあるが、ときにとげのないものもある。樹皮は黒褐色で深く不規則に縦にさける。

#### 32) トチ

①葉は対生、小葉5～7枚 ②小葉柄はない。小葉は倒卵だ円形、へりは鈍歯。下面脈状に黄褐毛が密。葉柄は10～20cm。温帯の落葉大高木。

#### 33) トウゴクミツバツツジ

①葉の上面に黄褐色の毛が残る ②下面の中央脈の下半から葉柄全体に淡紅色の軟毛が密生している。葉はまるみのあるひし形。花は紅紫色で葉より早く、または同時に開く温帯の低木。

34) ナナカマド

①小葉は鋭い重きょ歯縁 ②托葉は卵状皮針形で小さく早く落ちる。葉は1.2～2.4 cm。小葉は1.1～1.5枚中央の対が最も大きい。先はとがり基部はやや左右不同。秋に紅葉が美しい。

35) アセビ

①葉は枝先に集まって輪生状 ②若枝は緑色で縦の溝が目立つ。葉は革質、中央脈は上面でくぼみ微毛がある。葉を透かしてみると大きな網の目が明るく見えるがこの網の目は透かさなくても両面に見える。花は壺状で白く下を向くが、果実は上向きとなる。有毒植物で昔は漢字で馬酔木と書いた。主に照葉樹林に生える暖帯の低木。

36) オオカメノキ

①葉は丸いハート形で不規則な掌状脈 ②葉や若枝に淡褐色の小さい星状毛が多い。へりにふぞろいのきょ歯画ならび側脈は多くの枝を分けている。葉柄は2～4 cm。頂芽は裸ではじめだけ2枚の細長い鱗片を伴う。果実は広卵形で赤く熟し、のち黒くなる。

37) ジゾウカンバ

①葉は短枝の先には2枚が対生状につく ②葉の下面は黄緑色で脈状に絹毛が多い。葉は卵円形、先は短くとがり基部はまるいか、ややくぼむ。樹皮は灰白色で横に薄くはげる。開けて陽の当たる夏緑樹林にはえる温帯の高木で本州（関東・中部）にまれに分布する。

38) モミ

樹皮は暗灰色で平滑あるいは浅く割れることもある。若い木にはところどころに横長の脂袋がある。若い枝には毛がある。葉は扁平な線形で長さ2 cmほど。若い葉や陰葉は先端が二叉で鋭くとがり古い個体の葉や陽葉は先端がわずかにくぼむ。表面は濃緑色、裏面は淡緑色で光沢がある。陰葉は枝に羽状につき、幹の上部の陽葉はらせん状につく。ツガと紛らわしいがツガの葉は黄緑色で葉の長さが不ぞろい。樹形はきれいな円錐形。高さ2.5 m、直径1 mほどになる。

39) シラビソ

樹皮は暗灰色で平滑。ところどころに横長の脂袋がある。若い枝には褐色の毛がある。葉は扁平な線形で長さ2～2.5 cm、先端はくぼむ。表面は青みをおびた緑色で光沢があり、裏面は淡い緑色。枝に左右に羽状につく。樹形はきれいな円錐形。高さ2.0 m、直径5.0 cmほどになる。

40) ヒノキ

樹形は円錐形。高さ30m、直径60cmほどになる。樹皮は赤褐色で縦にはがれる。葉は鱗片状で長さ2～3mm。先端はとがらない。表面は濃緑色で光沢があり、裏面は淡緑色で白色の気孔線がY字型にある。葉は上部の生きた枝につき下部枝は枯れても落ちずに残る。枝は無毛。

#### 41) ミズメ

①樹皮はサクラに似て、傷つけるとサロメチールのにおいがする ②最下1対の脈はしばしば多くの分枝を出して三行脈移行型となる。葉は短枝には2枚が対生状につく。基部は丸いか浅くハート状にくぼむ。側脈は10～14対。

#### 42) ミヤマガマズミ

①葉の下面脈状に長い絹毛が多い ②側脈のわきには淡褐色の毛がかたまる。ガマズミに似ているが星状毛はなく腺点が多い。葉柄は1～2cmで赤色をおび長い絹毛がある。ガマズミより高いところにはえる。

#### 43) ダケカンバ

①葉は三角状卵形～広卵形、側脈7～12対 ②小枝に樹脂のかたまり状の腺点が多い。葉は短枝には2枚つき、下面のわきに褐色の毛がかたまる。樹皮は淡い赤褐色で光沢があり、横にはげる。亜高山の高木で森林限界付近では低木状となる。

#### 44) チドリノキ

①葉のへりは重きよ歯縁 ②側脈は多数平行し、先はきよ歯に入る。歯は長だ円形、先は少ししっぽ状にのび、基部はふつう浅くくぼむ。側脈は15～25対。果実は柄の先に2個に分かれてならび翼がある。

#### 45) ダンコウバイ

①葉は3裂、深く切れ込む ②三行脈は葉身基部から分かれる ③葉柄は1.5～3cmで、はじめ絹毛がある。枝本の葉は分裂しないでハート形となる。裂片の先は鋭くとがる。下面は主に脈状に淡褐色の軟毛を生じる。したがって側脈や一部の細脈は淡褐色に見えるが葉身はやや白味をおびる。果実は球形で秋に赤色から黒紫色に熟す。

#### 46) サワグルミ

①小葉の基部は著しく左右不同 ②小葉はよくそろった細かいきよ歯縁。葉は長さ20～40cm、小葉は9～21枚。先は急に細くなるとがる。両面は短毛がちらばり、下面に小腺点、中脈沿いに灰軟毛がある。温暖の谷沿いに多い落葉低木。

#### 47) カツラ

①葉は円心形で波状の鈍きよ歯がある ②掌状脈は五～七行脈 ③きよ歯の先端に1個ずつの腺点がある。葉は長い枝に対生し短枝上には1個つく。先は鋭くとがるか丸く、基部は多くハート形に浅くくぼむ。無毛で下面は灰白色。葉柄は2～4 cm。温帯、暖帯の谷沿いにはえる落葉高木。

#### 48) シオジ

①葉柄基部はふくらみ、向かいあうものどうし相接する ②小枝は太く灰黄褐色で無毛。葉は長さ2.5～3.5 cm、小葉は5～9枚、倒皮針形、先は急に細くなりややしっぽ状にとがる。側小葉には小葉柄はほとんどない。温帯の谷沿い多い。

### 源流資源調査・大菩薩と牛ノ寝の花々

源流散策や山歩きの楽しみの一つに山野草との出会いがある。週末にハイキングに出かけたり、山歩きで苦しい坂道を黙々と上がり続けているときに、ヤナギランやソバナ、ツリガネニンジンなどの山野草を見つけると、思わず立ち止まってその可憐な花に見とれてしまう経験は誰でも持っている。また、花の名前を覚え始めると、その場所や山にこれまでとは違った親しみを覚えてくるから不思議である。自分の気に入った花に出会うことを目的に出かけることさえある。さらに、花の名前に興味を惹かれその由来を知りたくなったりする。自分の場合、ヤマオダマキとの出会いは忘れられない。花の形が昔の麻糸を紡ぐときに使用した苧環に似ていることからその名前は付けられたという。フシグロセンノウは、葉の付け根の節が黒なっていることからフシグロの名が付けられ、センノウは、中国から渡来したこの花が京都嵯峨の仙翁寺（せんのおうじ）にあったことから生まれたという。大菩薩峠から奈良倉山までのハイキングコースに、様々な花が姿を現す。山野草の専門家の小島力さんの協力で山野草の調査とヒヤリングを実施した。また、大菩薩峠から松姫峠までのモミジとカエデに関しても聞き取り調査を行った。その結果を紹介する。

### 春の花々

- 1) ハシリドコロ
- 2) タチツボスミレ
- 3) エイザンスミレ
- 4) アケボノスミレ
- 5) アズマイチゲ
- 6) ナガバノスミレサイシン
- 7) カタクリ



- 8) ミツバツチグリ
- 9) ミヤマケマン
- 10) ムラサキケマン
- 11) ヒトリシズカ
- 12) フタリシズカ
- 13) フデリンドウ
- 14) ニリンソウ
- 15) イチリンソウ
- 16) エンレイソウ
- 17) シロバナエンレイソウ
- 18) ヤマエンコグサ
- 19) イカリソウ
- 20) ラショウモンカズラ
- 21) ヤマシャクヤク
- 22) マムシグサ
- 23) チゴユリ
- 24) ホウチャクソウ
- 25) イワウチワ

#### 夏の花々

- 26) レンゲショウマ
- 27) ナルコユリ
- 28) ミヤマナルコユリ
- 29) ハンショウヅル
- 30) アカショウマ
- 31) ヤマホタルブクロ
- 32) ヤマオダマキ
- 33) カワラナデシコ
- 34) オカトラノオ
- 35) ギンバイソウ
- 36) ツリフネソウ
- 37) キツリフネソウ
- 38) ソバナ
- 39) ツリガネニンジン
- 40) オオバギボウシ

- 4 1) オトギリソウ
- 4 2) ヤナギラン
- 4 3) フシグロセンノウ
- 4 4) センニンソウ
- 4 5) ササバギンラン
- 4 6) ヤマユリ

#### 秋の花々

- 4 7) マツムシソウ
- 4 8) オトコエシ
- 4 9) キバナアキギリ
- 5 0) クサボタン
- 5 1) センブリ
- 5 2) ツルリンドウ
- 5 3) ヤマトリカブト
- 5 4) アキノキリンソウ
- 5 5) サラシナショウマ
- 5 6) レイジンソウ
- 5 7) リンドウ
- 5 8) オヤマボクチ
- 5 9) ヤマホトトギス
- 6 0) ヤマジノホトトギス

#### 大菩薩と牛ノ寝のモミジ・カエデ

- 1) イロハモミジ
- 2) オオモミジ
- 3) ヤマモミジ
- 4) ハウチワカエデ
- 5) コハウチワカエデ
- 6) ヒメハウチワカエデ
- 7) オオイタヤメイゲツ
- 8) ミネカエデ
- 9) コミネカエデ
- 1 0) イタヤカエデ

- 1 1) エンコウカエデ
- 1 2) ヒトツバカエデ
- 1 3) カジカエデ
- 1 4) ウリカエデ
- 1 5) ウリハダカエデ
- 1 6) ホソエカエデ
- 1 7) チドリノキ
- 1 8) メグスリノキ

#### (4) 源流資源調査・流域と流域を結ぶ源流古道

##### 道に刻まれた色々な時代の記憶

我が祖国の先人達は、おそらく日々の食料を得るために、山野を無心に駆け巡ったであろう。道の多くは、獣道を探すことから始まった。鹿や猪、狸や狐など獣たちが切り開いた道は、自然を知り尽くしているが故に安全で最短距離だった。古人が獲物を追いかけた道は、やがて生活や暮らしのための道に変わり、四方八方に繋がり、土地と土地を結ぶ道、集落と集落、さらに流域と流域を結ぶ源流古道へと発展していった。

源流古道のなかでも、峠や高地を駆け抜ける尾根道は古人に無限の広がりや未知の世界への好奇心を提供し続けたであろう。何故、ここに峠や尾根道が通り、今なお存在しているのか、その歴史や背景を意識して歩くと、道に刻まれた色々な時代の記憶を辿ることになり興味は尽きない。

尾根道に関して面白いエピソードを年配の猟師から聞いた。尾根道では、飲み水の確保が難しいが、「水は尾根に差す」と言う。どんなに険しい尾根でも、獣たちが生きている限り必ず水は姿を現すと。水の道に関しても先駆者はやはり獣たちで、自然に寄り添いながら生きるものたちには、いつの時代にも神のご加護があったのだろうか。

##### 長老の秘話・ヒノキ尾物語

田元や井狩地区から、モロクボ平を抜け棚倉小屋へと向かう。ショナメ、狩場山、牛ノ寝、榎ノ尾から、天狗ノ頭、狼平と続く源流古道を辿りながら歩き続けるとヒノキ尾にたどりつくのである。

村の猟師達は、土室谷と小金沢谷を跨ぐ尾根一帯にしばしば猟に出かけたという。原生林の生い茂った源流域には、熊やカモシカ、ニホンジカがいて、足場は遠いが行けば必ず獲物を収穫することが出来る場所（コメデー・米代）もあったという。コメデーとは、一日分の米代が稼げることから生まれた地名であった。しかし、たまには運悪く獲物をとることが出来ない日もあった。こうしたおり、猟師は山々からヒノキの苗を持ち帰り、畑で育ててから売りさばいたという。このヒノキは、特別に香りと色が良く、以来、この尾根はヒノキ尾と呼ばれるようになったという。昨年、村の古老からこのヒノキ尾の聞き取り調査を行い、所在地がはっきりした。このヒノキは学術的にも関心が持たれており、大菩薩ヒノキ復興という新しい可能性が生まれている。

## 大菩薩峠は交易の十字路

中里介山の「大菩薩峠」を導きとして

近世、大菩薩峠越えの道は、国中（甲府）から萩原口と称し、青梅道・青梅往還・大菩薩越えともいわれ、甲州から武州多摩郡青梅を経て江戸に達する重要な古道であった。あの有名な中里介山の長編小説「大菩薩峠」は、次の巻頭言ではじまる。「大菩薩峠は、江戸を西に距（さ）る三十里、甲州裏街道甲斐の国東山梨郡萩原村に入って、その最も高く最も険しきところ、上下八里に跨る難所がそれです。標高六千四百尺、昔、清き聖がこの嶺の頂きに立って、東に落ちる水も清かれ、西に落ちる水も清かれと祈って、菩薩の象を埋めて置いた。それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いづれも流れの末永く人を湿ほし田を実らすと申し伝えられてあります」

大菩薩峠を中心とする源流古道は、甲州裏街道、古青梅往還、行者街道など古の交易・交流を巡る十字路に当たる交通の要衝であった。この源流古道を調査研究し、色々な歴史的遺産を掘り起こし、源流文化の神髄を明らかにすることは、極めて重要な課題になっている。

### 峠の無人交易

青梅街道は、甲州街道の裏街道の役割を果たし、交通量も多かった。甲州の萩原口と小菅の余沢に口留番所が置かれ、「入り鉄砲と出女」を取り締まった。しかし、昇降八里の道は険しく、人家もなく、物資を運ぶ苦勞が大きかったので、大峰荷渡しと呼ぶ無人の荷物取引の風習があった。当時の様子を甲斐国誌は次のように記述している。

「大菩薩峠は小菅と丹波より山梨郡の萩原へ出る山道なり。昇降八里、峠に妙見大菩薩

社二つ、一つは小菅に属し、一つは萩原に属す。萩原より米穀を小菅の方へ送るものも峠まで持ち来たり、妙見社の前に置いて帰る。小菅の方より荷を運ぶものも亦峠に置き、彼の萩原より送るところの荷物を持ち帰る。此の間数日を経ると雖もすべて盗みたるものなし。」

取り引きされた物資に関しては、小菅大菩薩道を利用して小菅から木炭、コンニャク、経木、山葵が、萩原から米、酒などであったという。萩原は甲斐を代表し、小菅は武蔵を代表する玄関口の役割を果たした。

また、「甲斐国誌」に次のような歌が紹介されている。

坂木夫木集六帖 壬生忠峯

題しらず よみひとしらず

「甲斐の国 鶴の郡の板野なる しら玉こすげ笠を縫うらん」

宗祇法師

「はるばると甲斐の高嶺はみえかくれ 板野のこすげすゑなびくなり」

#### 土室・小金沢の御巢鷹山

日本では古来、将軍家や有力大名によって鷹狩りが行われていた。鷹は、鷹狩りの際に放鳥に用いられたのであるが、その鷹の雛を育てる場所が御巢鷹山である。江戸時代、甲州は天領（幕府直轄領）であったから各地に御巢鷹山が設けられた。甲斐国誌によると、土室・小金沢には、御巢鷹山が十六カ所あったという。うち十二カ所を小菅が、残り四カ所を西原が守っていた。小菅には、御鷹見と称する村人が十人いて、二人一組になって山中を巡回し、鷹の様子を観察した。土室谷のうち、サギチョウ尾、クリノ木尾、シラヒソ油尾、タタビノ尾、ノボリ尾、戸沢ノ尾の六ヶ所、小金沢山のうち、押払沢ノ尾、大カンバ尾、エンマ小尾ノ尾、ナラノ木尾、石小屋ノ尾、クラカイ場ノ尾の六ヶ所を小菅が管理した。四百年も前から小菅の衆は土室・小金沢に、小菅大菩薩道を利用して入山することが義務づけられていたと言える。

#### 松姫伝説

戦国時代の武将武田信玄の息女松姫は、武田家滅亡の折り、甲州から武蔵国の八王子恩方に移り住んだ。大月から小菅までの県道が開通した折、曲がりくねった険しい峠越えを余儀なくされたが、この峠を松姫が通ったという伝説に因んで当時の山梨県知事田辺国男は、松姫峠と命名した。峠に立つ松姫峠由来には、「武田勝頼は一族挙げての戦いにもかか

ならず天正10年3月天目山に散った。妹松姫は従臣と共に府中（甲府）を後に八王子に逃避の折り当所付近を通過したる史上の伝説に因みここに松姫峠と命名された」と記されている。

父信玄の没後、信州の高遠にいた松姫は、織田・徳川軍の木曾侵攻を知るや甲府へと逃れ、甲府に危険が迫ると塩山の恵林寺へと、さらに同じく塩山の向岳寺へと身を寄せ、向岳寺から八王子に向かった。大月方面経由で西原へ抜けるか、大菩薩経由で西原に向かったか正確なルートは定かではないが、敵方に寝返った大月方面より大菩薩方面が安全であったことだけは確かである。

### 祈りの道・富士講の足跡

日本には、古代から山の神を祀る風習、山岳信仰が根付いていた。神道とか仏教とか様々な宗教をミックスした思想体系で修験道という新しい思想が奈良時代に芽生えた。修験者は、毎日毎日山を駆けめぐって心身を鍛え、一日に何十里も歩くという超人的な行動をとった。その開祖は、役行者（小角・おずぬ）であり、伊豆七島に流された時富士山で修行したといわれている。この流れをくんで江戸時代から富士山独自の信仰形態が生まれ、江戸では爆発的な人気を得て、江戸八百八講といわれるほど富士講は広がりを見せた。

小菅村内には、大成、余沢、白沢、井狩、板東などに富士講の碑が残されているが、このルートは、武蔵や秩父からの参拝の道にあたり、当時白沢には旅籠が置かれ、フリーヤード・「古宿」という地名も残されている。

また、金峰山から富士山へと続く行者街道・秩父古道が通っており、国師岳、甲武信岳、破風山、雁峠、三峯山、雲取山、飛龍山、大菩薩、小金沢嶺から富士山へ続く源流古道は、祈りの道であった。

### 牛ノ寝・狩場山・オオマトイ

大菩薩連嶺の熊沢山から南東に延びる尾根を古人は、「牛ノ寝通り」と呼ぶ。甲州裏街道が石丸峠から松姫峠に向かう源流古道であるが、コメデーから玉蝶の頭を抜けて櫃の尾に至ると、数<sup>キ</sup>に渡って平坦な尾根道が連続する。その尾根筋に幅百<sup>シ</sup>を越える平坦地が姿を現すのである。牛ノ寝と狩場山とオオマテエがそれである。尾根は山容がずっしりと大きいほど生き物たちの宝庫として珍重されたのだろう。森が賑わえば獣たちも賑わうのである。山菜やキノコを採り、猟場にもなる絶好の森を古人は大切にした。

新緑の牛ノ寝には、爽やかな風が吹き荒れ、源流空間を楽しむかのように新しい生命が次々と姿を現す。狩場山は、武田信玄がここを訪れたという伝説の山でもある。山の神が鎮座し、昔から祈りと集いの場でもあった。オオマテエは、広すぎて方向を見失うオオマトイの場所だった。このオオマテエは鶴根山に繋がり、松姫峠、奈良倉山、十文字峠へ源流古道は延びた。

## 謝辞

1994年7月18日午前10時に竜喰谷に入り源流に取り憑かれてからあつという間に歳月が流れた。源流絵図塩山丹波版にはじまり、源流絵図小菅版、源流絵図奥多摩版、そして今回の源流資源マップととうきゅう環境浄化財団にはお世話になりっぱなしということになる。何度頭を下げて感謝すればいいのか分からないくらい力になって頂いた。この間、多摩川源流観察会、多摩川源流研究所、多摩川源流協議会、全国源流ネットワーク、全国源流の郷協議会、多摩川源流大学と源流ネットワークも徐々に広がりつつある。様々な動きの原点に源流絵図がありこれが計り知れない源流からのメッセージを発し続けているような気がする。今回の源流資源マップを作成するに当たり、源流大学の蔵本君、黒沢君、小林くん、石坂真悟君をはじめ加藤亀吉さん、手塚勲さん、青柳一男さん、杉田一夫さん、守重洋作さん、酒井巖さん、船木幸一さん、木下三一さん、小泉守先生、亀井雄次さん、廣瀬晴彦さん、小島力さん、県埋蔵文化センターの石神先生、小菅村の観光協会、小菅村の役場や教育委員会の皆さんなど多くの方々からご協力、ご支援を頂いた。心から感謝したい。

2009年3月

多摩川源流研究所  
所長 中村 文明

## 聞き取り調査に関する参考資料



## 聞き取り調査

小菅の山のこと、源流古道のこと、松姫のこと

加藤亀吉さん（元村長）

中村

今日は源流資源調査の一環で聞き取りにおじゃましました。よろしくお願いします。

加藤亀吉さん

最初から申しますと、今年82歳になりました。従って古老を過ぎまして大分忘れることも多いので話も途中でつながらないこともあると思いますが、まず図面を見ながら小菅の概略をご説明申し上げたいと思います。

小菅の近況は若い人たちがいるから、松姫の由来を先ず申し上げたいと思っています。松姫というのはこの図面の左の一番左にとんがったところがありますね。西ですけど、この下に塩山市と書いてあります、その右に石丸峠がございます。この下に松姫がいた天目山があるんです。天目山は見えませんがこの下にありました。ここで天正10年3月11日に武田氏が滅亡の時にこの下にいたんです。そしていよいよ勝頼夫妻が割腹なされる、おまえ達だけは落ち延びて子孫を残せよ、ということで一行14、5人の一同がこの石丸峠に上りまして、この峠づたいに右へ松姫峠にたどり着いて、これから右の、もう一つ鶴峠があります。このハイキングコースを通過して奥多摩のダムの上へ出ます。そして陣馬山を通過して八王子へ降りたのがコースでございます。

実はこの通りは昭和41年に開通したんですがその時に峠の名前を付けようじゃないかという募集があったんです。当時、私が役場へ入ったばかりでした。41年ですがその時に募集がありましたので、事前に私が調べておいたんで松姫峠という名前を付け、それが合格したということなんです。当時松姫というのはあまり知られておりませんのでその由来をということで、一応記録を持って県へ行って、それが合格したということの経過でございますが、県下ではあまり知らなかったんです、ここを通過したということ。41年に松姫峠が誕生して、命名者は山梨県知事ということになっておりますが、そういうことが経過でございます。

私は松姫について当時名前を付ける上からもう少し詳しく調べたいということで八王子へ行きました。八王子の心源院というのが、恩方にあるんですがそこへ下りまして、2年ぐらいたったようですね。それから八王子の藤森公園、そこに信松院というお寺が今でもありますが2年後にそこへ行ってから58才までそこで暮らしたという記録がございます。ところが18歳の時にはここを上ったようですが、八王子へ行ったら学者になりまして、塾を開いたり、織物を教えたりなかなかの文化人だったようです。

有名人で生涯暮らしたということでございます。皆さんご存じの所を私が説明するの

なんですが、なぜ、ここを越したかということに戻りますと、ちょうど天正10年3月11日に天目山まで行ったんですが、その間に信玄の息子の武田勝頼が織田に追われ、徳川に追われ、北条にすら追われたんです。北条の娘を嫁にもらっていながら三方向から追われて逃げ場所がなかったということが実際のようなようです。勝頼夫妻はあそこで割腹したからおまえ達はということであそこをしのいで八王子の信松院へ落ち延びたという経過のなかなか哀れな物語なんです。

ところが天正10年3月11日に来たんですが、それから80日たったら本能寺があったんですよ。ですからその歴史がどちらかに変化したら世の状況も変わっていたんじゃないかなということで、考えるくらいに悲しい武田の最後でしたけど、あの長篠の戦いの頃は大変な威勢のものが急転直下、あんな具合になりましたからね。山梨県としては哀しい話なんです、これは。ですから今では松姫を偲んで毎年甲州で武田軍団の出陣式が八王子の市役所の職員が松姫や一族に扮して2、30人行列するんですがね。歴史のことですから前後すれば、あるいは天地すればという、こうあればという結果論に、後の後悔になりますけれど、そういう過去もあったなということです。なお武田信玄が今もそうなんですがお墓がいくつもあるんですね。悪いことをすると後でシナの物語ではないけれど、頭蓋骨で酒を飲むという心配もあったのでしょうか。一説では諏訪湖の中から今、真ん中から湯が出ますが、あそこに石の棺に埋めたから亡霊が湯になって出るんだという説もありますし。これで武田一族は全滅したわけです。松姫一族は。

そんなことを含めましてこの峠は昔から、昔は佐野峠と言ったんですが、山梨県に行くには小菅からはここを通る以外にはなかったんです。汽車で行くにも立川経由でないと、甲府にも大月にも行けなかった時代があったんです。ですからここを歩いたんですよ。役場の職員も結構歩いたんです。一日がかりで歩きまして午前中の会議には前の日に行く、午後の会議には会議を済ませて泊まって帰るとというのが小菅の職員の常です。大月も甲府も。それでなければ奥多摩へバスで行って、立川経由で行かないといけなかった。それで、陳情を重ねまして、時の知事をお願いしてこの佐野峠を作ろうということで今の松姫峠の道路が自動車を通るようになったのは開通が昭和41年なんです。それで名前を付けようということで松姫峠ということになったんです。これをたどりますと、峠をつくらうというのが昭和29年だったんです。その時うちの親父が村長だったんです。天野久さんが知事だったんです。その時に昭和29年に町村合併がありまして、ここと丹波は東京都へということで協議したんです。全員の住民が。東京都もよろしいということでもう少しで合併する寸前までいったんです。そうしたら天野知事さんが、朝駆けで飛んできてうちにきて、加藤村長、是非我慢してくれということで、謝られたんですよ。酒か何か一升持って。是非思いとどまってくれ、小菅と丹波が東京へ出るというと、うちは甲府盆地しか残らないよ。北の方は長野へ行く、南は静岡へ行く、神奈川に取られるとしたら甲府盆地しか残らないから是非やめてくれということで、そこで、知事さんがせっかく来たんじゃないということで、緊急に臨時会を開いてやめるようになったのが経過なんです。そしてそれではこ

の峠を作りますということで作って、昭和29年に着工して42年に完成したのがこの峠なんです。その名前を付けたわけです。

今度は今の峠じゃどうも大変だからということでトンネルを造る交渉をしたのが去年から着工している松姫隧道です。ようやく向こうからこっちへボーリングしますからそうすると、40分もかかるのが5分で行っちゃいますから。そんなこんながありまして、この松姫には親子二代で歴史に参加している訳なんです。先刻、年寄りじゃないと言ったけど、年を取らない原因がそこにあります。この松姫峠が開くまでは生きていなければ困るなど。今度は欲が生まれて、このトンネルが開いたら、自分で運転して行きたいと。そこまで欲が生まれたから、なんとか自分で運転して隧道を通りたいなと思っています。松姫の由来はそういう経過でございます。

松姫に行く途中に、恩賜林といって五千畝の山があるんですが、それは昔から小菅村、隣の西原、今は大月ですが旧七保村の三か村の管理の下で、御鷹巣山といって鷹を献上する山だったんです。その3か町村で監督しまして、今でも管理をしています。松姫から見た沢が全部そうなんです。約五千畝で、小菅の全面積と同じくらいなんです。この図面の石丸、塩山市のところから上野原町のところ全部そうなんです。明日、この辺に登るわけですが、この辺一帯にブナの林がありまして、見晴らしの良いところですから。私が先日お話ししました檜尾というところはここなんです。ヒノキの原始林がありまして、それが小菅の百年のヒノキの元祖なんです。昔、猟師が苗を間引いてきたのを畑で栽培したのを植えてありますがね。天然のヒノキがここにいます。御鷹巣山というのは、昔、鷹を監視していて、毎年何羽納めるとか巣がいくつできて、いくつ子供が孵ったとか調査をしたようですね。徳川の城用の鷹ですから、徳川の幕府が続いている間はやったようです。群馬の御鷹巣山もそうなんです。あそこの村長は黒沢というんですが、9期村長をやって92歳で辞めましたが、今年辞めまして、その御鷹巣山は栗沢村長の山なんです。自分の山と県境なんです。

山の名前は小金沢と言います。御鷹巣山を管理すると、徳川の時代にはたとえば青梅では御鷹巣という山じゃなかったけれど、鷹の餌を出せという割り当てがあったそうです。スズメを100羽とか、ホオジロを200出せとかいってその鷹の餌の割り当てがあったそうです。御嶽山のようにしてあったんですね。猟場の遊ぶ材料だから出させられたんです。ただ小菅とかはその見返りとして、その土地の材木をもらって箸を作るとか、今の包装紙の代わりに経木というのを作る材料をもらったというようなことはあったようです。箸を作って、この下にイカリの大家ってあるんですが、そこにお籠もあるんです。それへ箸を載せて運んだというお籠のようですね。人が乗るには軽すぎるから見ると、箸を乗せて運んだり。背負ったりあまり身体に付けて運んだりしてはいけないということで高貴な人が使うものだから担いでいったんです。贅沢三昧ですね、今から思うと。箸の材料はミズキが多いんです。白い。箸にして運ぶんです。普通は箸八寸と言って、昔の曲尺で八寸

が庶民の使う箸だった。偉いとだんだん長くなっただね。一尺のを出せとか尺二寸のを出せとかいう割り当てがあって出したわけです。結局手でやらないとできない仕事だけでも運ぶのだけでもちゃんと高貴の人が使うんだから背負ったりしちゃいけないぞということで担いで行ったようですよ。そんなような言い伝えです。八寸というのは24センチです。それが庶民の使う箸のようでした。今でも割り箸は見れば大体それぐらいの大きさです。

この小菅でも植林については先輩が大分熱心にやっておりますが私は役場を辞めまして、秋田へ三回ほど行きまして、秋田杉の二百年、三百年というのはすごいですね。靈気があるような、魂が宿るような山で神々しい山があります。忠岡の周辺は湖を囲んで二キロの幅でずっと一周する。そこは本当の天然林で、深山幽谷という感じがしますね。そこはスギ林じゃない自然の山で、スギもあればブナがあり、ナラがあり、トチがありといった具合で。山のありがたさというか、尊さというか、神秘さというかこんな山から行ってさえ感じるぐらい忠岡のひとはいいですね。そのすぐ続きに個人の山がありまして、そこに二百町歩くらい二百年生くらいのスギがありました。見事な山でしたがね。もう少し奥というか下へ入って、国有林の秋田スギのいい山がありました。そこには58メートル樹高がある、木とすれば日本一高いと言っていましたスギがありました。日本全国の、何の木でもこれ以上高い木はありません。周囲は直径が2メートル50センチくらいありましたかな。そして58メートル。すごいですね。ビルの20階建てです。昔の人が、神が宿るとするのはあのことも知れませんね。なにかそういう気がします。見ているだけで、ただ見ているだけで神様がいるような感じがしますね。

(先ほどの御鷹巣山は明治になって山梨県に恩賜林として管理が変わってわけですか)

そうです。

(その後は今カラマツがたくさん植えられていますけど森林のあり方が変わってきたのですか。)

変わってきましたね、特に闊葉樹がいっぱいあったのを伐採してヒノキを植えましたからね。

(闊葉樹のときにもうヒノキが植えられてた?)

戦中戦後うんと伐採しきっちゃって、あと、植えました。戦後の二百年、三百年の闊葉樹がいっぱいあってもったいないですね。今で考えると。みんな切りまして、桧尾だけは

伐採したけれど天然林がいくらか残っているはずですが。そこへ東電の揚水発電ができましたから一変して昔の面影はなくなりました。しかもダムは2つも出来ていますからね。飲用水のダムと揚水発電の受けるダムと。あそこはサルやシカの棲むところだったんですけど。やっぱり乱伐しちゃいましたからサルもよそへ出ていきまして、ケモノが荒らすのは先に人間が山を荒らしたからその反動で出てくるんじゃないでしょうか。そんな気がします。

私は将来は秋田の山のような山を形成できればいいなと想像しています。2000年300年という中からぼつぼつ切り抜き間伐しながら用材を使うという流れになればいいなと思います。

(都有林の関係、県有林から都有林になったのか、御料林から直に都有林になったのかその辺をお聞かせ下さい)

都有林は御料林からなった。御料林は出し抜かれたんです。直接都が買ったんです。それで後から小菅と丹波で交渉して、今で言う入会権なんです。入会権を主張して売上げの時に、立木を伐採したときは2割を地元に戻すという特約が出来まして、それで納得しましたけれど。それは明治の末で、もう100年過ぎました。それで木を植えたのが現在の都有林の丹波から一切がそうです。小菅もそうです。小菅によそから苗を持ってきて植え始めてから100年経ったという根拠はそこなんです。その頃ですとまだ植林という方法は知らなかったからね。山を伐って、ヒノキやスギを植えて大きくすれば用材というのができるんだよ。これがヒノキの苗だということで当時は埼玉から来たようですけどそれを植えたんです。それを植えたんですね。その前は猟師がこいでくることぐらいのことしかなかったんです、苗木は。ここは全て木炭の生産地でございまして350戸所帯ですけど10万俵くらい焼いた年があるんです。1戸平均100俵くらいかな。どこでも冬になると製炭が専用になりましてね、戦時中なんか特に割り当てがあってやっていたんですけど、炭にすると重量が5分の1になるんで、搬出するときに楽なんです。木材ですとそのまま持って行かなきゃならないですけど、炭にすると5分の1で運賃は5分の1になるから商品価値はあるということではほとんど炭、木炭でした。天然木で、ナラが一番よかったです。クリとかトチとかブナとかいうそれは、今、ブナの大木があるんですがそれなんです。ブナは何にもならないんです、炭にしても。それで残したから。炭に焼けなかったんです。ですから秋田と青森の境にある白神山地のブナはすごいですね。すごいうて、あれはものにならないから、使えなかったからおいたということです。ところが今はそれが水をためるとか言って褒め称えるけどね、昔はあんな用無しの木はいらなかった。

(残った背景はそうだったんですか)

ブナが口がきければ、ようやく世に浮かばれたということでしょうか。ですから明日行かれるところはブナがうんとありますよ。切り残しておいたから。昔、用無しの奴をウドの大木と言ってましたが全くウドの大木だったわけです。

(誰だ、今日、神々しいなんて言ったのは)

水を蓄えたり土壌を作るには確かにいいようですね。昔はそうだったんです。昔はナラ、クヌギといって炭には一番よかったです。それをナラ〇上とかクヌギ〇上とかいって、それは別格で売れたんです。後の雑木は雑の何とかいって単価も違っていたんですね。

(クヌギはここら辺にはあまりないですか?)

ないね。あれは植えないとないですね。夕べでしたか、その真ん中でね、修羅出しというのがあったんですけど。この地区でもやったんです。出材の方法として、夜、川の水を堰き止めておいてその下の下流へ、鉄砲出しといったんですかな。水流が増えると材木を流したんです。流して行って止まったところに止めをかうんです、真ん中に。下流の一番狭いところへ作って。大変な設備です。ですから人の体ぐらいみんな太いです、その木が。大きな木を持って行って作って。そうじゃなきゃもたないですよ。ダムへ木が行って詰まりますから。台風の時でもそこへ行けば止まるんです。そういうところへ修羅を出して行って自然の沢で20度、30度、40度くらいまでの勾配のところへ木を並べて下へとぼして順にリレー式にして。出材に使ったんです。そしてその下流に行って水があるところになると水を流したんです。事故もありました。と同時に木材も町へ着くときには3分の1ぐらいになっちゃうんですよ。持ち手に当たっちゃったり、暖を取ったり、折れたりしますからね。着くときには減っちゃっている。山はそれを見越して買ったんです。ですから山の所有者はいくらも手をつけないというのが現状でした。

(当時、青梅のあたりのがまだあるじゃないですか。それでも用途があったと  
いうか、買ってくれたということですよ)

結構売れたんです、ここでも。売れて金になったんですが、ですから運賃だけ差し引いたのが山の値ですから、もともと安いはずです。それでも雑木林よりはよかったです。

(当時はスギやヒノキもよかったです)

よかったけど、いくらもスギという人はなかったですね。そういう生活の余裕がなかったんです。例えば炭を焼けば明日は金になりますけど、スギは20年、50年経たなければ

ば金にならない。余程余裕のある人でないとできなかった。一代かけて次に使うのは孫ですからね。子どもか孫でないと金にはならんから。

山にいと、日常化してくると気がつかないんですが、いかがですか、みなさんが、山にいて、こういうことは大変じゃないかとか、楽じゃないかとか、苦しいじゃないかとか、なにか他にありましたらそれに対してお答えしますが、なにかありましたら。

薪は、当時のここでいう商品化した薪というのは、長さが32、3センチですか。直径が30センチぐらいの金で輪を作ってそれへぶち込んだのを1把として売りました。割ったものです。木はナラが一番よかったです。

その薪の話になると、その薪で自動車が走ったんです。私も昭和22年に、ちょうど兵隊から帰った時に東京の麻布に兵隊でいましたから、あの辺が3月9日の空襲で丸焼けだったんですよ。その日に行ってみると、東京が焼け野原で、あんなにきれいに焼けるとは思いませんでしたね。隅田川の辺には、言問い橋から下の勝どき橋の川面にびっしり人が浮いて。それをみんな片づけるのに1週間ぐらいみんなで作ったんですが、その時に焼け残った人達に帰りがけに、みなさん、ひとつ家を造ってやるよと冗談を言いながら帰ってきて、ここにはまだトラックが入らなかったんですよ。それで二俣尾の製材屋へ行って、製材して売ってくれないかということで。結構100軒くらい建ってやりましたよ。その時に使ったのが、燃料が薪の車だったんですよ。薪を入れましてね、運転手がぐるぐる、発車するまで1時間かかるんです。ガスを発生するまで。発生炉と言いまして、ちょうどドラム缶を3本繫いだぐらいの長さの奴を車の横に立てまして、その中に薪が入っておこしてガスを作ってそれを車の中に送り込んで火を付けるということですからね。これは容易じゃない、1時間かかりますからね、スタートするまで。それだから車には助手さんが二人くらいついていましてね、朝飯前です、助手さんはそれが仕事ですから。やって、運転手が見て一緒に出るというようなことをやっていたんですね。それで二俣尾から青梅で私は材木を買いまして、その人達と契約をしてきたから、建ってやるよと言って100軒くらい建ってやりました。青梅の木で。こっちの木もその後もっていきましたが、車が入らないんですよ。ダムのところまでしか車が、バスが来ないから。あそこまでは、川流しをしたものです、昔は。それであの辺で製材して、あれを青梅に持って行ってそれを製材して使ったからね。私は勤労奉仕のつもりでやったから、その頃は儲けることは全然なかったんですよ。世話してやって。けど、うれしがられました。10坪ぐらいのね、今、行くと懐かしですよ、あの辺が。バラックですよ、その当時。その時、屋根は屋根材がないんで、屋根材は今でも瓦の下に薄いような。あれを5枚ぐらい載せますとね、5年ぐらいもつんです。全然、皮もないしトタンもないから。トタンはあるところは古い焼け残ったのを拾い集めてきたのを壁の下や屋根に敷けばよかったけど、ない人にはドント節であったでしょ、それをやったんです。ですから3年か4年合間、合間に作ってあげましたよ。よろこばれました。年賀状もきたけど、そういう人は今みんな死んでしまいました。

そんな思い出がございまして。薪を燃料に使うというのは当時からよくやりましたよ。よくこれで動くなど。東京に行くときは、木を割ったのを袋に入れて持って行って途中で補給するんですよ。歩くほどしか走らないんですよ。坂なんか登らないんですよ。

(いい薪ってなかなか東京では買えないんですよ。広葉樹のいい薪があれば)

ただ、あれを使うかまがないでしょ、今。それと今ひとつ、木で薪をというそれを作っていますが、あれは世話なくて。ただ単価が高くなっちゃうんですよ。ガソリンよりは少し高くなっちゃうんです。今、ガソリンが上がってきたからそのくらいには使えるでしょうかな。

それともう一つ、せっかくここでもスギ、ヒノキを伐採して腐るようにするんですけど、地元の木を切って腐らしてしかも、外国から木を買ってくるなんて、こんな馬鹿なことがありますかと。国策としてもこんなことやるべきじゃないと思いますね。だから声を大にして、国産材時代来たるということで、この運動をこれから展開しようと思っているんです。おまえ達の伐った木は使えない、腐らせなさい、外国にはなんぼでも安い木があるんだなんてこんな国策はやっちゃいけないはずなんですよ。

(腐らせろということは売っちゃいけないということですか)

いや、商品化にならない、(採算が)合わないということですね。

(輸入材の方が安いんですか)

安いんです、今のところ。

そうそう、時間的に計算するとかえって高いんですよ。

(安物買いのなんとかを国を挙げてやっているような形ですね。)

そうです。もう少し国の方針としても考えて欲しいと思いますね。それと、昔お百姓さんはお米が安ければむしろ旗を立てて騒ぐ、山主はそういうことをしたことがないんですよ。紳士すぎたんですよ。だから森林組合でいつも叫ぶんですが、これからやろうじゃないかと。もう少し国策としてもこんな能もないことをする必要はないじゃないかということで。だから山へ補助金を出して木を出させるか、なにか対策を考える。それともう一つ、山が安い故に田舎が過疎になっちゃうんです。その辺も国の方針としてももう少し考えるべきじゃないかなということを出産者としてのみならず、この僻地の住民とすれば切望ですね。



ですから、ここでも林道をよく造ることが先ず第一です。道端ならコストもかからないし。要は人件費がかかりすぎということです。林道を密度よく入れるということが先ず解決の一つの方法でしょうな。

(今このあたりで林業を専門としている人はいるんですか。)

おりません。林業がなりたたないから。

(林業技術の後継みたいなことはほとんど考えられないですか。)

森林組合が主体になりましたね、技術は。山梨県には13の森林組合があるんですが、森林組合は林業自体が本来の仕事でありながら、(採算が)合わなくなったからなるべく人件費を、人を使わなくて利益が出るような方法に組合の運営方法をみなさん変えましたね。だから山の手入れができなかったのもそこなんです。でもうちの組合だけは今27人いるんです。県下で一番多いんですけど、10人以上いるのは他にはないんです。だからこの従業員を使ったんじゃ合わないんです。けれど森林組合の経営方針とすれば、人のいない組合じゃ、何の仕事もできないじゃないかということで、多いときは50人いたんですが段々減らしまして、今27人になりましたがね。けど、このくらいの人たちは維持管理できるようにしたいなと思っております、と同時に、大分関心が出て頂いて森林組合に協力を願いつつ増えておりますからね、よかったな、このまま続けていきたいなと思っております。ですから他の組合でも二人、三人ずつ増やそうかなという気運になりました。

(27人の方は他に職業を持っていますか。専門だとすれば生活は成り立つんですか)

専門です。生活は成り立つように今やっています。半分月給制ですから、雨が降ってもやれるような仕事を見つけておかなければならない。なかなか組合運営は大変ですけど。

(今、立木のままで買う人はいないんですか。)

今、全然売り買いがありません。買い手がないんです。でも、場所がよければということで、東京都育林の場合はボツボツはけていますが、個人のはほとんどありませんね。これから是非、昨日もそうなんです、この時代を先取りして、製材して建前までやろうという気運が一般へも普及しようということでやっていますが、これができてくれば少しは高くてもいい材料であるならばというような方向へ向くようでありますから、その辺をやりたいなと思っております。

昔からよくいい木を上手に使えば長持ちするという方法として新月伐採というのがありますね。これは確かに新月に伐った木は虫が食わないですね。絶対入りません。ところが新月だけど、旧暦で申すようですが、闇夜の晩、一年間に12回ありますが、夏の新月に伐ったらどうだろうかと。これはやっぱりダメなんですね。ですから本当に新月に伐るのは11月、冬至から春分までの新月は4回あります。4回ありますが、その間ならば新月でなくてもその間約100日近い間に伐ったならば、闇夜に伐ったのと同じ効果があるようですね。要は木が完全に成長を休止したときに伐ればよろしいということになるでしょう。新月というけれどもね。夏の新月、春先の4月、5月の新月に伐ったらいいかということ、水を上げてからじゃダメなんですよ。だから冬3ヶ月間に伐れば、それで葉乾しをすれば鉄骨みたいに保つですよ。

(冬場の新月というのは、闇夜というのはどういう意味ですかね。)

効果は、木が休止したとき、活動を止めたときが冬至の前から春の春分の少し前までは木が休んでいるから虫が食わない、腐らないということのようですからその時に伐るということが新月伐採というけど、それが根拠だと思います。

(村でも昔から伝統的に新月伐採をやられていたんですか。)

やりました。それが自然にそうなるんですよ。1年間にお百姓が済んで暇になるのが冬ですよ。部落が一部落ありますと、みんな「結」といって話し合いで10軒あれば1年に1軒ずつ普請をしましょうとか屋根替えをしましょうとかいうことになると、冬なんですよ。暇なとき、それが新月の冬の冬至から春分の間に入っちゃうんですよ。偶然にやるようだけど、手間暇のかからないときにとすると、その時以外にはないんです、農家というのは。

新月伐採が一番いいよというのはあるけど、私達の経験からすればその時期ならば変わらない。というのは全て腐りやすすくないという原因は、正月に搗いた餅で、その正月についた流れの水を汲んで、餅を入れておくので春先まで腐らないんですよ。その時期のバイ菌が一番少ない水を汲んで餅を保存すれば、空気に触れないように水に入れておけば腐らないぞということだろうということだと思っただけです。ですから木の場合でもその時期ならば一番バイ菌も少ないし、腐る原因がないな、木が休んでるときだから。というのが原因じゃないかなと。しかもその時期に乾燥させれば、ちょうど時期も乾燥する時期ですから自然の摂理がそう作ってあるのに、たまたま気がついたんじゃないかなと。学問的な裏付けはどうか知らないけど、自然の慣習でそうなっているのかなと。私達もそこまでは究明しませんでしたけど。

(それで実験をすると必ずそうなるんですね。)

そうです。昔は屋根を葺くのに藤を切ったんですよ。その時期に切った藤は虫が全然食わない。屋根裏はあれでみんな縛ったものです。山の藤をね、夏に切った藤は1年おくとみんな虫が食っちゃうんですよ。竹もそうなんですよ。竹も1年間使う材料は冬のいい時期に切っておけば1年中使える。

ですからこれは賃貸関係でこれからやるのは、例えば甲所有の山を乙が来て買いましょうと。この木とこの木を私は欲しいんですよと注文したら、その木を新月の時期に伐って製材してどうぞと持っていくようなルートができればこれが一番間違いがないなと思っています。

今、森林組合全体でそういう形を作ろうということでやっていますが、地主さんと、米なら産地直送と同じことをやろうとしています。

(いわゆる、小菅の木は新月材だというニックネームで売り出したいですね。)

そうです。その時期に伐って葉乾しをしないと、それを製材するというのが一番合理的ですから。いいと思います。あと、1年中伐らなければならぬほど、商品はそんなに売れるものじゃないから、いい時期に伐って、どうぞと言った方が信頼は出てくるし、実用価値も出ますしね、耐久力もあるしいいじゃないかなと思いますね。産地直送をやりたいと思いますね。

そうですね。昔の建築みたいに曲がった梁を使うなども大分評判がいいようです。ベニヤも結構ですけど、木の材をとることができれば理想じゃないでしょうか。合板もいいですけど、接着剤というものがあまり健康的によろしくないんだね。

(呼吸しないですからね。)

(今日はブナが資源として用なしの材ということを知りましたが)

でも、いいことにこれからブナも床材、フローリングにいいですから、いくらかブナはブナの威厳が出てきたでしょうな。

(今日は本当に有難うございました)

## 聞き取り調査・源流資源調査

源流古道のこと 松姫のこと

加藤亀吉元村長

今日は源流資源調査ということで、源流古道のこと、新しくついた道だとかさまざまな道の調査をやっておりまして、特に加藤元村長が在任のころに松姫峠を県の事業で完成をするということがありまして、その時その峠をどういう名前にするかということでいろいろ努力をされていい名前がついたということを知っているんですがそこらのいきさつを少し聞かせていただけたらと思ひまして。

(加藤)

丁度始めたのが昭和42年かな。1年か2年私が助役になった年ですよ。当時大月と小菅の共催で竣工式をやって、私が総合司会をやったんです。その時に発表したのが松姫峠なんです。当時、松姫というのは山梨県にあまりうれてなかったんです。当時佐藤八郎先生なんかもあまり取り上げてなかったんです。いろいろ学説はあったんですが、知事が本当かい、加藤村長に記録があったら持ってこないかということで、私は県庁にもっていったんですよ。その根拠は何かということで。当時私は材木屋をやってたから。八王子の恩方のある地主のところへ行ったら今の話が出たわけです。40年ですから開通の1年前だったんです。当時局長だったかな。大地主でした。そこに花が咲いちゃってね、夜中にいったんだけどその話になっちゃってね、一晩泊まり込んだよ。そこで松姫の履歴を伺ったんだ。それが当時の天正10年3月11日武田勝頼の滅亡の時に天目山で別れてお前達は北条へを頼れとあったんだが、織田信長が上ってくる、徳川がくる、みんなに攻められてるからねどっちへも行けなくて、あの天目山から上へ登って歩く以外に道はない。わしもずっと歩いていった。そしたらそれ以外にはないということで、しかも西原の方に松姫が通過した歴史もありますからね。それとこれを繋ぐにはどうしてもあそこを通らなければならぬ、そこでこれを峠にしようということで結論ついたんです。

(中村)

長作の守重洋作さんに話を聞いてたら、西原に3泊したというんですよ。西原のお寺に。

(加藤)

ですから約1ヶ月くらいかかったようですね。信松院というお寺に恩方の。そこに1ヶ月くらいいて様子をみながら今度はうちもり公園の心源寺へ行って最後にあそこで58までいたんだわね。それまでいたからね。しかもその間に、ちょっと横道に入るけど、こんな記録があるんですよ。この間81かも知れないです。行って、信長の割腹までその間の歴史がこの秋月しのぶさんはこう書いてあるんです。落ち延びて八王子へ行ったときに、最後に生きていたなら一緒になりたいなと信忠が言ったというんです。松姫はそのことを信じて東海道から急いでいったけれど、途中で織田信長の6月2日の本能寺の変で間に合わ

なかったと書いてあるんです。その話は信松院に行って約1ヶ月くらいいて、しんげんいんへ行ったということにしてください。そこが最後です。58歳で。八王子で言うにはね、信松院へ行って来るのに1ヶ月もかかったというんです。松姫から。そこに1ヶ月ばかりいて、そっちに移ってから何日も心源寺にいないとき本能寺の旅にたっちゃうんですよ。

(中村)

八王子の心源寺にたどり着いた頃、高遠城は落ち、兄のもりしげは自害自刃し、勝頼も北条夫人と玉の露と消え、武田は滅び去った。心源寺のぼくなんとか和尚にかくまわれていた松姫は5月の末に生きているなら松姫を正室に迎えたいという織田信忠のことを聞いた。東海道を急いで、尾張に行った頃本能寺の変がおこり、信ただも信長も明智光秀に討たれたという悲報に接した。

(加藤)

確かに時間的には合うんですよ。しかしあまりにも作りすぎたような感じがしてなんのんです。しかも落ち延びていったんだからね、あそこにいるなんてことが簡単に分かるはずがない。敵に攻められたから怖くて松姫を人目を忍んで峠をこして檜原を通って八王子まで落ち延びたやつを、探偵がいて調べたかどうか知らんけど、あまりにも上手すぎて。昭和60年、10月。系図はかいてあるけど、松姫は全然書いてないよ。これが40年、42、3年でこれ、松姫峠の橋が出来たのが42年で前後してるからね、松姫などは山梨県は全然眼中になかった。

(中村)

高遠にしばらく松姫がいて、織田がどんどん来るといっているので新府城に気来たらもう新府城からももう東に行った方が良くいと恵林寺にちょっと身を寄せていたようですね。そしたら恵林寺が頑張っていたんで危ないというんで向岳寺にちょっとだけ身を寄せて向岳寺から出発して八王子に向かったと、言うのを塩山で聞いたらほぼ間違いはないんです。それがどのルートかはいろいろあるようだよと言われていて。

(加藤)

高遠に頼ろうとしたら駄目だったんだな。天目山へ頼る、最後。

(中村)

それで、大月の方が小山田でしたよね、小山田が織田方にもはやばやと寝返っちゃったから。

(加藤)

門前払いくっちゃった。岩殿に登ろうと思ったんだが。

(中村)

岩殿に行こうというのがあったんだけど、早々に小山田が織田方に寝返ったという話があって、でも向こうには越えられませぬよね、八王子に行くのに。大月の方には。だから流れとしてはこっちなのかなと思っているんですけど。

(加藤)

越えられないということは人為的に、地形じゃなくて。敵がいっぱいいるから越えられなくて逃げた。奥へ、日川を上ったと。

(中村)

日川を登って、石丸へ来て、石丸から牛の寝へきて、

(加藤)

東へ行くには牛の寝しかなかった。

(中村)

奈良倉から長作の言い伝えは奈良倉から十文字峠で、十文字峠から、

(加藤)

守重洋作さんが言った、どうもあそこまで下らないじゃないかというような。

(中村)

そうしたら佐野峠の方に行って、あのルートそのまま。

(加藤)

近い方の説ではそんなふうなこともあると。いくつかあるからね、八王子信松寺までたどり着いた過程がね、大変な、飯を炊くにも煙が出る。明るいうちに炊いて火を変えるとかいろいろあったらしいね。20人ぐらいで越したのかな、女が多かったから大変だということのようでした。それがあって、その話が始まって松姫様が八王子から行列に加わったということです。そんなことじゃ山梨県協力しようと。けっこう松姫様であそこじゃ有名だけど山梨県じゃ取り合わなかったんです。だから全然疎通はなかったんです。そのうちに発表して松姫峠ができた、松姫がでた、しかも知事の命名で松姫峠ができた、作ったという宣伝が効いたから八王子が、松姫様が祭に隊列組んで出てきた、それからです。結構有名だったんだね、あそこでは。松姫最中があったり。一説に山主さんが言うのに、18かな、学者で、塾を開いたり、織物を教えたりしてね。甲斐絹があったからその織物もだけど、その塾を開くほどの秀才だったとか。師弟夫をよくして偉人であったということです。なにせ、先ほどの心源寺、恩方の心源寺という字を書くお坊さんがいて、そのト山和尚がなかなかの和尚さんだったようですね、この心源寺の。それで村長はその心源寺の話を恩方に昭和40年頃に行って、山買いに行ったけれど、松姫の話で泊まり込んで。

(加藤)

その話で夢中になって、山のことなんかそっちのけで。そのうちまる公園の心源寺からそこまで行ったからいいよ後でということで山を見ないで帰ってきちゃった。心源寺は大したお寺ですよ。

(中村)

そうですね。僕も行きました。今週の5日の日に行きました。あそこまで立派なお寺があって、松姫が祀られているわけだから、加藤村長がおっしゃった織物も八王子織りの元になるぐらいのかなり地元の人たちに技術を伝えたという

(加藤)

子供の頃、英才教育を受けたらうから。

(中村)

八王子に千人同人が、いわゆる西の方の警備を固めるのに徳川家康が作ったと。たまたま作った千人同人が、その徳川家康が山梨県に入ってきて、一時期、ここを治めたときに知り合った、金堀衆の流れを汲む山梨の人たちが八王子の千人同人の中心を担ったらしいですね。

(加藤)

かえって、お忍びで隠れていたけれど、家康は、だからその技術を得ようということでもみんな注進したらしいですね。それでみんな集まる原因もそこにあつてね、お前も来い、おれらの技術が認められているぞということであそこに集まって。

(中村)

で、その千人同人が、たまたまいた松姫が武田の娘だということを知って、すごく大事にしたということ。

(加藤)

58で死ぬまで、最後はいい生活をしたじゃないかな。

(中村)

千六百十何年ですよ、亡くなったのが、10年代だから、そういう意味では良い意味の。

(加藤)

そこで坊さんに、信勝？勝頼の息子、いましたね、それが群馬か埼玉へ行って、何のお寺に入ったかちょっと聞いたけど。

(中村)

でもあそこで長男は自害しましたよね。一緒にね。

(加藤)

誰かが連れて行ってそれがお寺に行ったという話が。落ち延びてというか、隠して行ったのかもしてませんが、ちょっぴりぼうさんがそういう話をしました。

(中村)

今日も松姫に登って、田辺国夫の碑がありますよね。裏を見たら昭和44年にあの碑が建っていたんですが貫通したのはいつだったんですか。

(加藤)

42年とかいいましたね。私が役場に入ったときで、

(略)

(中村)

県が松姫峠と命名したのは、小菅が今おっしゃたようなことを文章にして、名前としてはそれがよかろうと、あげたわけですか。

(加藤)

知事の命名というわけですよ。

(中村)

それでも山梨県が調べたわけじゃないんですよね。

(加藤)

なんだかそれをもってこいと言われて、本当にそれがあるのかどうか事実を持ってきてくれと県庁から連絡があって、私が作文してかようですとって持って行ったのを、ああそうか、じゃこれにしようと言うことになって。

(中村)

そうですか。じゃ昭和40年に山を買いにたまたま恩方の方に行った、40年頃に行ったというのが。

(加藤)

1年先に行って調べて、松姫というのはいたんだなと思ったですよ。考えて開通して名前どうしようかというから、私が見つけたんです、松姫峠。原因、理由、かいてこいと。武田が息女松姫と書き出してね。知事が命名してよろしいかというから結構ですと。

(中村)

恩方の心源寺というところを頼って松姫が行ったというのが、あれですね。なんかたまたま心源寺のト山というお坊さんがその系列になにか有名な人が、その人かも知れないし、あそこの向岳宇で修行したお坊さんがここにいたんだそうです、心源寺に。それで向岳寺のお坊さんが松姫にあなたは恩方の心源寺に何かあったら行きなさい、この書状を持っていけば厚く遇してくれることと思うと言って、

行ったということなんですが、たまたまおんがたに行ったというのが。

(加藤)

あそこになぎなたの焼けたのがあった。

(中村)

なぎなたがおいてあるとよく言いますよね。それを見てきましたか。

(加藤)

見てきました。焼けたからあまりきれいじゃなかったけど、ありました。

(中村)

今もこの心源寺というのはありますか。

(加藤)

その後2回行ったね。五十何年かには一回行って、そのご十何年かに行ったときにありました。もうそれから30年。

(中村)

その時の話というのは、恩方に心源寺というお寺があって、その心源寺に松姫が来たわけですよ。甲府から心源寺に来たわけですよ。それでどういう話をそこで聞いたわけ



ですか。

(加藤)

山梨から、甲斐の国から来た松姫さんのお寺だよという話になって。じゃ一遍、長刀もあるという話から始まって、主従十何人かで来たんだよという話が。

(中村)

その時のルートについてはなにか話があったんですか。

(加藤)

八王子を下って来るには、陣馬山だな、あそこは。それを来たということ。陣馬山を辿るといって、山梨のあれに繋がっちゃうということ。

(中村)

その後に西原の歴史もあると村長、おっしゃったけれど、西原のことはどういうふうに聞いておられましたか。

(加藤)

西原のことは守重さんの記録。五日市に行ったときに、松姫さんが通ったとこだよという話はあったから。五日市、檜原の北の沢、西の沢かな。二つあるね。小河内よりの沢。あの辺の陣馬山を通過して降りたということ。

(中村)

だとすると、ここを通る可能性が多いですね。大菩薩を通る可能性が強いね。

(加藤)

いやあ、天目山からじゃここを通らなきゃ通れないですよ。しかもあんまり人がいるところは避けて通ったからね。

(中村)

まだ武田狩りを相当してたようですね。

(加藤)

武田狩りで丁度、甲府盆地に行くか行かないかでしょ。天竜から織田信忠の軍勢が来たでしょ、終わってから徳川ですね。とにかく挟み撃ちにされるから、逃げるにはあれへ逃げる以外にはなかったですね。西かわを登って。八王子へ行くための出発だったからね。最短距離は八王子へ繋がるには陣馬山へ行く以外にはないと。ですから松姫が通ったところはもちろん推測ですよ。だけど一番いい道をたどるのが常だからね。これ以外にはないと。しかも敵を忍んで通るにはこれだとことで結論づけたんです。そうさそうさということ。

(中村)

小山田が徳川に寝返ったのはいつかということもちょっと調べたらいいですね。そうすると、いわゆる勝沼・大和からは大月には抜けられない。

(中村)

そうですか。

(加藤)

しのぶさんの書き始めがそうかな。門前払いをくって山へ登れなかったと。

(中村)

むしろ信松院よりも、たどり着いた、最初にたどり着いた心源寺というこの恩方のお寺ですね。ここがスタートですね。

(加藤)

そこに長刀を見ながらいってあげればいい。

(中村)

長作の守重洋作さんにちょっと話を聞いてみたら、あそこの守重一族は江戸時代の前は根津一族という名前を名乗っていたと。それは根津一族は万力公園に根津さんの銅像がたっていますよね、根津財閥のね。あの一族となんか関係があるんでしょうかね。

(加藤)

どうかね、それは知らないですね。根津と言ったね。

(中村)

江戸時代にまた守重に変わったというんだけど、今度は古観音の発掘で山梨県の埋蔵文化センターの石神先生が発掘してくれたらなんと礎石が6つも出てきて、平安時代の土器まで出ちゃったんですよ。そうすると平安時代にあそこに建物があつたと。ま、今の建物と一緒にどうかは、なんか寸法が違うんだそうです。だけど間違い無しに古観音はあつたと、言い伝えだけではなかったというのが判明したんですよ。だからあそこの言い伝えというのは6代天皇孝安天皇の皇女というんだけど、ちょっと遠過ぎちゃってね、あれは2000年ぐらい前の話になっちゃうんで。大同2年だから807年ですかね、だから遡っても1300年、平安時代の土器で言えば今から1000年前ですけど、いずれにしても古観音はあつたと。神楽を奉納したから神楽入りという名が付いた。そうすると、皇女は別として非常に尊い人が亡くなった可能性はあるんじゃないかなと。

(加藤)

あるでしょうな。それと繋げたいのは、今川の頂上のあれも何だかわからないけど、尊い方の塚も、あるいは繋がるかもしれんと言う気がしてならんけど。

(中村)

今川のなんですか。

(加藤)

今川の古い峠の頂上に塚があるんですよ。

(中村)

あそこですか。例の大丹波峠ですか。

(加藤)

天皇の墓じゃないことはいった。距離的にも、繋がるのかな。なにかあるかなと推測してるんだけど。

(中村)

あそこね、あれは発掘してないんですよ。

(加藤)

じきによればあれも発掘する価値があるかな。あれも尊いものが近くで見ない方がいいのかなと。

(中村)

あの塚ですね。

(加藤)

もう一つ、長作の古観音ですが、あんな高いところに何があったかという、当時は往還だったかも知れないと同時にあのへんは地形がいいから、住んでいて百姓が出来たんです。ソバをつくってもけっこう実るくらい。肥沃な土地だから、あそこ生活していたんでしょ、一つの文化があったんだね。

(中村)

テラスの跡があるといっていますね。その鰐口に大旦那、守重と書いてあるのがあるというんです。だから大旦那の守重一族がいて、観音様が出来たと。それが大旦那が鎌倉の後期ですから1200から1300年頃なんですけど、その頃に栄えていたということは今で言えばどんな経済で栄えていたのか、というのは今おっしゃっていた日当たりが良くて、雑穀類がよく育ったそうですよ。焼き畑も出来て、大豆からソバから雑穀から非常に日当たりが良くて育ったと。

(加藤)

あの奥まで行って生活しなきゃならない理由は一体何だったのかという。そこいらはね、元は落ち延びた生活だったのか、信仰だけのお寺だったのか、とにかくあそこにいようという生活の根拠は食料です。食料は確保できる、それはいいとして、当時も山の中、今も山の中、あんなところに生活する理由、根拠は何だったろうか、それを知りたいです。しかも尊いお方だと。守重さんも7人か、9人お付きの方がいて、その方達が責任を取ってお鷹神社で全員自害したと。だから総覚の森とずっと自分たちは呼んできたというんですね。だとすると、その人達の自害した何か印になるようなものが出てくると、裏付けのものが出てくると、これはそれこそ大丹波の尊い人の古墳がどう重なるかは別として、雉は食わない、

(加藤)

あそこにはかたはのよしってあるでしょ、地形を見ると確かになるほどと思う。風が春になると靡くんですよ。だからちょうどよしが生えて柔らかい時の風が靡いちゃうんだよ。それが神のお告げだとかうおっしゃる、なるほどという。

(中村)

今、あそこが安産の神様で、お守りに出している、ちっちゃいお守りの札が、昔の修験道のお祈りの、そういうものが込められたそういうものらしいですよ。

(加藤)

それへよしの葉を一枝つけて売り出してるんだからね。

(中村)

だからそのお札が昔の自然信仰に絡むようなわけがありそうなお札だと言うことに石神先生も注目していて、僕も長作というのはあの中で代々受け継がれているから、受け継がれている中身があるいは本当ではないかなと。

(加藤)

裏付けがあるような気がするね。生涯かけて語り部的に繋ぐということはね、一言も間違ふなよ、おじいさんの言うことはこうだったよ。おばあさんこうだったよ、おとうさんこうだったよ、お前もそうだろう聞いて間違いありませんということをや々々言い伝えてくれば長年かかっても真実がある程度伝えられるはずですよ。

(中村)

だから古観音に昔あったというところを掘ってみたらあったわけでしょう。それもしかかも平安時代の土器が出たということでね、少なくとも1000年間言い伝えられてきた。だからあの意味がすごくわくわくしちゃって。地元の方はそりゃ当たり前だと、当たり前なのが当たり前に出たんだとこうおっしゃるんです。1000年前のことだからね。

(加藤)

その通りだから。間違いなく伝えたという、伝道師達がえらいものだ。

(中村)

観音様は鎌倉時代の、材木はさわらで少なくとも700年、800年前ですからね。国が認めた重要文化財。その前に1000年前の平安時代の土器まで出ちゃった。あのお鷹神社は小菅では一番いい神社じゃないですか。神社森、あれがまた謎なんですよね。その守重さんは総覚の森とおっしゃっていますから。どっか西原に一宮神社があって、あそこに神主さんがいるそうなんですけど5、6年前にお父さんが亡くなったそうなんです。あのひとはいろいろ詳しくあったそうで。どっかでお鷹神社について。

(加藤)

お鷹神社という名前は他にはこの近郷にないから。鷲神社はあります。

(中村)

鷹取一族は西原にいっぱいいるじゃないですか。これからさらにいろいろ調査をしていきたいと思います。今日は本当に有難うございました。

## 聞き取り調査・源流資源調査

暮らしの道・古の道

加藤亀吉さん

中村

調べていたらこんな、土室谷を調べた文書が出てきまして、昔の小菅の台帳と付き合わせて見ていけば、誰がどこへやったか出てきますよね。それと甲斐国史の中に土室と小金沢の御巢鷹山が幼鳥というんですか、育てるのが12カ所あって、そのうちの8カ所が小菅で、残りの4カ所が西原村だったそうです。地域をずっと見ていくと、土室と小金沢の役4分の3ぐらいが小菅の人たちが江戸の昔から政府の命を受けてどんどん入っていたと。

加藤前村長

議員も小菅から4人、西原から4人、七保も4人で構成しているんです。土室と小金沢の両方でね。向こうの七保の部分が小金沢だったんです。土室は小菅と西原。半分の権利も七保が半分、大月が半分ね。そのうちの3分の2が八人小菅は議員が出る、こっちは三人。西原四人。半分が西原で倍が小菅という按分にもなって、分けたんです。

中村

じゃ、土室は小菅は8、西原は4。そんな按分だったんですか。

加藤

率はね。土室は二つに小分けにしたから、七保が先ず半分とる、残りを西原と小菅で分けて、小菅が半分。四人の八人の議員の率で分けたんです。

中村

御巢鷹山の話はいつごろお聞きになりましたか。御巢鷹山で江戸時代から土室や小金沢のあたりに小金沢があったと。小菅からもしきりにそっちに入っていたという話は。

加藤

それは、恩賜林保護組合の組合員になった頃からの、昭和32年頃からずっとやってきたからね。最初から最後まで尾巢鷹山の議員をやったから。なにかこの頃議員の会合があるたびに西原と小菅は同じにしなきゃという話があるというが、それはみんなで話し合うのは結構だが、元の成り行きはこうだよという話をしておいた。それを踏まえて皆さんが、やることには我々がいろいろ言う筋じゃないから。だけどもとはこうだよと。

中村

そういう恩賜林の議員の話の時に、むかしから小金沢、土室のあたりには御巢鷹山があったという話は。

加藤

みんなとすでにそういう歴史の上に議員制度もありますよということだったからね。

中村

西原と、甲斐国史によると、御巢鷹の12のうちの8が小菅、4が西原というその関係が期せずして議員の数と一緒にいるというのが歴史的に面白い関係にあるなと思ったんですが。

ある人に言わせると、小金沢と土室をいれて、御巢鷹山がひろがっていた。七保は昔の瀬戸は関わり合いがずっとあるわけですけども、御巢鷹の役については小菅が非常に先行してて、小金沢と土室の全体の四分の3ぐらいを小菅が。

加藤

御巢鷹をやっていたかも知れませんね。その後の、交付金の率がそうであって。御巢鷹の関係はそうかも知れませんよ。小菅は熱心に行ったようだったからね。近さも一番近かったから。

中村

瀬戸から小金沢に入るのは結構距離があるんですか。

加藤

ありますね。

中村

昔は非常に険しかったらうから、

加藤

みんな歩いて大変だった。この間、いわのや、いたのやとかいう小屋があって、小金沢の方に。

中村

ここでは、えいべい小屋というのが書いてあるんです。青柳一雄さんはこうしゅう小屋みちないい方をしてました。

加藤

そこに天然の岩の形をした、そこへ屋根をちょっとつけて、猟師がとまったものです。わたしも一回泊まったことがあります。岩小屋。そこで夕飯を食べて一人で帰ってきたことがある。4時間ぐらいで帰ってきた。2回行ったかな、この狩猟には。外国でもいった感じで狩猟しましたよ。シカを捕ってそれを肴に夕飯に煮て食べて、帰ってきた。

中村

多分昔は原生林だったからすごかったでしょうね。

加藤

4時間も5時間も山の中を歩いてくるんだから。その中に、シカが見える、テンが見える、イノシシも見える。ケモノと一緒にあったからね。一面寂しいな、怖いなと言う感じがした。異様なものです。二十歳代かな。

中村

そうすると、小菅から行く場合には棚倉に上がりますね。棚倉からすぐに土室に下りたんですか、それともカヤの尾の。

加藤

カヤの尾まで行って下りて、上に上って、下ったとこ。

中村

こめでえまで上ったんですか。こめでえの手前で、下におりた。カヤの尾のあたりから。これがカヤの尾なんです。ここの本郷尾根をおりて、ながみねを越えてこっちにという意味ですね。狩場より奥だった。本郷尾根は結構有名な尾根だったようですね。青柳課長も本郷、本郷とおっしゃってました。はたちのころに岩小屋に泊まれたんですね。いまでも岩小屋なるものは天然のものだから、残っている可能性がありますね。

加藤

あるはず。壊れない限り。それに簡単な壁を作って、天然のシオジカナラを伐って、割ってそれを壁にして、それだけでもいい気分ですよ。昔はそれが猟師が専門で生活のために行ったんだからね。われわれが行くときは観光、遊び半分だけど、生活のためにだから、必ず捕って来なきゃならん。捕って来なきゃ米が買えないわけですよ。だから命がけみたいで大変だったんですね。捕らないときはお互いに文句をいいながら、外すとお前が下手だからといって、生活がかかってましたからね。大変だったようです。大概2～3名で行

きました。7、8人でいくと分け前が少ないからね、最低限のね。60年前です。

中村

そのことを考えると、私なんか江戸時代からおすたかは江戸時代の話ですから、江戸時代から小菅は大菩薩を起点にして、牛ノ寝を通過して、土室と小金沢のほうにおすたかの関係で同時に猟師たちは猟場をもとめてそっちにはしょっちゅう行っていた。という構図が見えてきて、そこは生活の場だったんですか。

加藤

行けば必ず獲物がとれるほど、多かったんでしょう。すごい森だったねえ。いまのように伐採してなかったから、大きな木ばかりだったから。帰るときにはテンも番取り（むさび）がいるんですよ。それが夜中に舞うのをみながら、帰ってきた。

中村

何か深い森の風景が目には浮かぶようですね。それを入られてから、どれくらいしてから土室の伐採が始まったんですか。

加藤

入り口のほうはその頃からやっていたね。板小屋の辺は10年も経ってからじゃないかな。

中村

昭和20年の話はまだすごかったけど、30年頃になるとだいぶ奥まで。

加藤

30年40年で切り尽くしているんじゃないでしょうか。

中村

尾根のほんの一部がまだ残ってますけど、

加藤

シオジの生えてるところがまだ少し残ってる。だからあそこで財を成した人がいるだよな。まだ値もよかったころ。

中村

今、どこか一ヶ所でも古木が残っていたらすごかったでしょうね。たまたま小菅側は明治



34年に東京都になったから残されましたけど。

加藤

このオオカミ沢なんか、すごい悪場というか、傾斜のきついところで、人の通行が不可能だったくらい大変だった。いまはちょうど道が入っているけど。

中村

大正時代に、ものすごく熱心に調べた先生がもう一人いるんです。これは昭和34年に書かれています。そのもとになっている先生は大正時代に調べて、山を愛する人たちの先駆者たちが最初に入って来て、徹底的に調べたんです。その当時は恩賜林の森林部の相当詳しいのは大正にはあったと思うんです。水源林も詳しいのを持っていますね。それをベースに、あと小菅の人とかいろいろな人から聞き取りをしたとなってますから。これをしっかり確認して、ワサビ田の台帳でも確認して、小菅のひとたちがこういう形で大自然と関わって、土室とも関わって暮らしを支えてきたんだということも歴史の一コマで残しておかないともう消えちゃう。

加藤

管理する議員制度の割り振りもあった。

中村

それはなんかまだ資料がありますか。

加藤

あるはずですよ。役場にはないかな、七保の役場、今は大月に移ってるかな。あそこを中心にやったから。必ず組合長は大月から出ると決まっていた。今もあるんで。小金沢、恩賜林保護組合議員の組織と議員制度も執行部もあるんです。いまも小菅からも出ています。選ぶのは議会で推薦します。小菅にもあるはずですよ。

中村

今日は有難うございました。

## 聞き取り調査

源流古道と古観音（長作）の発掘調査

石神先生

（石神）

中世の道はほとんど尾根沿いらしいんですね。そう考えると、明治ぐらいまでは鶴峠、今、道が出来るまではあれを幹線道路として使ったということではほぼ間違いないんじゃないかなと。そういうわけでこれから遺跡、道沿いにあるということであれば整合性がつく話なので。やはり幹線道路としては三頭山を超えていく道路がいいんじゃないかと思いません。

（中村）

東京の方から来ると、地図上で見ると丹波山回りよりも近いんですよ。

（石神）

そうですね、最短ですね。

（中村）

そう、最短になっちゃうんですよ。確かに多少険しいのは険しいんですけど、昔の人は歩くのが仕事ですから。

（石神）

洋作さんなんか大月に行くのも最短の距離でずっと尾根沿いに行ったと言ってますよね。6時間ぐらいで大月まで行ったと言うんですよ。それを考えると、今の私達からするとえーと思いますけど、割と日常的なことなのかなと。で、最短距離をやはり行くのかなと。富士山の修験なんかの関係の調査もしてるんですけど、やはり尾根沿いに行ってるんですよ。今の道と全然違って、中世の人たちの道は尾根筋だという説明が今は通説となりつつあります。だからそう考えると、三頭山の道、いろんな方向に、西原の方へ抜ける道もあったりしてやはり交通の要衝ということで、一つ山を越えれば武蔵に抜けるということで、すごく重要な地域だったと考えるのが筋なのかなと。またああいう所だからこそこういう貴重な建物が残ったというふうに考えるべきなのかなと思っていて、やはり街の中で戦禍にあたりとか。

（中村）

そうすると、この鰐口の大旦那の守重というのが残っているということは観音様、いわゆるお堂がないと観音様は置きませんよね。

（石神）

そうです。如意輪観音があるから観音堂なんですよ。

（中村）

この先生の報告書の中に、厨子も鎌倉で、しかも矢花が見られて、それは化粧なし、で

すか。化粧からいけば奈良や京都の宮大工の技術がこういうふうに言ってますから、そう  
なるとあの建物自身はそこに誘致した一族というふうに考えてもいいんでしょうか。

(石神)

それでほぼいいんだと思います。大旦那、あの人達の財力でこれが建っているというふう  
に考えてるんですけど。

(中村)

そうすると、もう一つはそれだけの財力というかパトロンで引くわけでしょ。そうすると  
と暮らしで何があったのかというのが非常に。

(石神)

どういう社会であったのかということですよね。

(中村)

どういう社会で、どういう賄いがあるって、ま、天皇の皇女どうのこうのはちょっとよく  
分からないとしても、呼ばなきゃいけないわけでしょ、技術者をね。

(石神)

財力だったりする根拠は何かということですよね。

(中村)

それで、鎌倉の建長寺派ですよ。そうすると、建長寺派だから建長寺関係が支援する  
ということではないんですね。必ず地元ですよ。

(石神)

お寺の組織はやはり大旦那あってのことだと思うので。私達が思うもう一つの課題とし  
ては、今は建長寺派ということなんですが、多分その前からこういうものがあつたそう  
なんですが、平安時代から多分こういうものの前身なりそういうものがあつたと考えていて、  
そう考えると、やはり鎌倉が新仏教、建長寺派、臨済宗なんですけど、その前の段階が、

(中村)

自然信仰を含めた

(石神)

そうすると、真言宗とか、そういう可能性がちょっとあるんじゃないかなと。滝があつ  
たりしますね、神楽信仰があつたりするので、どちらかというとな修験的な要素が非常にあ  
るんじゃないかなと。

(中村)

私も何故「音無し、音無し」というのか非常に不思議に思っていました。音は聞こえる  
じゃないですか、上から見れば。ただ、古観音に立つと音が聞こえないわけですよ、あの  
地形上。だから古観音を起点にあの名前は付いたんだと私は思ったのですが。

(石神)

信仰関係の名前なんだなと私も。その他にあそこは神楽入り沢とかいう沢の名前がつい  
ていますように、神楽入りってどう考えても多分神楽信仰から来ている。そういうものと

結びついて、あとお札ですね。守重さんのお宅で今売ってるんですけど、安産のお札、あれもすごく真言的ですね。私もまだ解析してないんですけど。私も妊婦の人にあげられな  
いと自分で持って居るんですけど。端々に見えるところがすごく修験に近い、修験なんだ  
と私も言い切れないんですが、その前身の隠れでもあるんじゃないかと。前身がないとあ  
れが大旦那がいたからと建つことはないと思うんです。やはり前身がないとちょっと考え  
づらいんじゃないかと思うんです。

(中村)

今度の発掘調査でこれが出ましたよね。つまり平安時代の土器が出たということは、も  
う既に平安時代にあそこになんらかの建物があつたと。

(石神)

平安時代に伴う建物を確認していないので何とも言えないんですが、人がいたのは確実  
です。

(中村)

人がいたことはね。先生、これがありますよね。これがあつたということは、建物の跡  
だということは言えますよね。

(石神)

確実です。ただこれが、これをちょっと見て下さい。地層が整ってないんですよ。これ  
の下層からこれが出てきているので。火をすごく炊いた跡なんですよ。当時、もう平安  
時代になるとカマドなんですね、住居形態としては。

(中村)

平安時代はもうヘツツイは出てるんですか。

(石神)

そうです、そうです。カマドはあるんですが、今回確認したのはカマドではないんです  
ね。なんか火を燃やした跡、そうするとそこに家があつたのではなくて、なんか火をこう。  
本当は礎石を取り去ってその下の調査とかすればよかつたんですが今現状であるものを壊  
したくなかつたんで調査してないんです。この下にピットがある可能性がある。平安時代  
の柱の穴ですね。何回も建て直したりしてるんです、同じ規模で。なのでその可能性もあ  
るのかなと思っていたり。するべきだったか、するべきじゃなかつたとすごい悩むところ  
なのですが。一番下の層に黄色い層がありましてそこから20センチくらい赤茶色っぽい  
層があるんです。その上に柱の跡、柱の礎石の跡が。その上に真っ黒な黒色土層があつて  
そこからこれが出ていますね。つまり真っ黒なところは江戸時代の層、寛永通宝が出  
ている江戸時代の金が出ている真っ黒な層、その下の取り去ったら茶色い層が出て、この  
礎石が。そして遺物はない。そして今度その茶色い層を取り除くとこれが出てくる、そう  
するとそこは平安時代。そうするとその間の層の礎石は中世としか考えられないですね。  
それで中世というふうに決めているんですけど。そんなことなので、平安時代にとにかく  
遡って建物史の確認をしたいんですが、人がいたことは確実です。ただ建物それは言い

過ぎなんです。可能性はとても高いんじゃないかなと。そうするとやはりいろんな平安時代の伝承もあったり、こういうこともあったりするので、なんというんでしょう、周りの遺跡とかを丹念に確認して行って、どこまで小菅村自体が遡れるのか。縄文時代とかもあるんで人がいたことは確実に思うんですが、どういう社会構造なのかっていうことを確認したいなと。

(中村)

あの辺りで、多摩川の側から遡ったあの辺りで重要文化財はあそこだけなんです。丹波山にも一ノ瀬にももちろんない。一ノ瀬高橋は例の鶏冠神社の関係もあるからもうちょっと立ち入ったものが出てくるのかどうか明らかになるんでしょうが、非常に都の何か、三輪先生が言う宮大工衆まで呼べるような経済的背景があったというのが非常に疑問といたらおかしいけれど。

(石神)

どういう経済基盤なのかちょっと分からないですからね。ああいう場所だから田舎だっという先入観があって。中世はちょっと違うようなんですね。私達もこの事業を始めてから中世っていう時代がどういうものなのかすごいっていうことを追求しているところでもあるんですが、やはり江戸時代よりも古い、平安時代の先っていうことで想像するんですね。平安時代は遺跡がいっぱいあって堅穴の住居の家で、都には貴族がいて、でも庶民はまだ堅穴住居に住んでいるというところまでは進歩してるんだよなと思ったり、江戸時代のお城とか有る前の時代、全部組織とか精神構造が違うようで中世の方々、一種独特の時代なんだけどそれがどういう社会なのか私どもにはまだ見えていない、研究が遅れているんだと思います。研究は非常に遅れています。この10年ですね。中世の考古学の研究は。私達が若いとき、学生の時、20年ぐらい前なんですけどその時は発掘は平安時代まで。そして江戸時代とか、焼き物が出てくる時代ですね。最近の茶碗かなんて感じて放ってたんですよ。そして平安時代の土器を相手にするのが仕事だったんですけど、そこからそうじゃないんじゃないか、中世のことを調べないと絶対わからないっていうことになって、ということでどんどん脚光が当たってきて。実名が分かっていますよね、中世って。良いことも悪いことも。そういうところでそれに繋がる資料を、今まで鎌倉とかはちゃんと調査してたんですけど、丁度バブルのときにさしかかるんです。山梨県でもリニアモーターカーとか中部横断自動車道とか非常に大量に人が必要になって私もそこで採用されているんですが、今までは例えば、中部横断自動車道甲西バイパスとか、あっちの方は御勅使川なんて遺跡なんかはないんだと言われていたところなんですけど、大きく広く深く調査したら本当にいろいろな成果がありまして、古墳時代とかそういうところの成果もすごいあったんですけども、大井ですよ、大井夫人の実家ということでそういう関係の調査の資料がものすごい出たんですよ。博物館の方にも展示しているんですけども。すごく外部との交流が盛んだったということが分かって、その後、ここにもあった、あそこにもあった、ここにもあったという感じで発掘調査が進んで、この10年でものすごい資料がふえたんで

すけどもそれがまだ精査されてない。調査、研究する人はほとんどいないです。いても元々人数が少ないっていうことがあるんですけども、山梨県の研究者自体が。例えばこういう土器もすぐ平安って分かるその背景にはその20年刻みでもう片鱗が出来上がってくるんですよ。次はこういう形態変遷をする、その次はこう、その次はこう。20年おきぐらいに形態が変遷されていて、その土器の口の縁の部分だったりとか、変化しやすいその部分だったりハケの部分だったり、そういうところを見れば変化が多い分、20年おきに資料が多いから、密に出来ているから分かるんです。中世の特権みたいな役割を果たしているんですけども中世にはそれがまだないんですよ。縄文から平安まではバッチリ分かるんです。私、もともと古墳時代の研究が専門なんですけど、古墳時代も20年おきぐらいに分かります、私。見れば大体530年とか大体それぐらいのスパンで分かりますけど。中世はほとんど頭の中で、平安じゃない、縄文じゃない、古墳じゃない、近世でもない、じゃ中世みたいな感じで、それぐらいの知識しか、というかそれに近いような感じ。

(中村)

中世というと、鎌倉、室町、戦国ですか。1100年から1600年前ぐらい、江戸前まで、16世紀400年の空白。

(石神)

そうですね。研究も進んできているんですけどもまだほんの一部に過ぎなくて、こういう平安とか縄文の研究に比べれば全然無いに等しいくらいで、無いに等しいというと非常に中世の方に失礼なんですけど、進んでない状況です。まあ、随分整備されてきましたから。種類も多いんですね。土器だけじゃなくて、焼き物もあつたりとか。いろんな焼き物の地域間交流も盛んで、そういうところの産地だったりとか、流入経路とかそういうところも整理していかなきゃいけないというのもあるんですよ。だからよけい仕事が煩雑になっている、ということもあります。だから私どもも今回中世寺院の調査で随分資料を得たのでまたここでそういうこしひょうを作る助けになれるかなと思っているんですけども。そんな背景があるのでよけい分かりづらくしている、もともとそういう中世の独特の世界なんです。

(中村)

衣食住ですよ、人間の生きる基本の。そうすると先生がおっしゃった住というところからいくと平安時代の庶民というのは基本的に竪穴住居。それが今みたいな形に変わるの。

(石神)

その後に、中世でなくて、鎌倉時代になると、掘っ立て柱といって、柱を建てて床を引いて暮らすようになっていくんです。掘り込みはしない。竪穴住居は掘りこんでいますよね。そこに屋根をかけて。平地になって柱を立てて床を引いて。それで囲炉裏になります。庶民の暮らしも。囲炉裏になるとカマドとは違ってまた食事形態が少し変わって来たりします。例えばその変化としては鎌倉時代になれば、平安時代には煮ることしかできない、けど平安時代から鎌倉時代になると、煎るという料理の方法が出てきたり、すり鉢とか

いって摺るといことができるようになってくるとか、それまでは煮るだけだったのがいろんなバリエーションが広がる、料理方法が広がったり、食べられるものが増えたりとか、そういうふうな食生活に変化があったり、社会も武士の時代はすごく変化していくのでまた貴族とは違いますよね。また仏教も庶民も信じられる、触れられるようになってたりとか。知識とかも増えていくんでしょうね、寺院が庶民に開放されることによって僧とかそういう人が多くなったり。例えば今、私達檀家制度ですよ。どこか属するお寺があって、おばあさんとか身内のものが亡くなったら自分の属するお寺に行ってお線香とかあげてもらおう、お葬式をあげてもらおう。ところが中世は檀家制度じゃないので、檀家制度が出てくるのは江戸時代からですからそうすると、お葬式の仕方といっても全然違うわけですよ、中世の人たちは。信仰の感覚が違う。

(中村)

そうすると中世の時の葬儀の形態というのはどんな形が考えられるんですか。

(石神)

お寺の跡なんか掘ると、お寺の裏というか、幾つしかないんですけども、どうも火葬した場所があるんですよ。広場みたいな所で火葬したところがあって。そういうふうな回りに点々とお香があって、炭を敷いて、除湿だと思んですがそこに火葬したものを納めていく。その焼き場の所に近い人ほど身分が高い。広場の真ん中で火葬している場所の近くに点々と穴を掘って埋めていくんですけども、どんどん外に広がっていくわけで、外に行くほど身分が低いと。というのあれば、私が掘った15世紀の、塩山バイパスですね。そこで中世のお墓が4基ぐらい出て、骨がそのまま埋まっていたんですけどそれが本当に点々と集落の中に点在してるんですね。それはどういうことなんだろうと調べていくと、流しの聖がいて、修行のためにいっぱいいるその流しの聖を呼んできて、そこで死んだ人を吊ってもらおう、そうするとそこで成仏するので、その時のその人の、その聖の宗派で葬式をするという例もあるようなんですね。そこを一つとっても複雑、庶民と役のある人とか位の高い人では多分違うと思いますし、そういう背景でもまた違う。なので非常に複雑。お寺が必ず死を迎え、今はお寺は死を処理するところとかそういう役割を担っている部分が大きいですけれど、そればかりではない、当時の寺院は。むしろ学問をするところだったり、知識を高める場所だったり、権力の砦的な、城の代わりだったりするような、いろんな性格を持っているというところなんだと思うんですね。非常に重要な中心であるのがお寺であると思うので。そう考えると中世の性格はすごく複雑です。

(中村)

そうすると奈良・平安までの荘園制度がありますよね。地主がいて荘園があって、荘園で働く人達もほとんど強制的に生産物は荘園の武士のものになっていくのが、中世になると封建社会になる場合は多少変わっていきますよね。

(石神)

そうですね、随分変わるようですが、私もその辺は調べてないので、浅学で申し訳ない

所なんです、そういう社会がすべて変わるんですよ。制度も変わるし、料理方法一つとっても変わるし、住居形態も変わる。そしてお寺の信仰も変わると。大きく変わる、社会が変革する大きな画期の一つなんだと思うんですけど、その中に、中世の中でも鎌倉から室町に移ると画期が小さく現れるんだと思うんですけども、そういう背景を考えながら多分していかなくちゃいけない問題じゃないかなと思うんですけども。なにしろその前にする仕事として平安がどうやって分布するのかとか、どういう流通経路をとるのかとか、大旦那がどういう組織になっているのかとか、もう少し、先ず、足下のところから理解しなくちゃいけないのかなとか考えているところです。ただ、ほうそう寺、かつての和尚という人がもともとは、この和尚は恵林寺にも出入りしていたような方らしいんですね。かなりの高僧ということで。そこを私達まだ、全然見ていないので月1日にはそっちにお邪魔したりとか、お墓なんかもそこにあると聞いているんですけど、そうするとそれは中世の石塔があるということになると思うのでそれをちょっと確認して、石塔の形とかからちょっと探してみたいなと思っているんですけど。

(中村)

この鰐口が有る場所は観音堂にある？

(石神)

観音堂にあるんですね。このかけらから調べるんですけど、そうするといろいろ片鱗があるんですよ。高度の延焼だったりとか、建物も鎌倉時代、如意輪観音像だったり厨子だったり鰐口だったりして。そのバックボーンがすごく露出しているんですよ。それを再確認したような調査だったのかなと思うんですけど。一つ一つムダじゃないというか、少しずつそれを解く鍵になっているというか。

(中村)

ずっと昔から言い伝えで古観音がこっちに移ってきたということを地元では七不思議といっている。伝承のこと。神楽入り

(石神)

私達、中世寺院のチームなので地名をものすごいやっていますけど中世寺院として掘るところは必ず、例えば忍野村なんか今年調査しているんですけど、そこのお寺の前阿弥陀とかそういう地名があるんですよ。その前というのが全然前じゃないところについていて、どこから見て前なのかとか、何かしらのヒントがあるんでしょうね。ものすごい気になったんですよ。りんしょだとここまで本当に正確に伝わっている甲斐国史にも載っていないようなことまで載ってるということですよびっくりしました。びっくりしたということを地元の方に話したら、そんなの当たり前じゃないか、当たり前のように口伝されているんだからあって然るべきなんだと。ずっと守られてきたことなんだなと思って。

(中村)

皇女のことは本に出てない。年代があわない。扱いづらい。これが出てきちゃった。



(石神)

遺物が出るというのは、これはたまたまあるというだけかも知れないけど、遺物が出たのでこれはもう間違いがなかったんだとおもっています。もっとつぶさにやれば、すごく土が堅かったとか、ブロックでピリピリと離れるような土だったんで遺物を見落としていくかもあるかも知れないんですよね。皆さん初めてでしたし。もう少し時間もあって精緻に調査してればもうあと2、3ちょうぐらい遺物が多かったのかなという気がしないでもない。

これは本当に最後の最後の方に出たんで。そだち石の周りの方が出たんじゃないかなと思っていて、多分あそこにご信仰で創建された時にすごい出ていて、それを多分掘っていけば、いつからその信仰が始まってるかというところに遡れたんじゃないかなと思っていくんですよ。だからそだち石の周りを見たかったなと。その下のテラス。テラスがあるのは中世寺院の特色の一つなんです。なんか建物とかがあるわけじゃないんですけど、平坦地が階段状に連続する、という特徴があります。

(中村)

どういう精神構造で。

(石神)

わからないですけど、建物を建てたわけじゃないんですよ、その平坦地に。けどその平坦地が段々畑のようにあるんです。どうしてか分からないんです。でも全国的に見られる類例なんです。それを見ると、昔田んぼを作ったんだとかいうんですけど、段々畑みたいなのがもともとあって、段々だからいいやと思って作ったんだと思うんですよ。

後世に。そういうのを併せて考えると、もう少し調査したかったなと思っているんですけど。その特徴は十二分兼ね備えていることは確かなんです。滝があったりとか。

(中村)

今度の調査は中世寺院の遺跡の確認というのが大きな課題。

(石神)

確認されたモノとして、土器が出た、銭が出た、建物の礎石が出た。礎石は結構、周りだけ礎石だったりするんです。中は柱だとか、穴だったりするんです。全部礎石だった礎石の全てが全部礎石だったということで、礎石、総合礎石という意味で礎石と呼んでいるんですが、これ以上ない成果だったと思います。

土器については平安時代、銭については江戸時代始めですね。これについては、中世という言い方でいいと思うんですけど、例えば鎌倉時代とか室町時代というのは遺物がないので確認ができてない状況です。鎌倉時代から室町時代という言い方をさせていただければいいかなと。

(中村)

今確認されたのは、土器と銭と礎石。だいたい時代的な特徴が確定された。そうするともう一つの疑問として礎石が鎌倉時代だとすると、観音堂本体が鎌倉中期と言われていま

すよね。移ってきたというけれど。

(石神)

どういうふうに変更してるのか私も建物の専門家ではないので分かりませんが、今の段階では規模が全然合っていないわけですよ。これが必ず長作の観音堂だったのかというのは伝承の範囲だと思います。ただ規模を大きくしたりだとかは、変更することはあり得ることらしいですよ。そう考えると移ってきた可能性は今の段階ではあり得るというか、あるということも、可能性としてはあると。

(中村)

清雲先生の云々はどういう経過でそういう発言を。

(石神)

清雲先生は私達の検討委員会の委員長です。1年に3回ほど委員会を設けてそこでご意見を伺いながら発掘調査をしてるんです。長作観音がいいといって勝手に掘るわけにはいかないんです。いろんな背景から検討して頂いて調査に出るということになるんです。清雲先生と前県地方財室長だった秋山先生、県外の方、立正大学の教授の時枝つとむ先生といつて山岳寺院の先生で前は文化庁にお出でになった方です。その方と国立歴史民俗博物館で中世史を研究なさっている高橋かずき先生というお若い先生がいらっしゃるんです。その4名で構成されていて考古1人と文献3人という形なんですけど、その方々にいちいちこういう成果がありましたと報告しています。清雲先生は県内ですので検討委員会以外でもお会いする機会も多くて、それでこの話をしたんです。そしたら先生が、私もまたそのへんは詳しく聞こうと思ってるんですけど、ああ、小さくてもいいかも知れないねっておっしゃったんですよ。規模が大きくなって下に行くっていうふうにはあり得ても必ず規模が権力構造だったりとか、時代が安定していればもっと大きくなるって考えられるかも知れない。立て替えとかすることはどうなんでしょうね。立て替えちゃえばいいと思うんだけど、そういうことではなく意匠を残すことが意味があるんでしょうかね。移動の経緯はちょっと分からないんですけど。

(中村)

移動の経緯が分からないということは、元々ここに今ある長作観音堂は昔は古観音にあったんだと、伝承の範囲で。

(石神)

すごく思っているのは、長作観音堂の周りを掘れたらよかったなと今思っているんですよ。そうすれば山へ登らなくてもいいし、高いところに一段ありますけど、地元の皆さんがおっしゃられるには下にあったっていつてますよ。

(中村)

昔は長谷寺があつてその脇にあつたつて。

(石神)

そこを掘ればよかつたつて思っているんです。そこを掘れば遺物が出れば、そこがいつ

がスタートなのかっていうのが多分分かったんですよ。今、寺子屋が建っていますよね。その周りとかその辺を掘れば多分十分に昔はいろんな建物が立ったり消えたり、建ったり消えたりしていると思うので、かなり掘っちゃったよとか言うんですけど、発掘は平面だけですのでどんなに掘削があっても全部壊されるということはまずないんですよ。どこかに必ず残っています。一部だったりするので。あそこを掘ればよかった。後からそれに気づいて。あそこを掘ればいつがあそこのスタートなのか分かるんですよ。江戸時代なのかとか、あとでそれに気づいてああ、失敗したと思って。山を掘らなくてもあそこを掘れば良かったと反省してるんです。そんなに十分出来なかったんですけど。

(中村)

松姫伝説があります。それともう一つひっかかっているのが大菩薩なんです。金峰山から甲武信を通って雁峠からずっと来て富士山に抜ける行者街道があったんです。もう一つは甲州と武州との昔の裏街道といいますか、甲州街道自身は五大街道の江戸になって正式に大月のルートが出来るわけですけど、その前のルートの一つにも。だから大菩薩から長作に抜ける道というのは非常に平坦で最後のとこだけがならくらの頭というところがあって、そのとこだけが厳しくて後は非常に平坦でならくらまできて、寺から降りていけるルートになっていて、それが三頭山に行く、西原を通して上野原に行く、そういう意味では絶好の場所ですよ。

(石神)

大月に抜けられるようですからね。

(中村)

そうすると古道として大菩薩の場合は何故大菩薩という名前になったのか。

(石神)

信仰関係ですよ。どう考えても。釈迦ヶ岳という信仰関係の峠だったり、多いんですよ。

(中村)

役行者が金峰山に登って修行した。記録で残っている登山記録で一番古い。百名山に記している。そうすると、奈良の金峰山から全国にいつ頃ですかね、名前が付いてきたのは。

(絵図の説明) 大事だと思ふところには時代が経過しても残るそんなものがあるわけです。ウシカイ、ふりやード、の説明

(石神)

私達の調査の十五年ぐらい前に古代 寺院調査というのをやっているんですよ。それは平安時代の寺院の調査をやっているんです。その時に随分古典書を拾っているんですけどその伝承地に行くと草ぼうぼうで入れないし、伝承を語れる人がいないんですよ。この三年で伝承を拾える、八十歳台の方が元気で、痴呆とかなってなくてお元気の方はすごいいるんですけど、盆地の方はほとんど拾えなかったですね。拾えたのは西郡の方ちょっとと郡内の方、洋作さんなんかの年代の方がしっかり生きておられれば拾えるんですけど、もう

ちょっと私達は手遅れです。今ここで拾っておかないと、最終を過ぎてますけど。

(中村)

川の場合は山と川と森。まだ残っている。絵図(塩山版)の説明

熊野川は役行者の千三百年の歴史だから疲れて疲れて。生活が暮らしとして続いたんです。そういうところは都会にはないから全部変わっちゃう、ところが源流は残ったんで。

(石神)

残っているから今もあの建物が守られている。ちょっと離れていて、都会から隔絶されていたから残っていて、伝承も残っていて、そこからが重要なんだなと考えているんですけども。全然遠いから返って影響がないというふうに考えて、都会とか、中世の社会とかあまり影響がない所なんだと考えていたんですけど、そうじゃなくてわりとそういうところの方が残っているということが勉強になりました。多分お祭りとか有形文化とかそういうものも随分古い形態を留めていると思うのでご開帳とかそういうところにたびたびお邪魔をさせていただいて、もう少しお勉強しようかとおもっているんですけど。

役行者の話も出たので、私達も富士山2合目の行者堂を今年発掘してるんです。これと一緒に同じ事業で。そもそも平成十七年に円楽寺に行者堂があってそちらの調査もしてるんですよ。その円楽寺に、今はもうないんですけど、役行者が富士山に、伊豆に流された時に来てそれから盆地までの道を開いたという伝承が残っていて、円楽寺に全国で一番古い行者堂が残っているんですけど。円楽寺は中道町なんですけど。円楽寺はもともと、今も真言宗なんですけど、その真言宗をずっとのこって持っているいろんなピンボールもってるんですけど、そのお寺に、歴史によると甲斐国の代表的なお寺になっているんですけど、その中で円楽寺から富士山2合目まで開いて、今が、ここから358号精進湖の方に上がって行って、交差点を曲がって円楽寺というお寺があるんです。お寺はあるんですけど、ここに高い山があってここを登っていった上に円楽寺の跡があるんです。そこからずっと富士山を歩いて、尾根筋に富士山の二合目まで至るらしいんです。この円楽寺に行者堂という役行者のお堂があって1302年改修という収蔵かなっていう奥書があるんですよ。1302年に直している。それよりも古いお堂だと思えるんですけどそれが今日本で一番古い役行者堂なんです。県立博物館にもレプリカがあります。それを富士山の山開きの時に背負ってずっと修験者の方が近くの滝で身を清めるとかいう儀式があるそうなんです。藤のつるを切って、今大善寺でやっていますが、藤切りの儀式が明治時代まではこの円楽寺でもやっているんですよ。そして修験者が行者堂を背負って登って行って2合目に安置して冬になって山を閉じるときにまた背負って戻ってきて円楽寺に安置するという習慣をずっとやっていたらしいんですよ。中道町史の中にその様子が書いてあるんですけども。その跡いろいろお寺が無人だったりする時があって途絶えてしまうんですけども、今は無くなってしまいうんですけども、そのお寺の発掘調査を行者堂は昭和三十何年に台風がきて、その前は建っていたらしいんですけど、台風で無くなってしまっただけでそのまま廃れてずっと藪になっていたんですよ。それを偶然17年に発掘調査をしようとしたことに

なって、今藪を全部取り去って全部4軒半の4軒の建物で、この中を掘ったら13世紀の土器が出てきたんですよ。だから13世紀からの規模であったというふうに考える、じゃ、郡内の富士山の2合目はどうなのかというのは今年又発掘調査します。13世紀まではわからないんですが、14、5世紀まではどうも遡りそうなんですね。静岡側には浅間神社がいっぱいあって、その中に行者堂がいくつかあるので大体みんなそこが14世紀から15世紀ぐらいなのでそのぐらいに役行者の信仰がすごく盛んになる時期があるようなんですね。役行者をそっちの方から追いかけていまして、今先生のお話を興味深く聞いたところだったんですけども。これとは別に行者さんを追いかけているんです。富士山の富士山信仰ってというのは何なのか、中世に、山梨にどういう影響とか役割を担うのかというのを今一生懸命考えているところなんんですけども。今は全然別の研究のようなんですけど一つに繋がる研究なのかなと思って。

(中村)

昔の道が大事。道の作り方が合理的。千曲川源流から富士の方に来ようと思えば行者道が一番安全で近道。秩父から、三峯から合流してそのルートも考えられるし。

(石神)

円楽寺でお金を取っているみたいですね。そこを交通する人が100文とか取っているみたいですよ。江戸時代とか。ガッポガッポみたいだったですよ。すごい文書が残っている時代の。銭を払えば安全が確保されていたみたいですので、一番安定したルートだったんだと思います。明治時代までは郡内に抜けるときはこれを使っていたみたいですが、みなさん。精進湖が出る前ですから。

(中村)

昔の辿っていける道というのは。

(石神)

ないんですよ。私もこの道を通って富士山までと思っていたんですけど、危なくてとても、もう開けてなくて。明治時代ぐらいまでは使っていたみたいで、昭和30年代に一回道沿いに石像物、馬頭漢音だとかそういうのがあって、それを調査した方がお出でになるようで、それを30年前に、私は20年前と聞いたんですけど調査し直したひとが、全然口から口へですから正しいのかどうか分からないですけど、聞いたら石像物が3分の1に減っていた、盗まれてしまって。というふうに話している方がおいでになって、じゃ通れるのかなと思って、今、通れる方を探しているんですけど、中道町の教育委員会の方も通りたいたいといって、二人だと道も分からないですから、道が無くて、だれか古い方で道を知っている方を探して居るんですけどお出でにならなくて、そういう意味でも伝承が間に合っていない。

(中村)

大事なものは地名とか言い伝え、伝承。いっぱい残っているので記録する。

(石神)

私達も伝承がたくさんあるからって拾って行って調査して、行き当たらなかったということが何度もあるんです。税金の無駄遣いじゃないかって。中世はあたらなくて、平安ばかりあたってたりとか。今回はあたってよかったって思って居るんですけど。中世寺院といいながら全然中世じゃない寺院じゃないのがあたっちゃったりとか。掘ってみたんだけど、建物らしいんだけど何かよく分からないとか。いろいろ難しい発見があるんですが。

(中村)

あきなめないで、つなげていただいて。

(石神)

後は地元教育委員会の仕事なんですよ。私達はあそこまで明らかにしたので後それを地元教育委員会で繋げて頂いて活用して頂く。

その時に来て頂いてご指導頂くということはできるんですか。

(石神)

私達から発掘することはできないですが。

小菅や道志は活気がありますね。発掘調査も全面的に協力していただいた。

(中村)

遡れる年代が確定出来るということは村の歴史にとっては画期的なことで。今度の場合はいい伝えが実証された。神楽沢入り、音無の滝を含めて、繋がったんですね。

(石神)

考古学の良いところは動かない歴史を実証できる場所なので。その一方分からないところが、一つ分かって十分分からないところが出てきたり。よいところは文献の方とも、地元の方々ともその他の研究の方とも協力できるというところかなと調査に入って思っております。

(中村)

平安の土器が出たこと、観音堂が重要文化財だということを含めて宝なので、課題である中世の社会構造をどの程度分かるかはともかく、専門家の先生にお話しして頂いて。研究会的なものを、多少成果が出たときに報告会を兼ねたシンポジウムを、できれば三月くらいまでに一回研究会をやらせていただきたい。

(石神)

長作観音堂を取り巻くそういう部会みたいなものができたら是非協力をさせていただきたいです。そこで高まっていけば次の調査なりに繋がっていく可能性が高いですよ。

(中村)

今日は本当に有難うございました。

## 聞き取り調査

源流古道と古観音

守重洋作さん

(中村)

昔道と古観音の調査の結果の話聞きたいとおもいますが、古観音から色々出てきましたね。

(洋作)

今まで言い伝えできてたので発掘されてよかった。

(中村)

観音堂の言い伝え通りに出た。今度の発掘調査は長作にとって大事な発見。その話を聞かれたのは何歳ぐらいの時ですか。

(洋作)

昔から。親父も観音様の役員をしていたのでずっときいていました。守重よし房。明治22年生まれ。私は明治42年生まれ。兄弟は8人。洋作は長男。次は男で亡くなる兼嘉。次は紀正。啓経。長女のけさ子。信春。次女の敏世。次は行敏。

(中村)

当時の仕事は。農業ですね。

(洋作)

雑穀を作っていた。麦が中心、大麦、小麦。粟、キビ、ソバ、モロコシ、雑穀はすべて作ったけど米は水田がなかったから作れなかった。畑はこの奥と観音様の裏に出てくる峠へ近い方の、栗山のあたり。こやけの沢もあった。焼き畑もやった。焼き畑は1年目はソバ、2年目は小豆か粟、3年目は養蚕をやったから桑を。それからずっと桑を。桑を植えて次の年には葉がとれる。苗が大きいから早い。

(中村)

そうすると、雑穀をやり、焼き畑をやり、養蚕があり。養蚕は何歳の頃から始まっていたか。

(洋作)

子供の時から。農閑期に炭焼きをした。冬場です。私が大きくなってからワサビをやった。

(洋作)

洋作さんの場合大正10年ごろに12、3才になりますよね。働き始めたのは何歳ぐらいから。

(洋作)

高等小学校出てすぐだから15才かな。尋常小学校は長作分校。生徒は43人。高等小

学校は西原。高等小学校ができて2年目かな、西原にできたのは。それから後1年たって、小菅に。小菅の方が後だった、高等小学校というのは。西原の高等小学校は生徒は20名ぐらい。尋常小学校に入学するのは満8才。6年行って、高等小学校。義務教育じゃないから50銭の授業料を出して行ってた。50銭というと、当時日当が70銭だったから。

(中村)

ここから西原まで当時はどういうルート、通学路は。

(洋作)

大正4年に今の車道が牛馬が通れるようになった。当時は馬が中心。その前は大羽峠を通る道。西原小学校まで歩いていけば学校までは50分ぐらい。1時間だね。5キロあるから。高等小学校は2年。卒業して16才。学校の方は夜間学校へ行った。9月から3月までを4年間、毎晩2時間分校で勉強。

(初男)

写真機なんかオレが26年の卒業だから30年を過ぎてから。

(中村)

夜間だから、昼は何かしてますね。

(洋作)

家の手伝いをしながら夜は夜間学校にいった。高等小学校に通ったのは長作からは6人。義務教育じゃなかったから。長作から離れたことはほとんどなかった。兵隊は逃れた。細かったから。

(中村)

20才前後で昭和になって、(終戦の時は40才ぐらいか) そうすると、家の手伝いをしながらそのころの村の中の物知りおじさんは誰か。

(洋作)

親父かな。

#### 写真を見ての話 (分校)

(中村)

暮らしのこと、物を作ること、いろんなことをお父さんから、家の手伝いをしながら。

(洋作)

お父さんと守重三五一(みよいち)さん(次男さんのお父さん)

(中村)

小さいときはここは何軒ぐらいだったですか。

(洋作)

43軒あった。炭焼きが住んでいたから、炭焼きの子供をみんな学校へ入れて43軒住んでいた。100人以上いたことがあったです。

(初男)



にぎやかなもんだったですよ。

(中村)

そしたら言い伝えで構わないんですが、守重さんの中で本家筋、古い家だと言われていた家が何軒かあるんですか。

(洋作)

守重3軒と言われていたことはある。守重いくおさん。

(中村)

ほとんど守重ですよ。

(洋作)

江戸末期に守重になった。前は根津。観音様で鰐口をあげた人がありまして、それに守重とあったそうですよ。

(中村)

考古学の先生が言ってるのは、鰐口には甲州都留郡丹波山郷（長谷村）長作村如意輪観音堂どうぎん大旦那守重と出てくるんですよ。で、嘉吉、この年代がなんと1442年になるんだそうです。そうすると室町、武田信玄が1540年から80年ぐらいでそれより100年前だから室町の頃に守重という姓があったということになっちゃうんです。

(洋作)

それはあったらしいですね。観音様に。

(中村)

根津というのはもともと長作だったんですか。

(洋作)

そうらしいですね。そういう伝説はあるんですが。

(中村)

山梨県で根津というと、山梨市の万力公園の根津一族、有名な一族との関係は。

(洋作)

関係は全然知らないですね。

(中村)

江戸末期に守重になったようだと聞いているんですか。

(洋作)

ええ、そうです。これが盗まれて、鰐口も盗まれたから、その鰐口に金が含まれていたそうですね。そういう関係で盗まれたんじゃないかと。その名残をいつまでも後に残すために守重になったそうです。

(中村)

この守重という名前が鰐口にはあったと。鰐口には金が、(大量に含んでいたという伝説があった)無くなったときに、それを契機に根津から守重に変わったかも知れないんですか。変えた理由というのは、

(洋作)

守重という名前を後世に残すために。

(中村)

鰯口に守重というのがあると。1400年ぐらいには大旦那がいた、いつの間にか根津という名前が広がっていたと。それでまた守重を残すために江戸末期に守重に戻った、とか守重を名乗るようになったと。根津から一軒なしに守重にしたと。どこかのほんで読んだだけなんですけど、1580年頃に天正10年頃に武田勝頼が亡くなりますよね。そのころに松姫が塩山の向岳寺にいたんだそうです。どなたかが付き添って大菩薩を越えて八王子に行ったと。都留の方は小山田が信長の方にひっくり返ってたので、そのときに松姫がここを、長作を抜けたような話は聞いたことはないですか。

(洋作)

ここを通ったという話はきいたことがありますけど、それは少ないですね。この十文字からここをずっと通ったという。

(中村)

十文字を通ったというのは。

(洋作)

すぐ上ですから聞いてます。

(中村)

松姫は十文字を抜けた。つまり牛の寝から奈良倉に来て。松姫は大菩薩から、牛の寝に来ますね、牛の寝から奈良倉にいきますね。

(洋作)

十文字を通過って、西原に近いこさの峠を通過って、西原の八幡様へ行って、それから現在の西原にあるお寺に3泊したと。

(息子)

そういう伝説は確からしいぞ。その話はみんな知ってら。

(中村)

お寺の名前は。

(初男の妻)

それもずっと昔はこっちの沢の方にあって、新しいお寺になってからなの？

(洋作)

新しいお寺になってからかな？

(中村)

西原では有名な話ですね。そこからどこを抜けたんでしょう。

(洋作)

藤尾峠を通ったらしい。数馬へ抜けて。

(中村)

それから八王子の方へ行ったんですね。これで繋がった。十文字で西原のお寺ですね。なるほど。そうすると、もし西原のお寺に泊まったのであればお寺に何か残ってるかもしれない。

(洋作)

何か残ってるかも知れないね。

(中村)

そうすると守重一族がこの鰐口によるとすでに1442年には旦那が誰かいた。

(初男の妻)

氏神様の後ろ、横に石碑があるんですね。そこにも何か掘ってありますね。それはそんなに古いものじゃないか。

(中村)

この松姫のことなんか誰から聞きましたか。

(洋作)

西原の人から。ここでもそういう伝説はありましたから。

(中村)

ほぼ、牛の寝から松姫峠をとおって、奈良倉に行って、十文字から西原というのはほぼ間違いないでしょうかね。塩山の向岳寺にいたんだそうです。ずっと追われて。織田、徳川軍が来て、恵林寺はそれで焼かれちゃったけど。そういうことか。不思議なのは、この鰐口には丹波山郷となっているんですけども、長谷とかいて、長作と呼ぶという注記が載っているんですが、その旦那がいて宮大工を雇って、ああいう長谷寺みたいなものを造るんですね。昔はあそこにお寺みたいなものがあつたんですか。長谷寺というお寺はあつたんですか。

(洋作)

あつたね。

(中村)

真言宗の長谷寺が今の自然塾のところにはあつた？

(洋作)

あつたですよ。大きな草屋根のお寺があつた。そこが分校になっていたんだから。

(初男)

間口は10軒はあつたかな。

(中村)

それじゃここで言ってた、長作分校というのは長谷寺のことですか。そこに分校が載っていますよね、新しい学校が。

(初男)

それは途中で立て替えた。

(中村)

長谷寺から建て替えられた分校がいつ頃かは分かりませんですね。

(初男)

私が行ってたときはまだあったから、戦争中まであった。30年過ぎだな、分校が建て替えられたのは。

(中村)

教育委員会に記録があるかも。そしたら昔の長谷寺の写真が一枚出てくるといいね。

(写真を見る)

(中村)

昔の観音様が立っている後ろに石碑がありますね、この碑は動きましたか。

(初男)

動いてるんじゃない、下におろしたでしょ。

(洋作)

あれは動かさなかったと思う、あの石は。

(中村)

じゃあの石の目の前に昔はこの観音様はあったということですね。古観音を発掘した石神先生が是非この観音様がたってたところの場所をを発掘させてほしいと言っている。そうするとその土台だとかあそこを少し土盛りしたんですか。

(洋作)

削ったような気がする。少し下げたような。学校の校庭がありますね、10センチぐらい下がったんじゃないか。

(中村)

むしろ掘った？

(初男の妻)

そうすると昔のものが出てこない可能性がありますね。1メートルほど。

(洋作)

1メートルほどじゃなかったけど、あの地藏様が立ってるところより平らだったような気がする。

(中村)

今は石像と校庭は段差がありますか。

(洋作)

石だけ下げてる。

(中村)

この石と観音様が一緒だもんね。

(洋作)

立て替えて改造してみて分かったけど、ここは警察だったんですね。あとでこれはつけたもの。

(中村)

これはいい写真だね。

(写真を見る)

(洋作)

これは最近になってから、発掘してから少したってから聞いた話だけど、この下に守重ちかこさんが一人にいるんだけど、そこから出た金おさんという人が子供の時からお父さんに聞いた話で、大石の反対側の杉の中に（石上先生が掘ってみたいと言ってたところ）あそこに小さい寺みたいなのがあって、観音様を守っていた人たちが昔はいたという話を親父から聞いたことがあると、そんな話をしたと。

(中村)

だからね、石神先生が是非掘ってみたいのはそだち石の周辺と中世の建物の周辺にはなぜかテラスが全国各地にあるそうなんです。そういう様式があるんだそうです。なんとも分かりづらいところはあるんですが、土器まで出てるんですよね、そこでものを煮たり火をたいたりしたわけで、観音様の前の建物が仮にあったとします。そしたら建物の前はなにか自然信仰的な行者さんの昔からのお祈りの要素があったんじゃないかと。もっと言えば十文字に通ずるこの道というのは御堂街道がありますよね。昔は西原にも行く道でもあるから人の行き来が強かったんじゃないかなという。

(洋作)

そうかもしれん。御堂街道へ、この屋敷というのは後世にそこへ移っただからあの前を東海道が通って、三頭へ登ったです。

(中村)

三頭（御堂）街道というのはここから行けばどこにあたるんですか。

(初男)

大石のところを通ってずうと尾根まで続いていた、昔は。

(初男の妻)

人の通った後があると言って、今でもその道が残ってるのかなんとか。お父さんが15年ぐらい前に聞いてきたね。その下の方がもう10年ぐらい前に亡くなられたからだけど。その方が鉄砲うちで行ったときに随分人が通った跡があると。

(初男)

だからあの古観音の前を通って、沢に登ってずっと尾根まで行けてた。数馬とか八王子の方へ通じるわけ。

(中村)

通じますよね。今の都民の森から登ればすぐ三頭山だから。檜原にはすぐなんですよ。ある意味では江戸から甲州までの最短距離なんです。距離的には。昔の人の足腰の強さは今の人とは比べ物にならないから、厳しいとかはそんなに苦にはならないわけですよ。

(初男の妻)

あそこ神楽入りというのは神楽というのは舞ったりするでしょ、だから昔随分あそこはにぎやかだったときがあったんじゃないかと。お堂があったりして、神楽があったりしてにぎやかにお祭りがあったりして。

(中村)

洋作さんから聞いて音無の滝に行って、育ち石の方に立って下を見ていて、直接登って行って、よく音が聞こえる訳ですよ。音無し音無しというから何かなと思って、古観音に立つと音が聞こえないわけです。つまりあの古観音を中心に音無しの滝という名前が付いたんだろうと。おっしゃるように東京、武州、武蔵の国からこっちに来て甲斐の国に行く非常に近い道の一つだった。そうするとここが栄えた意味が分かってくる。つまり一つだけ困っているのは、昔の人がどういうわけで私財を蓄えて観音さんの厨子は矢花作りとかいって、京都か奈良の宮大工の技術が入ってるわけです。そうすると、宮大工を呼べるだけの財力を持っているだけの人がここにいたわけです。

(初男の妻)

専門の先生が調べてもそういった。よほど力のある人が京都や奈良から呼んだに違いないと。

(中村)

そうすると当時の呼ぶ財力を蓄えた資金源になったものがなんだったのかなと。

(初男)

大体、食う物だったらしい。この土地が良くて、穀物がうんと採れて、そういう関係もあるんじゃないかと。(それはいいかも知れない) 穀物が相当に採れたんで、だんだんに残って力を付けてきたんじゃないかというけど。

(初男の妻)

今のごみの処理場があるでしょう。あそこの上にはうちの畑があるんだけど、あそこから昔、土器が出たと言ってたね。(縄文も出たが昔のことだから、みんな捨てちゃった。石の斧もみんな学校へ寄付した。焼けた土も出た。)

(中村)

栗山という名前だから栗が随分採れた？

(洋作)

栗は随分昔からあった。

(中村)

土地が良くて穀物が良く採れて、行き来があって、にぎやかで、そうじゃなかったら皇女なんか通らない。なにか知れ渡った道でないと。

発掘したときの小菅の築地が小菅の石屋さんが知っていて、あれは京都の石の付き方と違って。青みかげと言われる石で古観音の付近の川では産出しない。青みかげは他から搬入されたとなっています。つまりそんなものが来るわけだから、そういうところとのつきあいがあったということですね。

(初男の妻)

石の積み方が、横に石を使ってあるんです。この辺の積み方とは違う。これは京都の方の積み方だと。よしはるさんという方かな。今も行けばちょっと分かるね。

(中村)

そうすると、神楽入りの神楽を舞う、祈りの場所でもあった、いろんな技術が伝承してきている。そういうことまで考えると、この長作というところがこの地域で唯一国の重要文化財になるレベル、技術のレベルのものが建っているわけです。国の重要な宝だと言っているわけだから。(様式のこと、等)

(初男)

観音さんが建っている上に、あれを修理するときに本尊さんをあの上に入れておいたんです。休ませておいた。出来て本尊様をいまの本堂に入れて、そのたてたところに昔上に石塔があったんですよ。それが歴史の本で読んでみたら、西暦大体500年程度の時に外国からそういうのが入って来て、それにそっくりなのがあるですよ、いまでも。観音様を登っていけば、20メートルぐらい高いところに。ちょっと汚れているけどね。それを今度教育委員会に話そうかと思って。(上からのぞいても見えるね、このくらいのお堂が)その中に入ってる。高い山のところにあっただけけど台風で山がだんだん崩れてそのまま後ろへ行って一時無くなっていたことがあったが見つけたけど、そっくり。石仏で。(石神先生と一緒に来られた長田さんだったかな、写真を撮ってた)川に落ちてたと言ってた。小学校1、2年生の頃あんな高いところに仏像があると大騒ぎしたことがある。

(中村)

石神先生もよもや平安時代の土器が出てくるとは思わなかったって。すごい自分にとっても喜びだったんだね。僕が行ったときは埋め戻すときだったから、ちょうど出ちゃったんですよ。

(土器の話、その他、文化財を守るプロジェクトの話)

言い伝えが本物に変わった。1000年間の言い伝え、長いですよ。

(天川の話)

小菅の中で生きた歴史が繋がっているのがここだけ。ここは源流の、いろんな大切な物の大本だったと。人間の精神の文化の大本、1000年の営みの話がここにはある。

(研究会を立ち上げる話、その他)

観音様の材木はさわらと聞いている。

観音堂は日当たりが良くて、水はけが良くて。改築するときにつれてった先生がいいところだねと言った。

(世間話)

巨木の話。小焼野奥の奥に水無沢ですか、大きな木があったと聞いている。三頭山のこっち側。大長作とこやけのこっちがわにけっこう広葉樹林が残っていますよね。杉や檜も含めて幹周りが3メートルを超える木があると聞いたら。

(初男)

そんなもんじゃねえ。直径小2メートルある。(けやき?)でかいもんだ。山の境に、入り口から1時間と行かない。沢に行くのが一番近い。

(初男)

おおきいケヤキは境木としておいたと思う。

(中村)

大長作の広葉樹林はもっているのは地の人ですか。

(初男)

川から向こう側はちがうけど、そんなにでかい木はないよ。

(中村)

どういふことで皇女伝説が続いてきてるのか。6代めの孝安天皇の皇女の資料がないんですよ。

(洋作)

名前は吉姫。これはひよっとしたら本当じゃないのかと。

(初男)

そうじゃなきゃ、この山の中にあんな昔に観音様みたいなものを建てることがなかったじゃないか。なんでもその娘が妊娠したから勘当されて部下を少し連れて通りかかったという伝説になっている。ちょうどここへ来たときに産気づいて難産で死んだというだけだ。

(中村)

勘当されて家出するには京都から遠すぎる。

(初男)

なんの理由があつて、そんな妊娠したものがこんな山の中に通りかかつて、不思議だ。

(中村)

いままでは古観音も碑はあるけども言い伝えで来たけど、1000年前に遡るほどの遺跡が出たと言うことになると、本当だったということになると、石神先生とも昨日皇女伝説も本当に近いことが何かあったよねと。貴族なのか、皇女なのか、松姫なのか何なのか。吉姫。

(洋作)

吉姫も部下は9人。

お産で亡くなったのは大変なことだからその責任を感じて、いまの森で自決したそうで



す。9人とも。それで総覚の森という名前は私が子供時代からずっと。総員の総、覚は覚悟の覚。おたか神社でのこと。

子供の頃意味は分からないけど、総覚の森と言っていた。氏神の森とも言うし。みたか神社。おたかとは言わなかった、昔はね。御鷹（みたか）神社と呼び出したのは、ずっと昔もあっただけと言わなかった。生まれて初めて聞いたのは、総覚の森。だから観音様と縁があるということで。

（中村）

観音様は6代天皇の皇女の亡くなられたのを悲しまれて如意林観音様をまつってお守りしたのが元々のいわれの一つですよ。だから漢音様のいわれと非常に関係がある。そこでおつきの9人の方々は責任をとって自害された。

（洋作）

だから吉姫さんのお墓というものはどこにあるか分からないけど、近くにあるか、京都の方まで持っていったものかそれも分からない。

（中村）

この前調べていたら、月山とかいろんな碑が建っていますよね。あの碑の下に確かに根津〜と書いてあるんですよ。名前が。他の本でね、ここの前身に根津の方がいたということを知ったので、青柳課長に聞いたら、オレはそんなこと聞いたことないといつて、おたか神社に行ったら、根津〜と言う名前があったからあるじゃんということで、ひさいちさんに聞いたら根津なんて言う話聞いたことあるよということで。1442年から大旦那守重の名前があったということになると、松姫についてきた、向岳寺からの護衛で来た向岳寺の有力な門徒の根津一族の末裔が姫様を守って峠を越えてここまでくればもう大丈夫だということで、十文字で分かれてここに住んだという説があるわけです。それでどうなのかなと松姫のことを聞いたら松姫はここへは来なかったと。ただ十文字で西原へ行ったすれば、西原までいった人か、十文字まで送ってきた一族の人が一服して、ここはいいところと言って住み着いた可能性はないわけではないわけ。文化の香りが非常に高いじゃないですか。戦前なんかは結構安産の。

（初男）

安産では遠くの方から、大月の方からも来た。随分きたですよ。

（中村）

それはそれだけ広がっていたということですよ。

（洋作）

青根の方からも来た。

（初男の妻）

観音様の分身が祀ってあるということでね。分身と言うことでしょ。結局こっちからオダマキを分けて、分霊というのかな。

（洋作）

あおねにも分霊があるですよ。去年だか役員衆でそういうことを聞いたから見に行ったけどね。

(中村)

よほど、観音様が方々に知られていたんですね。

(省略)

(初男)

ここから1000メートルぐらい行ったところに、十文字の方から流れてくる大きな川があるけど、びりゅうさわという。そっちの峠から登る、昔杖の地蔵と言ったその峠で越えにゃならん方へ行くけど、それを通る人間なんてすごかったですよ。小学生の時分には。

(初男の妻)

こっちのお祭りの時はそっちの方にお祭りが出たんですって。

(初男)

そっちへ店が出て随分にぎやかで、帰りにはおみやげを買って。かきのきでえろ(だいら)そっからこっちへ登る入り道だったですよ。いまも道があります。そのうちのしも跡を継いでるけど、その若い者が観音様のお祭りには店が出て帰りにはずいぶんぎやかだったと。

(初男の妻)

そこの、お父さんよりはちょっと若い人です。

(初男)

うちのお母さんはそれで随分売れたとって、場所税をかしてそういう露天商みたいなことをした人からお礼をもらったことがあると。七保から随分来た。

子供の頃はここに小高い藪があって、川に寄った方に。そこでお産をした。いまは残土で埋まっちゃってない。本流に近い方、こっちから行けば川の向こう。川底になっている。

(中村)

今日はお忙しいところ、有難うございました。これからもよろしく願います。

## 聞き取り・源流資源調査

源流古道・甲州裏街道について

手塚勲氏

中村

今日は源流資源調査の聞き取りで、伺いました。よろしく申し上げます。大菩薩から牛ノ寝を抜けていった、甲州裏街道、青梅街道について、その文化を源流古道ということで、掘り下げていこうと思います。昔の集落の作られ方をみれば、川が大きな難所で、橋が流れたり、渡るのに厳しかったりするので、尾根道といのは非常に重要な役割を果たしていた。その古道という切り口からいろいろ教わろうということで、昨年、廣瀬国光さんの話も聞いたりしましたが、甲州裏街道・青梅街道というのは甲州と武蔵の国を結ぶ重要な街道であった、ということを知っている、ここに番所があって、小菅にも番所があった、という意味では、歴史の一つの証人なのかなと思います。ここの地名の由来も含めてお話を聞かせて頂きたい。それから、柳屋という屋号も含めて、お話を伺いたい。

手塚

屋号の言われは実際のところは分かりません。たまたまこの番屋の地内に、柳土手という場所があること。柳沢峠というかつては青梅街道の道筋ではないが、明治以降使われていた柳沢峠。これは人の話ですが、江戸の柳沢吉保から、そういう意味で柳沢峠と付けられたときいていますけど。江戸のいつの時期が分かりませんが、文献では天明3年、大福覚帳というものが発見されて、柳屋が旅籠であったり、丹波小菅の物資の流通の間屋としていたという。このことはまさに青梅街道の物資の流通であったり、番屋という部落に関所があったりということで、人の出入りを監視する重要な場所であったということは間違いない。そんなことで、名のいわれは、いずれにしてもうちで江戸時代から旅籠および問屋をしていた。ということで、昔は名前だけを使われていたけれど、商売をするうえで屋号を作った。これが甲州上小田原村、御宿柳屋周兵衛。周兵衛は世襲で2代あります。柳屋というのは確かに昔からあった。これが天明3年大福覚帳。柳屋とある。これは襖の裏張りになっていたものがたまたま、襖を新しくしようということで、外へ出して雨ざらしにしておいたら、襖の紙を剥いだりしているうちに、中からいろいろ古文書が張ってあった。1枚1枚剥いで。当時は紙がないので、大福帳も下張りにしたということですね。今だから昔のものが貴重になってきますけど。当然、江戸時代から旅籠、問屋をしていたことは分かっていたけど、初めて実際に確認できました。

中村

天明の大飢饉というのはいつでしたっけ。

手塚

天明3年です。西暦で1783年。飢饉というのは、簡単にいうと冷害が3年続かないと、一般的には飢饉とは言わないようです。というのは冷害が3年続くと種まで駄目になる。そういう状態にならないと飢饉とは言わないようです。

これが一緒にふすまに張ってあった問屋としての仕切伝票です。これすべてが国中の酒、塩、米。そういうものを丹波小菅の問屋であったり、商店であったり、商いをしている人に対して、こういう仕切伝票によって消費されていた。番割、米一俵、柳屋とあるんですが、丹波山村から角平さんですね。不思議なことに、酒は全部、信州高遠から取り寄せています。当然、甲府とか石和の松本とか、こちらでも酒屋は当然あったでしょうが、当時、信州の酒はおいしいというようなことで。

中村

昔の文化の伝播力というのはすごいですね。

手塚

結局、そういう流通、安くておいしい酒が流通すると、今度は国中としては困るわけです。だから一時そういうことは相成らんよと、規制したこともいろいろ古文書には出てくることがあるんです。普通一般的にこの地域で私の家で、高遠のそんな遠くと商いをするとは情報上考えられないじゃないですか。これすべて、高遠の酒屋の伝票です。それで私が高遠まで行ったんです。これは弥勒祖助というんですが。高遠に弥勒村というのがあるんです。祖助さんという方と取引をした。ほとんど1週間に1回というか、かなり頻繁です。かなり酒というものが必要だったというか、生活のための嗜好品の一つだったかということです。

中村

結構、そういうものも買える経済力になっていたということでしょうか。

手塚

当然そうです。最近、私はちょっと古文書の勉強をし始めました。叔父が先生なんですが、例えばこれは、『箸削り。米一斗五升を請けますよ、吉兵衛。右くだされべく候。寅七月一五日、柳屋利左衛門殿、丹波山村角平』。これも丹波山村、奥脇という部落があるんですが、『五郎七、なおなお一重にお頼み申し候。わざわざ手紙を以て啓上仕り候。略。申し越し候。高橋より。大菩薩』とあるんですが、ということは大菩薩峠の無人交易所のことを指しているんですね。だからすべて物資は馬方が問屋から依頼されて峠の無人交易所まで運んだ。で、宛名だけを書いてそこへ置いてくる。こっちの馬方は峠に行っ、行ったと

きに向こうに、こちらの国中の宛名の荷物があればそれを運んでくる。向こうの馬方は峠まで来て、こちらから行った峠の荷物、向こうあての荷物があれば、それを向こうに持っていく。本来ならば人がいて、荷渡しをして管理するけれど、無人でことが行われていた。略。ここに大菩薩が出てくるということは、そういうことを意味している。

『・・・小菅の惣兵衛殿、仰付けられくださるべく候。真附麦、三駄』一駄は馬の荷の一つの単位。両脇にするのを一駄という。駄賃という駄はまさにこの一駄の駄です。『真附麦を三駄を、差し使わし申し候。これは私が参り贈り、御宝くださるべく候。』次にロウソクということを行っているんです。ロウソクを二駄ということは、一駄だけでも両脇に振るわけですから、それを二駄ということは、そんなにたくさんのロウソクが必要だということなんです。電気がないわけですから、すべて生活は、夜はロウソクで当たり前のことです。明かりということ言えば、ロウソクがいかに必要かということになってくるんです。

中村

では小菅には、真附麦とロウソクをあてたということになるわけですね。

手塚

こっちからの物としての伝票ということになりますね。ということで、いろいろな物資の流通を、まさに峠越えをしながらしていた。ということだと思います。これが普通であれば大福帳の仕切伝票の中に整理されているものを、襖の裏側に張ってあったのが、たまたま見つかって。これによって確認ができた。私の家にお蔵が二つあったのですが、栄枯盛衰のなかで村内にお蔵を売ってしまった。そのお蔵でもあれば、きちんとこういうものが残っていたのではないかと思います。

『なおなお、麦一駄間違いなく・・・。』これは馬便をもって。これは小菅の惣兵衛さんがうちに対して宛てた手紙。向こうからこういう荷物を送るから始まって。ここに麦一駄、峠へ』とあるんです。この者どもというのは馬方の話なんですが、日定めということは一日扱いだよということです。長期的に物を依頼する人もいたり、特別に一日だけお前持って行けと言ったり、いろいろですね。『米代金、不足これあり。そうらへどもお借りくださいませ候』少々の間、お借り。代金をちょっと伸ばしてくれ。こういうお願いごとが小菅の惣兵衛さんからうちにきてます。だから峠を越えて小菅に行く道と丹波へ行く道が尾根づたいにあった。

中村

北峠、上峠とって。石丸といまの避難小屋のある賽の河原の方が上峠で丹波に行く妙見。石丸が下峠で小菅の例の道。というように二つの峠が昔あった。

手塚

昔の地図でいうと、もう少し下に行ってから小菅と丹波に別れている地図もあるんです。無人交易ということから言うと、石丸へ行くと、多少わざわざ戻るような格好になりますか。

中村

だから多分、おっしゃるように丹波と小菅の道は早くに少し分かれていたんだろうと聞いています。

手塚

こういう状況でいくと、いずれにしても峠の無人交易所までは必ず物は行った。向こうからは丹波からも小菅からも来るということになっていた。小菅からここへ来るのに、どう来たかですが、昔でいえば一旦少し下って、両サイドへ分かれていったのかなど。その方が順路から考えれば、想定されるかなという感じはします。物資の流通という面の、たまたまこんなものが見つかって、読み下してみると。

中村

そうすると明らかに、天明の時代にはすでにあつて、甲斐九筋とありますね。この九筋は江戸時代には全国に五街道が出来ました。山梨県の歴史によると、江戸以前の道として既に、甲斐九筋があつたということですから、今見せていただいたのは、江戸になってからの文章だけど、その前に類するものがあつたのだろうと、という気がします。

手塚

私の叔父を知っていますか。私の叔父が神金の神戸なんです。古文書の研究をしたり、古文書の先生なんです、廣瀬良和というのです。月に2日ばかり古文書の勉強をしています。神金地域のそれぞれ古い家ある古文書であつたり、峡東一帯のものであつたりを教材に勉強をしているんですが、その叔父が萩原口留番所について、整理したのですが、甲斐国史に『萩原口の番所あり、武州口なり。上萩原村にあり、本村というのは上萩原村ということ。本村が五日、下小田原が十日、上小田原村が十五日、これを守る。』ということは、口留め番所ですので、名主庄屋、長百姓が交替でこの番所をしたということが書いてある。これしていたことによって、この地域は諸役、代官所管轄の本来地域でやらなければならない出労、諸役を免除してもらっていたということが書いてある。明和1770年の古文書によると松平甲斐の守、御領地の節、ご修復云々とある。番所修復したと。それ以前に既にあつたものと思われる。これが中畑二十七部、要するに物納の時代です。仕事がすべて石高でいろいろ表現されている。ここが中畑二十七部とあるが、これが開設の敷地であり、下畑十六とあるが、これは関所の上下に設けられている矢来の敷地であると。

このあとは現在残っていない。開設跡は青梅街道の道路とか。形跡は何も残っていないと。伝承によると関所は2間に5軒の建物。両袖が弓矢と武具を備えてあり、九尺四方牢屋もあり、四寸角の角材で造られてあったそうである。この関所は名主ほか長百姓が交替で勤務したものである。そのために関係四か村、上小田原、下小田原、上萩原を上の上切りと下の切りとって当時から分けられていた。上萩原のことを今でも上切、下切というんですよ。上切が今まだ現在も上切上、上切下、下切りで行政区上も分かれています。そのいわれはこの当時からのもです。交替勤務したため、関係四か村は、ご伝馬と諸役御免の特典があったと。和宮の御降嫁の折も、神金の四か村だけは一切の割り当てはなかった。関所の当番は2名あてにて、上、下麻袴を着用。大小2つの刀を腰にさし、いかにも武士らしく、えらそうな顔をして肩をいからしていたそうであると。村の者でも手形を持っていない者は、一切通行させなかったと。すねに傷をもっている者は砥山や高芝口の間道を利用した。要するに大腕を振っては通れないから。関所破りはとくに重罰を受けたと。夕方以後、一切通行止めのため小田原筋には柳屋、萩原筋には泉屋の二軒の旅籠があったが、2軒とも現存していると。中新原の雨宮賢朗さんのところが泉屋、それが屋号。泉屋といえばそこ、柳屋といえばうちということになる。柳屋についてはそんなところですよ。あと逸話といえば、国光さんから聞いたと思うが、ほとんど江戸の幕末の話です。昔の侠客の祐天仙之助という人がうちへ。この話は私が子どものうちから、私の祖父がした。祖父の祖父が江戸幕末、周兵衛という。周兵衛は二人おりまして、世襲しておりますから。この周兵衛は2代前の周兵衛で。間に入りまして、次の周兵衛。この時代に、侠客がうちへ来て、弟子を一人連れてきて泊まらせろと。実は代官所からこういう者が行くと思われるけれども、行ったら止めおけと。そういうお達しがきていたと。来ていたところどころに本当に来た。そこで断ったら、私はこういう者だと脅され、やむなく泊めざるを得なかったといういきさつであったり。ついては、今度自分は、二人とも峠越えをするので、大菩薩峠を。そこで荷物人足を差し出す旨、またこれを断る。断り候。ところ承知致さずにおいては、斬り殺すと。といわれて。申し脅され候につき、一命には代え難く。そこで嘉七という召使いを差し出して、荷物を持ち、峠越えを伝わせた。結果、村の役人が、追っ手が順に追って行ったから最終的には地藏茶屋よりも向こうで、逃げたという話をしたようですが、そうではなくて、峠の村方、名主、本江こうして、峠中程において、ゆうてん、ほかに付き添い候者共（というのは祐天と弟子ですね）去りゆき候と。で、荷物と嘉七はそこにいたと。その荷物は何かという、これが置いていった荷物の内容で、木綿二、反物一つ、機織り、男帯一つ、ただし五つ、二両一分入っていて、楊枝入れあり、身上小槌あり、いろいろな物がありますね。から、折り紙入り一つ、そめんがわ、下げたばこ入れ、金ぎせる一つ、ただし金腐り、ざらりけ、ねつき、何だかちょっと分かりませんが。ゆうきの反物一つ、帷子一つ、絹羽織二つ、風呂敷無地一つ、袴二下り、小風呂敷一つ、剣術道具一つ、柄の足袋一つ、小袋一つ、さんとめ風呂敷一つ、皮財布一つ、毛抜き一つ、小紋の脚絆一つ、雨合羽、木綿内紐二すじ、と傘が二傘、柳行李一つ、

こん足袋一足、メリヤス、雪駄、右の品々を報告しますと。こういうことがあった。私の親父が古文書の勉強をし出して、これがあって柳屋のことじゃないかってことになった。それまでこれがあること自体を知りませんでしたので、私の祖父が自分の祖父の言い伝えを順に。で、うちではこういうことがあって、旅館業を止めたと、ということを私も子どもの頃に口伝えで聞いてはいましたけれども、これが出てきて初めてこのことが事実としてまたこれも分かった。これもコピーですけど。恐れながら、云々という。これが逸話の一つ。また、国光さんも話しをしたと思いますが、関所の定目の話。古文書略。鉄砲の場合は証文がない限り、通さないという話し。やはり通る前に必ず代官所に届け出をして、初めて手形をもらって、その手形を見せたと、そういう話。これを守りながら4か村の名主、長百姓が交替でこちらの番所を守ったと。で時折、下の代官所のお役人が来て、どうだなどという話しをした。そういう時にはうちに泊まったりした。これが関所の定目ですね。

古文書？をみながら説明。市民、僧侶によらず、妖しい者がいれば、大勢相付き合い、お番所を通れば、密かに後を付けさせ、押し留めする。手負人（怪我人）であっても同じと。台風でお番所が壊れたりしたら、きちんと届け出をしろ。火の用心と。ごく当たり前のことですが、きちんと書いてある。何かあったら届け出をしろと。

中村

襖張りから始まって、よく残りましたね。丹波、小菅にとっては、襖張りがあったから裏付けられた。

手塚

すごいことですよ。要するに甲州街道を中心に、甲州街道は五街道の一つですよ。裏街道ということで青梅街道は。大菩薩峠を越えて、内藤新宿までいく街道で行商をしていたと。その脇道の一つとして武州へも当然行けた。一般的に武州に行くのは埼玉ですので、国道410号線、雁坂でいくのが一般的。筋からいうと、こっちは栗原筋。三富は万力筋とって筋が違う。その辺は多少、筋分けがされている。こっちは甲州街道も青梅街道も栗原筋になるんですよ。昔の郷筋の名称が書いてある。行政府が、代官所の管理下でいうと、東山地区が全部一緒かというところではない。道筋によって行政区を分けていたということになる。

中村

物資の移動の帳面によると、かなり頻繁に物資が送られ、また届けられということが裏付けとしてある。酒をとっても高遠から1週間に1回、高級な酒だけでなく、庶民が飲むどぶろくのような酒も多分当時からあったでしょうから、高級な酒だけでも遠くから1週間に1回も



手塚

伝票には日付がね、まったく1週間に1回もないのかな。日付がね。急ぎの時はそういうこともあるということですね。林業関係の薪とか材木、板ですね。そういうものも当然、物資の中にはありますね。

中村

丹波、小菅の方からは炭とか柾木とか経木というのか・・・

手塚

まさいたですね、41枚と。こういうのを一つづつ見ていけば、いろいろと。これは酒九駄、これは北原、弥勒、高遠、員蔵ですが。私が3、4年前、親父と女房と3人で高遠に桜を見に行きまして、通りを下っていったら弥勒という部落があるんじゃないかと思って行ったら、案の定、ここから右が弥勒とありまして。そこの脇をちょっと入っていったら、道祖神があつてなかなか古いたたずまいをしていました。たまたまそこに集会所があつて、集会所の人が集まっていたんで、この辺は弥勒ですかと聞いたらそうだと。そこで、この部落で、昔から酒屋をやっていた祖助さんという家が、江戸時代の話です、そこへ行って聞いてと。たまたまおじいさんがいて話を聞いたら、前の町長が北原さんという方で、その家は昔、酒屋をしていたと。その後、前の町長さんの北原さんのところへ行ったんです。そうしたら不在で町長の息子がさきほどの集会所にいたということで話をしたら、その町長さんのうちは昔からの名主で、昔酒を造っていたと。ということは聞いていたけれど、祖助という人間がいたかどうかは分からないと。そのとき町長さんは不在でしたが。そんなことがあつて、たまたま帰ってきてからもう一度見直したら、北原という名前があつた。少なからずこの北原さんとい可能性がある。

中村

それとあわせて出てきているのが、御巢鷹山というのが、土室谷、小金沢谷、12カ所あつて、そのうち8カ所を小菅が管理を任されていて、4カ所西原に任されていて、そのことが開拓史に沢筋まで全部載っていて、それを調べていったら、今度土室では小菅の人たちが江戸時代からワサビ田をやっていたと。ワサビ田をやっていたという付け書きが明治33年にあつて、そこに沢の筋の名前と場所まで全部書いてあるのと、調べたやつがばっちり符号して。だから歴史を辿っていくと、そこに刻まれた歴史や文化、暮らしが本当に見えてくるなど。それでワサビの話もこの無人交易を伝わって、国中のほうに送られていったという話が符号するとは。丹波、小菅から車でくるのも大変なのに、昔は丹波小菅の郷からこちらの郷にくることを大峯越えと呼んだそうです。結構、全国的にも無人交易みたいなものはやられていたらしいけれども、ここは非常にはっきりした形で。

手塚

『都留群丹波山村より山梨群塩山温泉へ湯治、相越え、このたび帰村、通すべく候』と。帰るんだから通してくれと。右者は丹波山村百姓、八平太妻と同娘。云々。これは手形をお願いする古文書ということです。当時から塩山温泉は湯治にということも書かれている。御巢鷹山のこともありますよ。一ノ瀬高橋のことであつたり、丹波山村との萩原10か村の境の争いの話しであつたり。

ここは上小田原なんです、大字。しかし萩原口の番所という名称なんです。だから名前変えてくれという要請をしたことがある。けれども、石和の代官所からすれば、大菩薩はまさに萩原山なんです。大字、字萩原山。そういうことだから、たまたま口留番所があるところは上小田原だけれども、いわゆる萩原筋、萩原街道ということだから、今更変えるのも混乱を来すと。だから萩原口番所でやむを得ないと。いうことをいわれた経過もあると。

神金は結構、名主の家が残っています、まだこういうものをきちっと残しています。昔は名主も全部選挙なんです。入札という投票で。長百姓が投票する。そういうことでいえば名主、長百姓、大前百姓、小前百姓というようなランクがあつて、あとは小作。なかなか農業といっても自給自足が基本で、あとは代官所が石高を割り当てて、名主が地域の石高を言われた通りに対応しなければいけない。昔は昔なりに大変だった。昔は石高が基本なんで、米の生産力の高いところはいいが、この辺の峡東方面は北巨摩や中巨摩のへんと違って米があまり取れる所じゃない。だから養蚕がさかんになってきたということですね。養蚕は絹に高く売れるということで。ある意味、銭どりといったが、現金収入が可能な産業の一つとして、峡東方面は養蚕がさかんになった。その結果、切り妻のこういった家が建てられるようになった。それは通風を良くする、寄せ棟だと通風が悪いから。一方切り妻は風通しがいいから、養蚕をやるのにまさに理想の建て方。それと、峡東方面はあまり風が吹かない。北巨摩や八ヶ岳はすごい風が吹くが、峡東は風が少ない。だからきりつまの屋根でも影響が少なかった、ということ言える。これは私の持論ですが、たまたま米所ではないということが養蚕に適しているということ。それが、じゃあ養蚕を飼うにはどういう家がいいのかなというなかで、切り妻造りが発展したと。したがってこの辺の大工さんはみんな、中富、川内から来た大工さん。峡東方面に住み着いて、大工さんになっているのが多い。大工さんとか屋根屋さんとかトタン屋とか、ほとんど出は川内。中富町からきている。川内筋がなぜそういうのが多いかという、やっぱり身延山なんです。必然的にそういう匠が多く住んでいたと。そのたくみが時代、時代に地について技術を伝える。まさに風が吹かないというのは、東電が峡東方面はどうも風がいまいちだと、風力発電するには適さないという感覚をもっているようなんです。そういう立地で風が吹かないというひとつの科学的根拠のなかに、昔の産業というものとそういうものとの関係している。これは私の話ですが。でも史実に基づいてはいます。昔から歴史は人が変えるなんて話し

もありますが、それもありますが、予想だけでは話はできない。

中村

よく調べてられて。九筋の歴史的な背景をさぐったり、江戸時代に江戸が栄えて、甲州街道もできて、甲州街道も裏街道も往来が非常に激しくなってきた。あわせて、江戸以前から要所として江戸に続く相模や武蔵につぐ道が、大菩薩越えとしてあった。三峯越えだとか富士講の道だとか、そういう富士講の碑が小菅にも何か所もある。そういう祈りの道、交易の道、そういう意味で大菩薩の果たした役割、事実をしっかりあきらかにしていければいいと思っています。今日は忙しい中、有り難うございました。



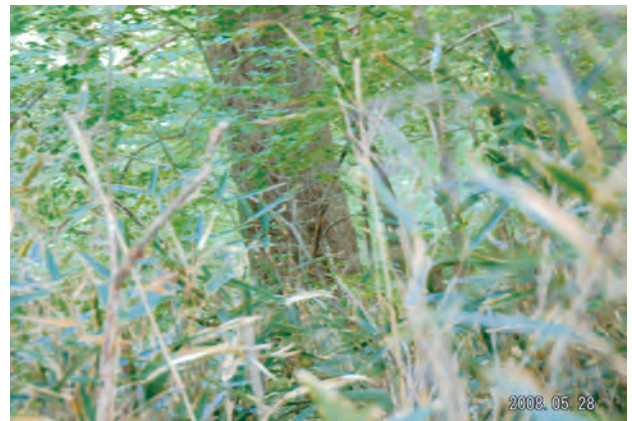




2008年 雄滝上流ゾーン



2008年 雄滝上流ゾーン



2008年 牛ノ尾ゾーン



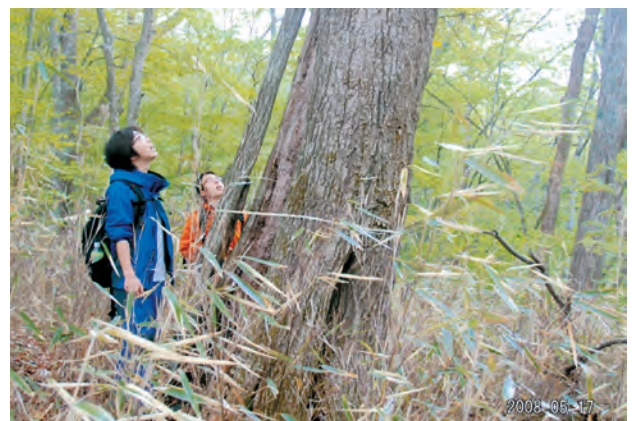




2008年 牛ノ尾ゾーン



2008年 オオマトイゾーン





2008年 鎮守の森ゾーン



2008年 山沢入ゾーン





2008年 山沢入ゾーン





2007年 松姫 山沢入ゾーン





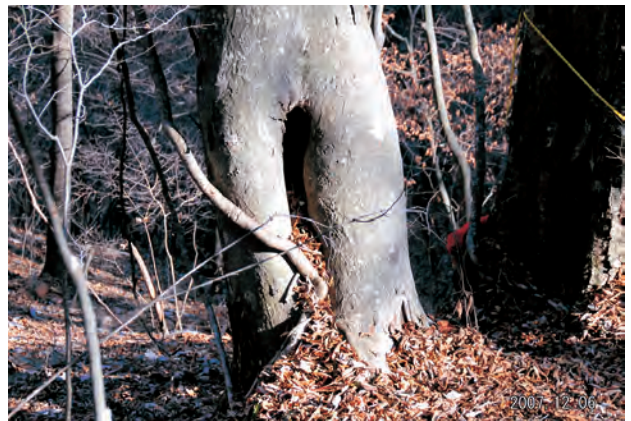
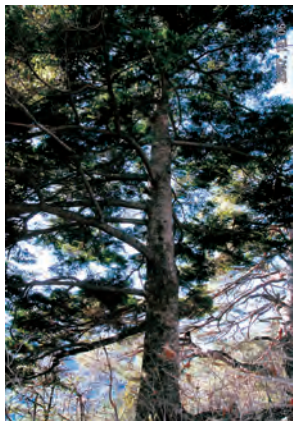


2007年 松姫 山沢入ゾーン

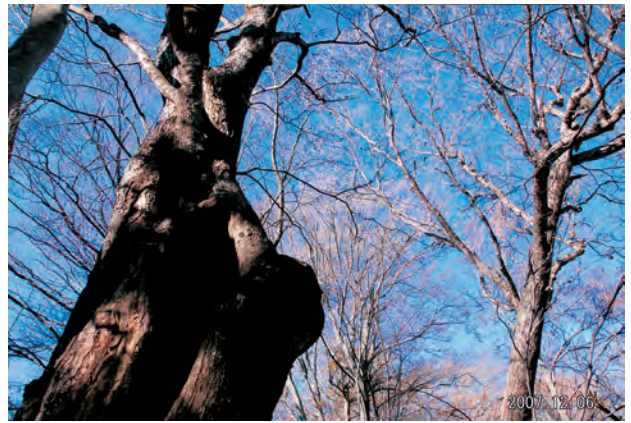


2007年 三頭山 山沢入ゾーン





2007年 三頭山 山沢入ゾーン



2007年 鎮守の森ゾーン





2007年 鎮守の森ゾーン



きよじゆ きよぼくちようさ げんりゆうしげん さくせい  
巨樹・巨木調査と「源流資源マップ」作成

(研究助成・一般研究VOL. 31—NO. 182)

著者 なかむら ぶんめい  
中村 文明

発行日 2010年3月31日

発行者 財団法人 とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv/>